
IS vs DT 呥人よ龍であれ（仮）

マダオ万歳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS VS DT 焚人よ龍であれ（仮）

【NZコード】

N6106V

【作者名】

マダオ万歳

【あらすじ】

かつて偽りの神から世界を護つた咎人たちがいた。彼等はこれから未来を創っていく者たちとそれを支える者たちのためにその命を散させていった。そして、自らが犯した罪を地獄で償うはずだった。しかし、その内の一人が女神と名乗る少女からイレギュラーの始末を頼まれISの世界に行くことになった。少年はその身に救えなかつた者たちと自分と共に戦つて死んでいった英靈たちとの約束を刻み龍の鎧を纏いイレギュラーと戦う。もう、一度と大切なものを奪われないために。

旅立ち（前書き）

ここにお越し下さりありがとうございました。
初めてまして、作者のマダオ万歳です。
こういった一次元創作を書くのはこれが初めてです。
処女作です。駄文です。
それでもいいという方は見ていただければ幸いです。
では、どうぞ!!

旅立ち

ボロボロになつた少年を抱きながら泣いている少年がいた。少年たちの周りには、瓦礫の山が続いている。

s i d e????

「聖火・・・・すまない・・・・。」

ボロボロになつた少年を抱き泣きながら友の名を俺は言つた。

「光秀、最期くらい笑つてくれよ・・・・。」

聖火という少年は、血まみれの手を俺の頬に伸ばした。

「光秀、俺の頼み、聞いてくれないか・・・・。」

聖火の手を自分の手で握りしめながら俺は静かに頷いた。聖火の体のダメージを見てもう助からないと悟つたからだ。

「これから世界を創つていく子供たちとそれを支えていく者たちを導いてやつてくれないか。」

聖火は今にも消えそうな声で言つた。

「・・・・・・・・わかつた、俺が必ず導いてみせる。そして、聖火や先に逝つた者たちのことを絶対に忘れない。そして、この世界を復興させてみせるよ。」

俺は泣きながら、けれど笑顔で聖火に言った。この時の俺にはそう言つてやるのが精いっぱいだった。聖火はふつと安心したような笑みを浮かべた。

(やつぱり、死なせたくない！――)

分かつてる、分かつているのだが・・・・。さまざま思いが胸の内からこみあげてくる。

「光秀・・・・。」

聖火が俺にまた話しかけてきた。

「これが俺の最後の言葉だらう。だから君に伝えたいことがる・・・。」

聖火も自分の死を悟っていた。俺は今にも自分の頬から落ちそうな聖火の冷たい手を強く握りしめた。

「光秀、最期まで俺のダチで、親友でいてくれてありがとう。本当に・・・・。」

ありがとう

そう言い終わると聖火は眠るように静かに目を閉じた。そして聖火の手は俺の手をすり抜け静かに地についた。

聖火

俺はあらん限りの声を泣きながら朝陽で染まる東京の空に向かつて叫んだ。そして、俺の叫びは瓦礫の山とかした東京に響き渡った。この日、人類に全てを奪われそれでも護りたいもののために命を懸けた俺の親友、聖火・バジル・オーガは俺の腕の中で天に召されて逝つた。

S i d e 光秀 e n d

聖火 Side

俺は死ぬのか・・・薄れいく意識の中で俺は思つた。

(これで約束は果たしたが、今そいかで遡へよ……琴

音

そして愛した者の姿を思いながら俺の意識はそこで途切れていった。

どうしてだらう、琴音の声が聞こえる。無理だよ琴音…………もつ俺はつてなんで俺心の中で考えられるんだ。

そして、俺は目を開けた…………。

(リリ、どうだ…………。

第一印象はそう真つ白だ。俺は首を傾げて周囲を見渡してみる。どこまでも白い空間が続いている。

(でもおかしい。俺は確かにあいつとの戦いで最期円を吹っ飛ばして死んだはずじゃ…………。)

直ぐに冷静になれる自分がす”こと一瞬思ってしまった。むくじと体を起こして立ち上がり俺は屈伸をした。

(何故か分からぬいが、生きているらしくな。ま、一応あれやつてみるか…………。)

俺はそう思つと自分の手でまつべたをつねつた。痛い…………。

(うと、間違ひなく、生きてるな。)

そして自分の恰好を確認している。これまでボロボロだった体は傷が塞がっていた。そして、服は黒い服で戦いの後破れていが治つている。

(服はいつも戦いで着るときのジャッケットだが何故ここにいるがある?)

腰に差してある折れた筈の自分の愛刀 曇龍 と足のポケットにしまっている一丁のハンドキャノンを見ながら思った。さらに自分のジャケットがボロボロの状態ではなく新品のようになつている。

気が付いたのですね・・・

・

後ろから聞こえる声に思わず曇龍に手をかけ身構えながら後ろを向いた。そこには、女人の人気がいた。そう、例えるなら女神のような才ーラを放っている人が・・・

・

(こじつは、いつたい・・・

そつ思いながら女性をこらみつける。

「大丈夫です。こちらに敵意はありません。どうか怒りをお沈めください。」

そう静かな目で俺を見つめながら言つた。さすがに丸腰の奴に殺す気は起らず手を刀から外したが警戒怠らずそのままその女性をにらみ続けた。さつきから、何で喋らないのかつて、それは今俺の喉は焼き切れているからだよ。月をブツ飛ばすときには放つた一撃で完全に喉が死滅しているからなんだ。光秀と話せたのも最後の力を振り絞つてようやくだせたのだから・・・。

「今のあなたでは喋ることができないので頷きで答えてください。」

女性はそう言ったので俺はその人の言つとおりにした。どのみちここがどこだか知りたいからだ。

「私は、信じられないでしょうが女神です。」

「おこおこ、まじで俺の予想が当たつちましたよ。」

「あなたに折り入つて頼みがあります。聖火・バジル・オーガさん。どうか聞いてもらえないでしょつか？」

「唐突だな・・・。何故俺のことを知つているのかはあとにしてとりあえず聞いてみよう。俺は首を縦にふつた。」

「「」は、あの世の一歩手前にある場所です、あなたに頼みたい事とこののは・・・。」

「世界を救つて欲しいのです。」

（・・・・・・・・・・・・・・）

「俺は自分のことを女神と名乗る奴を睨み続けたまま黙つてその女の話を聞いた。」

「証拠が欲しいのはわかりますが申し訳ございません。今私のことを女神と証明することはできません。しかしあなたの服や得物などが元通りになつてることで信じてももらえないでしょつか？」

たしかに、死んでさほど時間が経つてないのに体のダメージや服や折れた筈の墨龍が元通りになつてるのはおかしい。それに、一番はあいつの田だ。静かだが、優しく偽りのないまつすぐな瞳。俺はこ

「いつを信じてみることにした。俺は静かに頷いた。

「ありがとうございます。友好の証としてこれを受けとってください。

「あつがとうござります。手の中に何かの機械を持ち俺の前に差し出した。俺は一瞬ためらつたが受け取った。

「それを腕に巻きつけてください。」

俺は言われるがままにその機械を自分の腕に当ててみたら、機械がブレスレットのように腕に巻きついた。

「なんだこれって、喋れるようになつてるな。」

そつその機械から俺の声が機械的な声だが流れていたのだ。

「声帯が何かか・・・。とりあえず礼を言つ。ありがとうございます。」

「いえ、いらっしゃるお願いする身ですから・・・。」

しかし、改めて見るとこの人背が小さいな。150くらいかな・・・。
。それで髪は小麦色のロングヘアだ。

「臂のことは気にしないでください。」

そう頬を膨らませながら女神は言つ。怒りせりやつたかな・・・。
とにかく自己紹介だな。

「知つてこると思つが自己紹介だ。聖火・バジル・オーガだ。」

「私はあらゆる世界を管理する女神、アドニアと名乗つておきましょ。」

「偽名か……？」

「いえ、もともと私には名前がないので用意しておいたコードネームです。」

「そうか……。よしけ。」

俺は手を彼女の前に差し出した。

「信じてくれるのですか。」

彼女は俺にそう聞いてきた。

「たしかに、あんたのことをまだ完全に信じた訳じゃない。でも、あなたの瞳は人を騙そうとしているやつの瞳ではない。それに、俺はもう死んでいる。けれど、役目があつてここに呼ばれたのだとどこかで感じているからかな。」

俺は笑顔で彼女にそう言った。

「ありがとうございます。それでは、これからよろしくお願いします、聖火さん。」

そつ言い終わり俺たちは握手をかわした。

「それで、あなたは俺に何を望むのですか？世界を救つて欲しいと

「このせいで「こいつ」とですか？」

「今から説明するので聞いてください。」

そういふと彼女は一息間を置き話を始めた。

「あなたに言つた世界を救つて欲しいと言つのは私が管理する世界のことなんです。」

俺の世界とは違う、つまりパラレルワールドか……。

「「」の世界では「」、通称インフィニット・ストラトスという、アーマードスーツが存在します。」

「「」のスーツは制圧力、火力、機動力、防御力共に今までの兵器を葛藤するものです。」

なるほど、俺の世界の「」（ドラゴン・タクティカル以下「」）と似たようなものか……。

「しかし、この兵器には欠陥があつて男性には使用することができない。つまり女性しか起動することができないのです。」

「そのせいで女尊男卑が確立男性は翼をもがれ不満が溜りいつ戦争が起つてもおかしくない世界です。」

なるほどな、たしかに「」の登場で世界のバランスが崩れた世界そんな状態じゃ、戦争が起きてもおかしくないな。

「そしてこの兵器は第4世代まで開発されています。そりで形態を

変える」とがでた第一、第一形態があります。」

聞けば聞くほど凄い兵器だと思ってしまった。

「ヤシド、この世界にあるイレギュラーが発生したのです。」

「イレギュラー？」

「は」、そのイレギュラーはまだ身元はわからせんがあなたの世界の兵器を持つてします。」

「とこ、DTかそれともNT（ジヨラシック・タクティカル以下NT）か？」

たしかにその一つなら男性でも操縦する」とができるから戦争の火種にはなるだろ？

「いえ、そのどちらもありません……。」

「では、どういったものなんだ？」

そう聞くとアドリトは顔を暗くしてしまった。

俺の世界の兵器でDTやNTではなく、なつか世界のバランスを変える兵器……。

「おやかとは思ひナビ、その兵器は……、〈キール〉なのか……。」

アドニアは俺の問いに黙つて頷いた。

「嘘だろ…………。」

「そう、あなたの世界で使われ、コーラシア大陸とアフリカ大陸を地獄に変えたウイルス。生き物を殺すことで極上の快楽を得ることができそのせいで殺すことしか考えられなくなりさらに一度死ぬとキメラとなり人の身から化け物に変える悪魔の兵器。」

「ううこの兵器のせいで俺の世界は滅亡寸前まで追い込まれたからである。400億以上いた人口はその数を50億までに減らしたのである。俺の世界で自らを神と名乗つたものが人類を滅ぼし自らの世界を創るために作った兵器…………。」

「EISではあの兵器に太刀打ちできません。」

「だから俺にそいつの始末をしろって訳か…………。」

「うう俺が言つとアドニアは俺に向かって頭を下げた。」

「無理を言つてるのは承知の上です。ですが、どうかお願ひします。あの世界にいる人々を生き物を護つてあげてくださいませんか、お願ひしますっ！」

泣きながらアドニアは必至に言つてきた。俺は少しの空白の後彼女に言つた。

「わかった、引き受けよう…………。」

俺の答えに彼女は頭を上げ信じられないような目で俺を見た。

「たしかにあの兵器とは、もう戦いたくない。あの兵器で多くの仲間を失つた。」

「けれど、だからこそ俺のよしな想いを他の誰かにさせたくないんだ。」

「キールに感染した仲間を討つのはもう俺だけで十分だ。愛する者を田の前で失うのは俺だけで十分だ。」

そして、おれは震えていたアドニアの手を両手で優しくもち言つた。

「俺に出来ることがあるなら力にならう。」

アドニアはそれを聞くと笑顔でお礼を言つた。

「ありがとうございます。そう言つていただけてとてもうれしいです。」

するとアドニアの手が光出したのだ。とても暖かい光だ……。

「あなたに力を授けます。受け取つてください。」

すると俺の後ろに全高40メートルくらいで恰好は昔の侍のようで黒いマントを付け頭は龍で鬼のよしな一本の角を付けている物体があつた。

「ディストラクションか……。」

そう。それは、かつて自分が使つていた機体、創生破壊神である靈獣神の死骸と古代のオーバーテクノロジーを融合させて創られた靈

龍神器。サイボーグの「トイストラクション」だ。

「そりゃ、私たちと同じ神という存在。それとあなたの世界でかつてあなた自身が封印した『龍の巣』を託します。」

「龍の巣……まさかあれまで用意できるのか……。

「すまない、そこまで用意してもいい……。しかし、ゼリヤリヒトで龍の巣を……。」

「あなたの封印した場所から転移をせます。」

「もう何でもありだな……。」

ため息交じりでアドニアにヒヒヒヒヒヒと苦笑いで返した。

「そりゃいえ、何で俺の名を知つてたんだ?」

「あなたの世界で死んでいた英靈たちが教えてくれました……。」

「そうか……。」

俺ははじこか遠くを見るよつた声でそりゃひついた。

「時間です。今からあなたを転生せます。」

そつ彼女が言うと扉が俺たちの前に現れた。

「転生したら俺は何処にいるんだ?」

「日本の山中です。大丈夫です。人が普段近寄らない場所ですから。」

「心配だ・・・・・。じや顔をして胸をはつてているアドーナを見て思つてしまつた。」

「龍の巣はステルスマードで日本の海溝に沈めてあります。座標をディストラクションにインプットしておきます。」

「ありがとう。」

そう言つと俺はディストラクションに乗らうとしたのだが、急にディストラクションが光粒子となつて蒼色の勾玉になつたのだ。

「これは・・・・。」

「EISの待機状態です。あなたが念じればEISとして装着できます。また、通常の大きさではあまりにも大きすぎるEISサイズにしてあります。あなたが望めば元の大きさに戻すことも可能です。」

「わかつた・・・・。」

そう言つ終わると俺は勾玉を首に下げ扉に向かつて歩きだした。

「あー、最後に頼みがある。」

俺はアドーナの方を振り向いた。

「わたしにできる」とがあれば・・・・。」

「俺の世界で人類のために命を散らせていつた英靈たちに鎮魂歌を奏でてやつてくれないか。」

「わかりました。必ず……。」

それを聞くと俺はドアノブに手をかけた。

「あつ、もう一つあつたがいいか……。」

「なんでしょう。」

「御上 琴音という女性に伝えてほしい。そつちに逝くのはもう少しかかるからすまないが待つてくれってな……。」

アドニアは黙つて頷いた。

「ありがとうございます、それじゃあ……。」

行つてきます

そう言つと俺は扉を開けドアの光の中へと歩いて行つた。

side聖火end

Sideアドニア

「頼みましたよ。聖火・バジル・オーガ。黒き破壊の龍神さん……。」

すると後ろから青色のショートヘアの女性が歩いてきて。

「良かつたのですか？　あの人にはわざにいて……。」

私がそう言つと女性は言つた。

「今会えれば彼も私も絶対に我慢できなくなる。だからこそまたここに戻ってきたときに、笑顔でおかれりつて言いますから……。」

「いい女性をお持ちになつたのですね、聖火さんは……。」

「アドニアさん、聖火のことを頼みます。」

「もちろんですよ、御上　琴音さん。」

そして私たち二人は共に笑みをこぼした。

この物語は正義に全てを奪われた龍を纏いし咎人が異界で紡ぐ優しき物語。彼は命を懸けて人類を護るだろう。

それは、救えなかつた多くの命と彼と共に戦つてその命を散らせていつた英靈たちとの約束を胸にきざみつけているからだ。

だからこそ、人は知るであろう。戦いとは何か、力とはなにかを・・・・・。

さあ始めよう。傷ついた咎人はいかにして世界を救うのか共に見守る・・・・・。

旅立ち（後書き）

いかがだったでしょうか。
指摘などじやんじやん言つてもらえれば幸いです。
感想などで書いてください。
これからもこの作品とダメ作者を暖かい目で見ください。
次は主人公と主人公機体と龍の巣について書こうと思います。
では、次の更新でお会いしましょう。
それでは！！

いろいろな設定集です。

長いです。

すいません。

では、どうぞ！

設定1

聖火・バジル・オーガ

性別 男

身長 177cm

体重 67kg

目の色 赤

髪 黒のショートヘア

歳 15歳（本当は21歳）

履歴

本作の主人公、かつて偽りの神との激しい戦闘の末倒し自らもその代償に死ぬはずであったが女神の頼みにより転生することに。性格は至つて温和であるが一度戦うと決めたらことん強い。喉が焼き切れているため女神からもらったアイテムにより言葉を辛うじて話せている。また、目が靈龍神器に長い間乗っていたので龍と同じような目になっているため普段はサングラスをかけている。またその影響で胴体視力や反射神経、肉体自身が強化されてあり生身でISと戦える。

過去に、多くの仲間を失つており正義や力を美化している者を嫌つてゐるが滅多に口に出さない。その分多くのことを経験している

ため一夏たちの悩みの相談役になつたりしているが時々ドＳになつたりもする。一夏たちのドタバタに巻き込まれる苦労人である。基本的に初対面の人や目上の人には敬語を使つてている。学園に入学する際にアドニアに頼んで15歳の時の体にしてもらつているが身長や体重は変化せず少しだけ同年代の男子より大人びた感じになっている。

日本刀 曇龍

永久の鋼という特殊な物質でできている。ISなどと互角に渡り合うことができる。

ハンドキヤノン 風天、雷天

永久の鋼でできたハンドキヤノン、威力が凄まじく聖火以外には扱えない。

オリジナル機体

靈龍神器 創世破壊神 ディストラクション

近接戦に長けている。全体的には幕末頃の侍の恰好に黒いマントを付けたような姿をしており所々に青いラインが入つて。顔は龍で所々に機械の部分がある。コアには靈獸神の心臓がそのまま使われている。かつて靈獸神と呼ばれた龍の死骸と古代に滅んだオーバーテクノロジーを融合させて造られたサイボーグ。コックピットは

なく、靈龍神器の適合者は直接、靈龍神器と融合する、獸魂一体のためダメージが搭乗者に直接反映される。また、「始まりの焰」という特殊スキルを持つているが内容は現時点では明かせない。長い間搭乗していると、だんだんと人間としての理性を失っていき、最後には暴走を起こしてしまう。鎧や武装には「永久の鋼」を使用しているため通常の手段では倒すことができないが「永久の鋼」同士や「龍神の鋼」で何回か切りつけていれば破壊することも可能だが靈龍神器の持つ特殊スキルによつて事実上は止めるることは出来ても撃墜することはできない。

近接ブレード 疊龍

疊龍がそのまま大きくなつたもの。

重火器

ハンドキャノン 風天、雷天

上記と同じだが弾がレールガンになつてゐる。

单一使用 死者の日

まだ秘密です。あえて言えるとすれば幻術っぽいものです。

特殊能力 イカロスの翼

背中に白い骨が左右に二本ずつ生えそこから青い炎の翼ができる機動力が著しく上がる。

DT 機械龍神器 ドラゴン・タクティカルについて

全高20～40メートルの大型機動兵器、特徴は、ボディーは人間のようだが頭部が龍のような形をしている。陸、海、空、宇宙での戦闘が可能。あらゆる兵器を葛藤できる最強の兵器。

神靈地より発掘された靈龍神器を元に、6500万年前に絶滅した龍の体の一部と「龍羅の書 傀儡の章」を解読して生み出した特殊人工筋肉と特殊人工心臓、また機体の骨組みであり劣化してしまった龍の骨を補うための人工骨などをベースに、機械制御可能な寄生機械植物マンドラゴラの種を完成した機体に植え付けることにより機体中に神経や血管のように根が伸びていきその中にはDNMが流仕込むことによって、それが機体全体と連動し人間と同等の動きを可能にしている。

また人工心臓などだけではシステムを連動することはできなかったためDNMの制御やシステムの運用などを行うAI、人間で言う脳の機能が組み込まれている。装甲には、「龍羅の書 灵鎧の章」と神靈地から発掘された靈龍神器の装甲などを解析し生み出した、「偽りの鋼」と「龍神の鎧」を使っている。

また、飛行する際に飛翔ブースター意外に機動力を上げるため龍の羽から作られた人口翼などを搭載した機体も存在する。また、従来の機動兵器とは違い直接制御のためレバーが存在せず自分の手足のように動かすこと可能。そのため、DTと自分との動きを連動させることでマンドラゴラがパイロットスーツに根を伸ばし一時的にパイロットと間接的融合を行いパイロットの動きを機体に連動させて

動かしている。

DTは現在第4世代まで開発されており通常装備としてレールガンの知識を応用して作られたレーザーアサルトライフルやレーザーマシンガンやレーザーハンドガンの雷雨4式、雷蓮3式、雷砲5式を通常装備としている。また国」とい、偽りの鋼や龍神の鎧でできた長剣、薙刀、槍、ランス、ハンマーなどの近接武器も装備している。

また、Gが激しいためコックピットには龍とともに発掘される龍の体の保存を行なっていたあらゆる衝撃などを無効にする繭を解析し創つた「ゆりかご」を使つている。

燃料には、DNMに心靈地で採取され量産に成功している植物「ラフレシア」を高密度に圧縮してとれたバイオ燃料を使われている。このエネルギーは、古代に靈獸神が使つていたとされるエネルギーで爆発的なエネルギーを得ることができる。

欠点は撃墜されたときに流れ出るDNMは生物にとても有害で大に地に触れた場合、その土地での生活は困難になり、汚染を除去するには何年も時間を要する。

第一世代 人間に近い動きが可能で理論上あらゆる兵器を圧倒できる。しかしながらゆりかごを搭載しておらずGが激しいため人が乗れるようなものではない。また、DNMも機体稼働中に暴走したためこの時点では兵器としての見込みはなかった。コックピットはまだ直接制御ではない。

第一世代 陸、空での戦闘が可能になり試作型のゆりかごを搭載しGをわずかに軽減することに成功。また、ゆりかごを搭載した試

作機は直接制御仕様となつてゐる。初めて実戦に投入された世代。人間と同等の動きが可能になりDNMの暴走も沈静化することに成功したが未だに不安定な部分がある。装甲には「偽りの鋼」を使用している。

第二世代 陸、海、空、宇での戦闘が可能。DNMにあるモノを加えることによって暴走を完全に沈静化することに成功した世代。この頃から本格的に量産に成功した「ゆりかご」を配備し始め直接制御の機体が増えた。また、エネルギー切れを起こさないように予備燃料のためにバイオ燃料を特殊粒子に変換した「鉢巻」や「兜」など、様々な形にして装備するようになつた。

第四世代 対靈龍神器用に開発された軍のエース専用の機体。装甲や武装には「龍神の鋼」を使用し、「永久の鋼」で作られた武装や装甲に耐え、破壊することも可能となつた。また強暴という機能を搭載しており強暴発動時には疑神という力を発動でき機体の伝達率を二倍に上げ非現実的な動きを可能にしているため靈龍神器と互角に渡り合える事が可能となつた。また、またレーザーやレールガンの類では「永久の鋼」でできた装甲には通用しないため「龍神の鋼」を使用した特殊弾頭を装填した重火器なども開発された。

ZT 機械恐神器 ジュラシック・タクティカルについて

DTの技術を応用して開発された人型機動兵器。第三世代のDTの開発と並行して行われた。特徴は人間の体を持ち恐竜の顔をして

いる。DTと違い恐竜の骨を分析して生み出した特殊人工骨を骨組みに使っている。また、「マンドラゴラ」にはDNMの代わりに氷の中に封じられていた恐竜のDNAを解析してナノマシンを使って制御させた「太古の血」が流れている。太古の血は、DNMよりかは性能が少し落ちるが量産が遙かにしやすく、生物に対しても殆ど無害である。そのためDT自体もDTより量産がとてもしやすくなっており修理もDTよりは簡単になっている。DTと同じく燃料やコックピットにはバイオ燃料や直接制御となっている。

第一世代 DTの構造を基に試作人工骨使い動きを人間に近づけてはいるがゆりかごを搭載していないためまだGが激しく兵器としては全く使えない。この頃は、まだDNMを使っていたため人工骨との拒絶反応やシステムトラブルが激しく稼働時間は持つて10分だった。

第二世代 完成した人工骨を使い人間と同じ動きを可能にし、試作型のゆりかごも搭載されGを軽減することに成功したが未だに拒絶反応とシステムトラブルの問題は解決しておらず稼働時間も第一世代と同じく10分で兵器としての使用は出来ない。

第三世代 この頃からDNMの代わりに試作型の「太古の血」を「マンドラゴラ」に流し込むようになった。それにより、今までに起こっていた拒絶反応が少し消え、その分だけ稼働時間も伸びつていった。

第四世代 完成版の「太古の血」を使い完全に拒絶反応やシステムトラブルが消えた。そのためこの世代になつてようやく実戦投入されるようになった。陸戦を得意とし陸戦ならばDTを圧倒することができる。装甲には「偽りの鋼」を使用している。

第五世代 対靈龍神器用に開発された世代。DTの第四世代と同じくヒース機で装甲に「龍神の鋼」を使用し第四世代のDTと互角の性能を持つ。本能と呼ばれる特殊スキルを持ち、搭乗者の精神に「太古の血」が呼応してDTの機動性を上げることができ靈龍神器と互角に戦える。

龍の巣

日本の東京と同じ大きさを持ちその中に人間が生きていくために必要なものがすべてつめこまれており、形はウミガメの用になつており甲羅の部分に町がありその町を永久の鋼で出来た甲羅で覆つてある。また、この中でDTなどの兵器なども開発が可能。基本陸と水中、空中でしか活動できない。

偽りの鋼について

永久の鋼を人間が劣化して再現した物、永久の鋼は再現するのが難しく人間が手を加えて劣化させたもので兵器や町のいたる所で使われている。本家には届かないがそれでも兵器の流要請は極めて高い。永久の鋼の武器としての転用方法は龍羅の書に記されているといわれている。

永久の鋼について

けつして朽ちることのない半永久的物質でありDTやNTの装甲に劣化した物が使われている。靈獸神の力に特殊な鉱石が反応してできたとされている。兵器としての凡庸性が高く光学兵器を全て無力化することができる。

龍神の鎧について

日本が開発に成功した物質。永久の鋼により近く光学兵器も何度かなら出力に関係なく耐えられる（しかし、あまりにも強いると碎けてしまう）。永久の鋼に傷を入れることも可能である。しかし、生産が難しく第四世代DTと第五世代のDTのエース機などに使われている。偽りの鋼にある物を加え特殊な方法で加工して生まれた。

龍羅の書

靈獸神のことについて最初にコントラクトした人間たちがまとめたもの。内容は様々で靈獸神の持っていた知識や技術が記されており、また彼らの伝説が人間側の解釈で書かれている。またこの中にはとある予言も書かれているが今はまだ明かせないが全平行世界を巻き込むほどのものである。

龍と恐竜について

古に龍と恐竜の二種類の巨大生物が存在していた。龍と恐竜の違い、見た目は似ているが龍のほうには羽が生えており、強い龍には自然の一部が操れたりした。しかし、6500万年前に突如としてこの地球から絶滅した。恐竜は化石になつたが龍は体の一部が繭に包まれて現代まで残つている。

第四世代 機械龍神器 DT 旋風 ジャンヌ・ドローヌ使用

第4世代型のDT。中世の騎士の鎧を纏い胸当ての部分に小麦色の羽の文様がある。全体的には銀色で黄色の細いラインが入つてい

る。バランスタイプで中距離と近距離戦闘を得意とする。また、搭乗者はゆりかごに乗っているためGをほとんど感じることなく操縦が可能。背中には小型の細長い一本の飛翔ブースターと鳥龍種の翼がついている。顔は甲冑で覆っている。見た目は中世の騎士に龍の顔と鷲の翼を背中に付けた感じです。

武装

近接用

聖母の盾 × 1 (悠久の鎧使用)

ボルテック・ランス (悠久の鎧使用)

サバイバルナイフ (龍神の鎧使用)

遠距離用

雷蓮 3式 × 1

雷蓮 4式 × 2

雷砲 5式 × 2

特殊能力 狂暴

対人制圧用 第四世代 機械恐神器 ZT ヴェロキラプトル アサシンタイプ

第4世代型の小型Z.T。屋内や狭い場所での戦闘を担う役割を担っている。それぞれの役割ごとにタイプが分かれており、戦場に投入するタイプをウォーリア、強襲や、潜入などのさいにはアサシン、遠距離からの支援や味方への援護射撃などはスナイパーとなる。装甲には偽りの鋼を使用し、量産しやすくしている。

特徴は、全て無人で、人工知能のAIで動かす場合と遠隔操作する場合に分ける。主に人員の削減を目的に開発された。大きさは3メートル弱で素早い動きが可能。陸戦と水中戦に長けている。空、宇宙の戦闘の場合特殊な小型ブースターの搭載が必要。今回一夏たちを襲つたのは空戦を想定したタイプである。

武装 アサシン

クナイ（偽りの鋼使用）

手裏剣（偽りの鋼使用）

鉤爪（偽りの鋼使用）

太刀（偽りの鋼使用）

小雷砲（小型特殊レールガン筒）

第2世代IDS打鉄 飛龍式 インフィニッシュ・ア・ストラクタス

打鉄を基としてDTの技術と融合させた機体。ISのコアから人工筋肉と直接連結してDNMの役割を果たしている。従来のISとは明らかに異なります、全身装甲である。またシールバリアと絶対防御が存在しない。しかし、そこは龍人の鎧や永久の鋼でカバー

している。機動力が高く、準第五世代のIDSと互角に戦うことができる。弱点は背中の飛翔ブースターは前身と静止しかできないため出力を弱めたり、翼を使うことで相手の攻撃の回避や停止を行う。また、装備できる数が限られており装備可能な武装は4つと限定されている。男性でも操縦が可能。恰好は、戦国時代の武士の鎧に薄茶色の膜の龍の翼を付けた感じです。顔は機械の龍で、本人の意思で兜や鉢巻を付ける。また口の中には炎弾と呼ばれるものが装備してあり、火炎弾を発射できる。

武装

雷蓮4式 × 1

雷砲5式 × 1

薙刀（龍神の鋼使用）

IDS用特殊日本刀 × 1 （龍人の鋼使用）

炎弾

これから名前を出そつと思っている靈龍神器

機空の龍神 デウス（仮）

守護の龍神 ガーディアン（仮）

舞武の龍神 アシヴァ（仮）

太陽の龍神帝 シャイニング・ファーフニル（仮）

設定集1 隨時更新中（後書き）

DTやNTの武装はまだ考え中です。

御免なさい。

感想、指摘、意見などお待ちしております。

では、次回の更新で！！

母の思いと願い（前書き）

今回はシャルロットの母親に主人公が接触します・・・・・。
では、どうぞ！

母の思いと願い

聖火は今現在、山中を歩いている。しかし、日本の山中ではない。

彼は今フランスの山中にあるのだ。何故そんなことがわかるのかというと、聖火がこちらに転移してしばらく歩いていると風に乗つて新聞が飛んできたからだ。

(付いてるな、これでこの世界の今の状況を確認できる。)

そう、この世界の大まかな状況はアドニアから聞いていたのだが
現在進行形で進んでいる世界状況は聞いていなかつたからだ。そして、飛んできた新聞に向かつて空中ジャンプしキャッチした。そしてそれを開いて読んでみると・・・・・。

「フランス語だな・・・・・。」

使われていた文字がフランス語だつたのだ。聖火のいた世界とこちらの世界では使われている文字が同じだつたので聖火にも読めたのだ。ちなみに、あと英語、中国語、ハングル、ドイツ語、日本語などが分かる。そして今にいたる。あのドヤ顔幼女の女神アドニアに向かつて叫ぶ聖火の姿がそこにあつた。

「畜生、あんなに自信満々に言つてた矢先にミスしてると・・・」
「この分だと龍の巣も心配だな。」

頭に手を当ててため息を漏らしてしまった。そんなことしていても状況は進展しないのでとりあえず新聞を読んでみることにした。

聖火現在情報を取り込み中・・・

ある程度読み続けて、ある程度の知識を詰め込んだ聖火は新聞をポイ捨てして再び歩き始めた。

つまり、整理すると、今TISの量産が世界第三位のデュノア社が第三世代の開発に着手したのか。」

「Jのデュノア社は今量産型TISの開発世界第三位だったのだ。こういう兵器を開発する会社というのはおそらく裏では、陽に当てられないようなことをしているのだろう・・・。そんなことを内心思いつつ歩みを止めない聖火。さつきジャンプした時に紫色の花がたくさん咲いてあつた畠のような場所が見えたのでそこに行つてみることにしたのだ。

「畠があるつてことは誰か人がいるはずだ・・・。」

そう考え行つてみることにしたのだ。

歩くこと10分、木々の間から光がもれていた。そして、さらに歩くこと5分、山中の森から抜け広い場所にでたのであつた。聖火の眼前には紫色の鮮やかな花の畠が広がっていた。甘酸っぱい臭いが彼の肺を満たしていく。

周りを見渡してみると協会のような建物があった。今の時刻は2時、月明かりが彼を照らして影を作っている。

「この時間にこんな男が来たら怪しむだろ……。」

それにこの目と喉は今この世界の人間に見られるわけにはいかない。そう思い名が焼き切れている喉に手を伸ばした。

（どうすればいい？）

そして自分が持っている物でこの状況を開拓できるものをさがしてみた。

（今俺の手元にあるのは待機状態のディストラクションと疊龍、雷天に風天、それにその弾だけだしな……。）

他に何か無いのかと自分のポケットに手をかけた。

「んっ？」

中に何か入っていたので取り出した。

「あの人、こんなものを用意する暇があるならもつとじりやんとしてくれよ。」

それは、この状況を開拓できるものであった。聖火はニヤリとほほ笑む。周りに人がいたら絶対に不審者扱いされたであろう……。そして、彼は協会に行くための支度をしだしたのだった……。

s i d e ? ? ?

私はジヤンヌ・ドローヌです。今娘が街の友達の所に泊まりに行っているので一人です。こんな広い家に一人なので少し寂しいです。

（もうすぐ、あの子ともお別れなのね・・・。）

そう、私は難病を患つておりそのせいで家から出ることができないのです。それが、原因で本当は私も娘のシャルロットと共に泊まりに行くはずだったのだが一人で行かせたです。

最初はママと一緒にないと嫌だつて駄々を捏ねていたが私が何とか説得して行かせました。そう、

昨日医者に余命2か月を言い渡されたからです。もちろん娘には言つていなければ帰つてきたら伝えようと思つています。分かっています。このことが14歳の彼女にとつていかにつらい現実か・・・。けれど、私はあと二か月すれば死んでしまう。その前にちゃんとあの子に伝えなければ・・・。

この日の月は私には寂しげに照らしていふに思えた。あの子と一緒にこれからも生きていきたい。どうして運命とはここまで残酷なのだろう・・・。私は心の底から神を呪つた。私は人知れず涙を流していた・・・。こんな姿を、あの娘には見せたくなかつた・・・。

「ゴメンね、シャルロット。あなたと一緒にいられないお母さんを許してね・・・。」

私の夜は「いつやつて無常に過ぎたがれなかった」だつた……。

一階のロビーで一人悲しみに暮れていると、

「ハハハ

玄関の扉を優しくノックする音が屋敷内に響いたのだった。

ハッと、私は泣くのを止めた。

（「こんな時間に誰だらけ…）

時計を見てみると、針が夜の10時を指していた。

「聞き間違いかしら……。」

そう思つてみると、

「ンンン

また優しく扉がノックされた。

（やつぱつ、誰かいる……。）

こんな時間だ、もしかしたら泥棒かもしないと私は思い近くにあつた鉄のパイプを持って玄関の前に立つた。

「どなたですか？」

私は尋ねた。

「夜分遅くに申し訳ございません。私、旅の者です。道に迷つてしまつてここで一晩泊めていただけでもらえないでしょうか？」

男の人の声だ・・・。けれど、声が機械みたいですね・・・。

私はさらに不審に思つた。そんなことを最初は思つていた私ですが、（もう今更、殺されたつて死ぬのが遅いか、早いかですよね・・・。）

この時の私は自暴自棄になつていていたので、あっせりOKしてしまつたのです。

「わかりました、今開けます。」

「ありがとうございます。」

そして、私は鍵を開けて扉を開いた。

この時は、まだ私に知るすべもなかつた。この扉の先にいるのが私にとっての救世主だつたことを・・・。

そこにいたのは男性と思しき人物でした。黒いズボンと黒い服、黒いジャケットを付けた人物で首から目の人まで包帯をしており、黒く青いラインの入った鋭いサングラスをしている、身長180位の人物です。

「大丈夫、あなたに危害を加えることは致しません。」

機械的だがそれでも分かるぐらい優しい声だと私は感じてしまった。

「わかりました、では、中にどうぞ……。」

私はその人を家に入れた……。

s i d e ジャンヌ e n d

s a i d 聖火

何とか入れてもらえたか……。俺は内心物凄くホッとしていた。

（よくこんな怪しさの塊みたいな人物をいれてくれたな。）

その後、ポケットにあつた封筒のようなものがあつて中にサングラスと何かの文字が入つた包帯が女神の手紙付きで入つてあつた。

聖火さんへ

田と首の傷を隠すためにサングラスと力の暴走を抑える包帯を入れておきます。

女神より

手紙書く余裕があつたならちゃんと指定した場所に転移させてくれよと、心の中で愚痴を垂れていた。

中に入れてくれたこの女性はジャンヌという女性でブロンドヘアーのとても美しい女性だ。ナンパされやすそうな外見だな・・・。

ジャンヌさんは、俺にシャワーを貸してくれ、上がった後、暖かいスープが用意してくれた。

ロビーは暖炉とテーブルがあり俺はテーブルに座らせてもらつた。ジャンヌさんは向かいの席に座つた。

「こんな見ず知らずの人間を受け入れてくれてありがとうござります、ジャンヌさん。」

俺は口の部分の包帯を起用にその部分だけずらして飲んでいく。

「いえ、困ったときのお互い様ですよ。」

「どうが、悲しげな笑顔で俺に言つてきた。

「どうして、そんな悲しい顔をするのですか？」

そう、今のジャンヌさんはとても悲しい顔、そつまるで全てに絶望したかのような感じに思えたのだ。

ジャンヌさんは、カップを両手に握りだまま俯いていた。

「よかつたら、お話を聞かせてもらつていいですか？」

すると、ジャンヌさんは驚いたような顔で俺を見てきた。

「もし、一人に悩んでいるの第三者にいろいろな意見を聞いてみてはどうですか？」

俺は優しく語りかけた。カップのスープはまだとても暖かく湯気がホワホワとでていた。

少しの間の後、ジャンヌさんは俺に自分の全てを語つてくれた。・
・
・
・
・

side聖火end

sideジャンヌ

私は全てをこの人に話した。全てです。家族のこと。愛人であるデュノアのこと。シャルロットのこと。病気のこと。

今まで誰にも話せず我慢していたことが一気に滝のように溢れ出したのだ。この人には、なんだか話せそうな気がした。全て受け入れてくれそうな気がした。

心の弱つていた私には拠り所が欲しかったのかもしない。

デュノアもやり逃げだしもう私の人生は最悪だった。でも、シャルロットを産めたことが私の人生の中でも最も幸せだったかもしれない。

気づいたらまた涙を流していた。もうこの感情は止められない。

あの子と一緒に生きたい

私は、前にいる男性に構わず声を上げて泣いた。

ぎゅつ

突然向かいにいた男性が私のところにきて優しく胸に抱き寄せてくれたのです。

「えっ、 ちょっと…！」

急なことだったので体に力が入りませんでした。

「生きたいのですね。」

男性は優しく私を抱きしめてそう言いました。

私は最初は戸惑っていましたがしばらくの後に

「私はあの子と共に生きたいです。」

男性の胸の中で私はそう言いました。

「わかりました。」

男性はそう言いました。

「無理ですよ、私の病は医者でもお手上げと言われた難病ですから。

私がそう言つと彼は私の目に向かつてまつすぐ見つめ、「いつ言いました。

「私が治してみせます。」

「私と彼の出会い」を後の人々は「聖母と答人の出会い」と呼びました

母の思こと願い（後書き）

すいません。

長かったです。 シャルロットの母親の名前は公式に出てなかつたので私が付けました。 すいません。

本編に入るのはまだ少し先です。

次回、ジャンヌさんに光を灯します。

では、また次の更新で！！

聖火の血、母の願いは龍に聞き届けられた（前書き）

聖火の血はチートです。

この血のことはまた別の話で書きます。

この話ではシャルロットの母は生きます。

やつ過ぎました。

すみません。

では、どうや！

聖火の血、母の願いは龍に聞き届けられた

sideジャンヌ

私は最初彼が言っていることが分からず呆然としていました。私の病気を治すと言つたあと、キッチンを借りたいと彼は言いました。私は、まだ状況について行けてなかつたのでコテンと首を縦に振りました。

そして、私はそのあとリビングのソファーに寝かされて今に至ります。

絶賛、恥ずかしがつています。クツシヨンを持つてソファーでグリグリしています。見ず知らずの人にもしかも、私はデュノアのコネを持つ人間、近づく、男性が多い。しかも、全部他の企業の回し者や財産目当ての人間でした。私は、すぐにその類の人間だと普段はわかるのですが彼からはまったくそんな感じがしないのです。デュノアの名前が出たとき本当に驚いているように見えました。しかも、彼の言葉は他の男とは違う、上辺だけの言葉ではない、本当に心の底から私のこと心配してくれていたように、思えたのです。

私がそんなことを思つて いると 彼が キッ チンから 出てきたのです。
その手には、ワインの ような 物を いれた グラスを 持つ ていました。

飲んでください。

彼は私にそう言いました。

「これは……」

そのグラスを渡され臭いを嗅いでみた。普通のワインと同じだが若干臭いが違うのが分かった。

こんなもので本当に治るのだろうか？今まで、辛い治療をしても治らなかつたこの不治の病が治るのか、私は不安を覚えてしまつた。もし、この人が嘘をついていたら、これがもし毒だったら……。

「ジャノスさん・・・・・」

そんなことを考え俯いているとふいに彼の言葉が聞こえ私は彼を見ました。その瞬間、私は思わずグラスを落としそうになりました。彼はサングラスを外していました。そして、その目を見て思いました。人の目ではない。そう、例えるなら伝説などに出てくる龍の目をしていましたからです。私は思わず恐怖してしまいました。

ピタツ

彼は私の手を優しく包み私の目を見て下さいました。

「あなたが誰からも見放されても私はあなたを見捨てない。だから、私を信じて欲しい。」

とても強くまっすぐした偽りのない目、しかしどこなく悲しさを秘めている。もう、医者にも神にもすがった、しかし、誰からも見捨てられた。

私は彼に懸けてみることにしました。

その後、私はグラスの中のワインを一気に飲み干しました。その瞬間突然眠気が襲ってきたのです。私は、意識を保てずそこで眠りに落ちました。

sideジャンヌend

side聖火

「これで、大丈夫だろ……。」

俺は、眠りについたジャンヌさんに自分のジャケットをかけた。それにしても、ベタな発言だったなー。自分でも思つてしまつぐらいだった。

ピチャツ

俺の腕から静かに血が垂れていた。そう、さっきのワインに入れたもの、それは俺自身の血だ。俺の血は、いや俺と同じ民族の血はあらゆる傷や病、ひいては化学兵器などで精神崩壊を起こした者の心をも癒すことができる。この血とキッチンにあつたワインを混ぜて飲ませたのだ。これで、もしジャンヌさんの病気に効くのなら朝には治つてるはずだ。そう思いながら血のついていない手で彼女のブロンドヘアを軽く撫でた。サラサラしていて気持ちが良かつたのは余談である。

その後、俺は寝ているジャンヌさんを起さないよつて墨敷の外から出て、昇つてくる朝陽を眺めている。陽が森や畑の花を照らしている。甘酸っぱい臭いとひんやりとした朝の空気が俺を満たしていく。

(そういえば、あの時もこんな朝だったな・・・・・・。)

泣きながら俺のことを抱き上げる自分の親友のことを思つて泣きながら俺のことを抱き上げる自分の親友のことを思つて黄昏ていた。

「親友に見送られて死ねたなんて、俺は幸せ者だな・・・・・。

」

そんなことをぼやいていた。これで良かつたんだよな、琴音。

小鳥の鳴き声が聞こえ朝もやのかかる畠に響いていた。

「あの～・・・・・。」

そう声をかけられ俺は後ろを振り向いた。俺のジャケットを上から被り立っているジャンヌさんがいた。朝陽に優しく照らされるその髪は可憐に輝いて思わず見惚れてしまいそうだ。そして、彼女は俺の方に歩みよってくる。歩き方が昨日よりはるかにスマーズなど見ると体の方は大丈夫みたいだな。顔色もまだ眠そうだが昨日よりもかなり良くなつており、スッキリとした感じがしていた。

今まで、我慢していた不満が全て昨日の内に吐き出せたので余計に元気に俺には見えた。

「具合はどうですか？」

「昨日より、体が軽くて今まであつた吐き気や頭痛が消えました。」

「う、言い俺の隣にきて朝陽見ながら彼女はそう言った。」

「おそらく、あなたをむしばんでいた病は完全に消えましたよ。」

「おさらば、あなたをむしばんでいた病は完全に消えましたよ。俺がそう言つと彼女はまた驚いたように俺を見た。」

「もし、心配なら医師に診てもらえばいいですよ。」

「そう言われ彼女は目に溢れんばかりの泣みだを浮かべていた。」

「あなたの願いは、龍に聞き届けられたのですよ。」

「俺は優しく彼女に微笑んだ。」

「何故、そこまで私のためにしてくれたのですか？」

「彼女は溢れる嬉し涙を抑えて俺に尋ねてきた。」

side聖火end

sideジャヌヌ

私は、わからなかつた。どうして、見ず知らずの私にここまで

してくれたのか。そうして私が彼に尋ねたとき彼はこう言いました。

「困ったときは、お互い様って言つたのはあなたですよ。ジャンヌさん・・・」

彼は優しくまた私に微笑んでくれました。その瞬間、私は彼に抱きついてしまった。デュノアにもこんな優しく言われたことがなかった。生まれて初めて、父親以外の男性にこんな心の籠つた言葉を言われたことが嬉しくてたまりませんでした。私は彼に構わず彼の胸の中でまた泣きました。

すると、彼は優しく私の頭を撫でてくれました。

そして、あのワインについて尋ねた所自分の持っていた秘薬をキツチンにあつたワインと混ぜたらしく、どんな病でも治す力があり予備が手元にあつたから使つた言いました。私は彼に深々とお礼を言いました。あと、この薬については争いの火種になるので黙つていて欲しいと言されました。

「それに・・・」

そう言つと私を抱くのを止め私を見つめてどこか遠く見る目で私に言いました。

「あなたを助けたのにはもう一つ理由がある……。」

「それは……。」

次に彼が発した言葉に私は驚愕しました。

「田の前で親に死なれていく子供の気持ちが分かるからです。」

その後、彼の過去を少し聞きました。7歳の頃に彼がいた国で戦争があつてその時に両親を失つたそうです。父親は、国を守るために死んで母親は敵の兵士に捕まり彼の目の前で辱めを受け惨殺されました。彼は無理やり押さえつけられ目を閉じれず、その光景をただ叫びながら見続ける」としかできなかつたそうです。

「その時の私はただ「母上、母上」と叫ぶ」としかできませんでした。」

私は田の前にいる彼がそんな過去を経験しているなんて知りませんでした。思わずあいた口が塞がりませんでした。しかし、それならあの田に感じた悲しい感じも少し納得しました。

「だから、あなたの子供のシャルロットちゃんに同じ思いをさせたくないんです。」

彼はそう言つと畠の中心に向かつてゆっくりと歩きしづらしくして私の方に振り返りました。すると、彼の胸のあたりからまばゆい閃光が放たれました。私は、思わず目を閉じてしまった。

ズン——

と静かですが何か音がしました。そして、何かの気配を感じ目を開けてみるとそこに信じられないものがいたのです。

顔は龍で一本の白い角、昔の日本にいたサムライという戦士と同じ格好をして所々青いラインが入つてある鎧と黒いマントを付けた巨人がいたのです。

私は、直感で彼だとわかりました。そのおぞましい外見とは裏腹にとても優しい目をしていました。すると巨人は、私の前に手を出し、そこから何かを落としました。

「なんでしょう……」

私は地面に黄色く光る物体を見つけそれを手に取りました。それは、黄色い日本にある勾玉というものでした。

「あなたが助けを求めたときそれに念じてください。」

巨人から彼の声がしました。そして後ろを振り返りました朝陽に向かって歩き出し、彼が歩くたびにズシンズシンと音がしました。

「教えてください！…あつ、あなたの名前は何といつのですか！…。」

「彼がいなくなることを悟った私はあわてて彼に尋ねました。

「そういえば、いひこひじたじしていて言つていませんでしたね。」

彼はいつもひとと呼吸をいれ言いました。

「わたしの名は、聖火・バジル・オーガです。」

そしてその瞬間風がぶわっと吹いて私は思わずあとずさりしてしまいました。そして、目開けたとき彼は空中に浮かんでいました。

「私とあなたのことは内密にお願いしますね。」

「また、会いましょう。ジャンヌさん、スープおいしかったです。お体に気を付けて・・・。」

そう言いつぶると彼はマントをはためかせ朝陽に向かつて飛び去つて行きました。

私は、彼が消えるまでその光景を眺めていました。

「私は、忘れません。この恩を絶対に、ありがとう。聖火さん。」

彼が消えていった先を見て私は呟きました。

今日もいい天気になりそうですね。愛するわが子の名を思いながら私は屋敷に戻ってきました。

聖火の血、母の願いは龍に聞き届けられた（後書き）

次は、龍の巣に行きます。

しかし、ただで行かせてもらえる筈もなく途中で大変な目に遭う聖火です。

では、次回の更新でお会いしましょう！

感想、指摘お待ちしています。

龍の巣、珍客來訪（前書き）

こんな、作品でも読んでくれている方、本当にありがとうございます。

感謝、感謝です。

これからも、このマダオ作者との作品を宜しくお願いします。

では、じつぞー！

龍の巣、珍客來訪

えへ、みなさんこんにちは。聖火です。

あの後、私は、ディストラクションに女神が付けていてくれた新機能の陽炎（高機能のステルス）を使って日本まで飛んで来たのですが女神がくれた座標に龍の巣がなく、もともとこの機体に着いている龍の巣の反応を調べた所、沖縄の海にあることが分かり、再び沖縄まで飛んで龍の巣のある場所に向かって潜つているんですが、

一言だけ愚痴を言わせてください。

「よつこもよつて、どうしてサメがウジャウジャいる海に転移させてんだよーー！」

絶賛、サメに追われ中です。

なぜ、こうなったかいうとあの後沖縄まで飛んで何とか龍の巣が沈んでいる場所に着き潜つたのはいいですが潜つた途端にそこにはサメのパラダイスが広がつていたのです。

陽炎発動時には戦闘することができなかつたので全力で逃げています。

その上、この陽炎はE.Sの時にしか使えずシールドエネルギーを代用して使っているのでそろそろやばい。今、この機体の存在をばらすわけにはいかなかつたので陽炎を切れない。

しかもサメはかなりの数で、何故か透明になつていて「ディストラクション」のことが分かつていて襲つてきたのだ。おそらく、「ディストラクション」に染みついている血の臭いに反応したのであらう。

「畜生、あの厄今度会つたら絶対しちゃね——」

聖火がサメと楽しい鬼ごっこをしていた頃天界で仕事をしていた、少女に寒気が走ったとか・・・。

ここで、聖火が鬼ごっこをしている間、このダメ作者のマダオが龍の巣について解説いたします。

聖火の住んでいた地球はこの世界の地球の五倍の大きさがあり（大陸などそのまま五倍に大きさにした感じです）、その中のエルドラという国が秘密裏に作っていた移動要塞都市です。

外見はウミガメと同じで、甲羅の部分に街があります。

大きさはE.Sの世界にある東京都と同じ大きさで山、海、川などの自然があります。

靈獸神たちが遺したとされる、古代の壁画を基に作られ、自立AIのウラシマがこの管理をしており、街や自然などを維持している。聖火が何かを理由に封印していたので現在は無人である。

長々と失礼しました。

「……………」

聖火です。あの後何とか海底にあつた龍の巣に命からがらたどり着きいま浜辺近くの海に立つてゐるのですが、少し呆然とします。

「「あゅーーーん」」

やうの原因は、ここつらです。白色の皮膚に可愛らしい顔をした一匹の生物。じうやう、親子らしきが、

「これって、たしかジュゴンってやつだよな…………。」

かつて、自分の大切な人とと行つた水族館にいた生き物で彼女が可愛いと連呼していたのと同じ生き物なのだ。

「迷い込んだんだろう。」

「、龍の巣内の海は時々水を入れ替えクリーンにして生物が住みやすい環境にするのだがその時に迷い込んだのだろう。普段はサ

メなどの危険な魚類あとシャチなど肉食哺乳類などは取り込まれず、そのまま放出されるのだがここに反応しなかつたみたいだ。

「どうあれ、元の場所に返そうかな……。」

なんだろ、俺がそう言つた瞬間ここから上田遭へしてきた。こうこつものに對してかわいいと叫んでいたのだ。キラキラ光る田で見つめるジュゴン。

「もしかして、ここが氣に入ったのか？」

やがて、ここには海洋ほ乳類や小魚の餌になるプランクトンや海藻、その他もろもろが豊富にあるのだ。すると、ジュゴンの親子はそれを肯定するかのじとく俺の足に口をくつづけた。

ピニコシヒ柔らかい感触が海水の中の足から伝わってくる。

「困ったな。」

たしか、飼育するのに許可とかなんかいるんだよな……。

「まつ、ばれなければいいか……。」

そう言いながら開き直った俺は田の前にいるジュゴンの親子を軽く優しく撫でた。

「居てもいいが、排水する部分には近づくなよ。」

俺はその部分に向かって指さし、ジュゴンたちに言った。何故か俺の言葉が分かるらしく尾びれをバタバタ揺らして返事（…）をした。ちよつといい温度の海水がビチャビチャと俺に散つてくれる。

ホント、嬉しそうだな。ジュゴンたちの喜びよつて若干引いた俺であった。

その後、ジュゴンたちと別れて龍の巣での俺の家に向かった。浜辺の近くにあつたのでさほど時間はかからなかつた。ジャリと砂浜を歩くたびにそう音がする。

懐かしい感触を踏みしめながら、家の前へと少しだけペースを遅くして歩いていく。俺の通つた後に出来た足跡を波が優しく消していった。

「この家に来るのも久しぶりだな……。」

そこは、西洋風に建てられた小さい屋敷であった。そこは、かつて聖火が隠れ家として使って家だ。玄関の扉を開け中に入つて行く。

中はとても質素なもので必要最低限の物しか入つていない。けれど、ここで聖火は多くの仲間や愛する者と共に笑い、過(1)した日々があつた。聖火は少しだけ埃の被つた廊下を歩いていく。ミシミシと微かだが音がする。

「若干、壊れてるか？・・・今度修理でもするか。」

少し古くなつた、廊下の修理を考えながらロビーへの扉を開ける。この屋敷のロビーは浜辺を一望することができ、見晴らしがとても良い。

部屋の真ん中にソファーやテーブルなどが置かれている。

木製のものが多く木の香りがほんのりただよつていて。そんな中、タンスの上などに飾られて写真縦に俺は手をかけた。

「あいつ等、今頃何してんだろうな・・・」

そこに移っていたのは、聖火を含めた四人の男子。みんな、笑顔で映っていた。一人は、銀髪の長身でもう一人は深緑の髪で聖火と同じぐらいの背。

そして、後の二人は赤い色の髪のやんちゃ そうな少年とブロンドヘアの目がキリッとしている少年だ。全員見た目は18歳くらいに見えた。そう、嘗て共に命を懸けて戦った戦友たち。

「俺だけが生き残ってしまったな・・・。」

全員、戦つて命を散らせたが、俺は生かされて此処にいる。

（待つてくれよ、役目を終えたら俺も・・・。）

決意を固め、俺は静かに写真縦を置いた・・・。

俺はその後ロビーの床に隠してある扉をあけ地下に続く階段を下りて行った。

「懐かしむのは、後だ。まずは・・・・・・。」

カンカンと鉄の階段を下りる音が静かな通路に物悲しく響いていた。

そして、暗い階段を下りていき狭い通路に着いた。俺はその妙にかび臭い通路を少し早い足取りで進んでいく。しばらくすると、頑丈な扉が立ちふさがった。

「パスワードをどうぞ」

機械的な音が扉から聞こえる。

「咎人よ、龍あれ・・・」

そう、この言葉はかつての戦友たちと共に決めた言葉である。俺

たちには、案外あつてるかな。そんなつまらなことかんがえていると・・・。

「パスワード、認証しました。」

プシュー

頑丈な扉が開けていく。俺は薄暗いその部屋へと入って行く。

俺が入つて行くと同時にパラーと明かりがついていく。中には、たくさんのモニター や、パソコンなどの機材が並べられている。そのため室内はかなり広い。

この部屋は俺の屋敷の地下にある、この龍の巣の中核などが詰まっている。ここで、各国へのハッキングでの情報収取や、龍の巣の管理、DT・NTの製造工場の運営などをあこなつてこる。（普段はウラシマにまかせつまつ。）

（起きる、ウラシマ。）

そう俺が声を発すとモニターに一斉に電源が灯る。

「おせよひさいこま。マスター指示を」

モニターから自立A-Eのウラシマの声がした。

「この世界の状況を知りたい。各国の裏事情や情報を集めてくれ。」

「わかりました。各国へのアクセスを開始します。しばらく、お待ちください。」

その後、ウラシマが各国の情報を表示してくれた。相変わらず優秀だ。

しかし、「キール」に関する情報は今の所ゼロであった。

「敵はまだ動いてないか……、引き続き情報を集めてくれ。」

「了解しました。」

今はまだ大丈夫だな、少し安心した俺であったが不意に一つのデータに目が止まる。

「ウラシマ、22番のデータを詳しく出してくれ。」

モニター画面にあるデータが映し出される。そのデータはデュノア社による試験段階の第三世代の稼働実験だ。つい最近に完成したらしくその起動実験らしい。

（一週間後か、敵が動くならこの時だろ？。それに、もしかしたらジャンヌさんの病気が治つたから出席しているかもしない。・・・

・危険だな。)

「ウラシマ、龍の巣をフランス沖の大西洋に移動させてくれ。全速力で頼む。ステルスマードを維持したままだ。」

「了解しました。これより、龍の巣は大西洋に向かいます。」

ズズーン

大きな音がし、移動するような感覚がした。龍の巣が移動を開始したのだろう。

何故俺が、この実験に目を付けたのはデュノアの今の現状である。デュノア社は今第一世代のISの量産機が世界第三位だ。

しかも、そのISラファール・リヴァイブはとても質が良く実戦向きだ。それを開発した所が第三世代、まだ試作段階だがそれでも、各国いや、テロリストが欲するに違いない。

もし、敵がこの世界での「キール」以外の戦力を欲するならまず食いつくだろう、そう推測したからだ。

それに、ジャンヌさんのことを聞いたり、トコノアが何をするかわからない。

それに、彼女は優しい、もしかしたらまだ、デュノアに未練があるかの知れない。

「ウラシマ、DT製造工場の第四世代DTで一週間以内に戦闘に出せる機体はあるか？」

「メンテナンスをすれば、第四世代DT」

「」

「不測の事態が生じた場合の時のために、由義斗様から命令され製造しておきました。」

「試験段階はすでに終了しています。」

（由義斗の奴、俺に内緒でそんなことしてたのか。でも、今は恩に

着るぞ……（

死んでいった、嘗ての戦友を思つた。

「備えあれば憂いなし」とだな。」

「どうからか、あいつの懐かしい声がしたよくな気がした。」

「分かつた、」　　のメンテを大至急済ましておいてくれ。

「了解」

さあ、俺の予感が当たるか凶とするか。できれば、何も起きて欲しくないけどな・・・・。

（俺も戦つ準備でもしておくが。）

俺はその後、ウラシマに全てを任して部屋を出て行った。

DTの存在は一週間後、「黄金の風」という事件で世界といふ名の表舞台に登場することとなる。

一方、龍の巣のいる座標の海上で一つの人参が浮遊していたとか・
・・・。

龍の巣、珍客來訪（後書き）

次回は戦闘に入ります。

「　」の中身は次回明らかになります。

ヒントは風の名前です。

次回、オリ展開です。

すいません。

けれど、皆様が楽しめるように頑張って書いていきます。

聖火の戦友のことは、いつか書きます。

戦闘描写は難しいです。

では、また次回の更新でお会いしましょーーー！

感想、指摘お待ちしております。

できれば、オブラーートに書つてくれれば幸いです。

黄金の風（前書き）

今回は、初の戦闘描写ですが短いです。

すいません。

DT無双です。

「めんなさい。

それでは、どうぞ…！

燃え盛る火の海の中に今、私はいます。

聖火さんが私の家から飛び去つていった日の夕方にシャルロットが帰つてきて思いつきり抱きしめました。

「ママ、痛いよ。」

苦笑いしながらそう言われたが、この子とまた一緒に生きられることが嬉しかった。その次の日に普段自分が見てもらつている病院とは別の病院で診てもらい体に異常が見当たらないと言われ改めて自分は生きられるんだと自覚しました。

しかし、その日の夕方にデュノアに会つてしまい、少し強引気味に食事に誘われました。正直、もう決別しようと思つていたのでその時言おうと思いました。

その後、決別するための条件にデュノア社が開発した第三世代のISの試験運転を提示されたのだ。私は、まだデュノアと関係が良かった頃、よくこんなことをたのまれていた。私のIS適正はAで国家代表レベルでした。

その位なら、少し考え了承しました。そして、当曰私はシャルロットに家で留守番をするように伝えました。

「僕も一緒に行きたい！！」

と言いましたが大事なことだから、と言つて説得しました。

その後、デュノアの試験場に一人で行つて第三世代の試験を行つていたのですが、突如テロリストらしき集団に襲われ、私は局員を逃がすために時間を稼ぐことになり今に至ります。

「IISまでのようだな。」

敵のIISは全部で4機、近接型と長距離型の打鉄とラファール・リヴィア・イブです。私もこの第3世代のまだ名前のないIISで応戦しましたが相手の技量が高くしかも4人が相手なので私でも持ちこたえるので精一杯でした。

「そのIISをこいつらに渡して貰つ。」

「断ると云つたらどうなるのですか？」

「貴様我々の姿を見た以上死んでもらつだけだ。」

「選択肢が死しかないですね。」

しかし、私のシールドエネルギーは既にゼロ、ビリすれば……。

今私は、ボロボロの状態で地面に這いつぶばっており、もう満身創痍だった。

そして、それを見下すような目で見下すトロリストたち。

典型的なパターンだが、命の危機には変わりのないことだ。もう私にできることはなにもない。フランスからの援軍も来るだらうが間に合わないだらう。

私はあきらめていたが

「あなたが誰からも見放されても、私は見捨てない。」

不意に聖火さんの声が脳裏に浮かぶ。あの日絶望の淵から私を救ってくれた人。そう思い、わたしは懐に持っていた勾玉を出して握りしめた。

テロリストたちが私の頭に銃口を突きつけた。テロリストの何人かがわたしを見て嘲笑っていた。

「最後に言い残したいことはあるか。」

テロリストが冷酷にそう言つた。わたしは既に答えるほど体力は残つていなかつた。

「素直だな、いい子だ・・・・・。なら死ね。」

テロリストがライフルの引き金を引こうとした。

私は、まだ死にたくない。心の中で生きたいという願いが湧き上がつてくる。シャルロットとこれからまた一緒に笑つたり、泣いたりしていきたい。

助けて、聖火さん・・・・・。

あの人顔が脳裏に浮かぶ。情けないと言わても構わない、かつこ悪いと言わても構わない。私は持てる限りの力をふり絞つてあらん限りに叫んだ。

「聖火さん、助けてくださいっ！――！――！――！」

その人は死なせない

すると、何処からともなく声がした。

「つ、誰だ！－姿を見せろつ！－」

テロリストの一人がそう叫ぶ。しかし、周りを見るが戦闘のせいで壊れた建物とそれから上がる火の手しかない。

ズシーン、ズシーン

突如地面に微かだが力強い振動を感じた。そう、まるで巨大な何かが近づいてくるかのように・・・すると、火の手の一番強い所から・・・・、

「グウオオー————！」

叫び声とともにそれは現れた。中世の戦士のような全体を銀に記帳した鎧を身にまといその鎧の所々に黄色の羽の文様の龍の戦士。腰には剣がさしてあつた。さらに所々に、機械を思わせる部分がいくつもあり、サイボーグのような感じだつた。しかし、問題はその大きさだ。全高ゆうに20mは超えてまるで、あの時の巨人のようでした。

「なんだつあのEHSは！――！」

「敵の増援かつ！――！」

「それとも、デュノア社の新型化かつ！――！」

「それより、あれはEHSのかつ！――！」

テロリストたちは突如現れたイレギュラーに慌てていた。敵の援軍などシユミレーションは既に済ませてあつたテロリスト達だが、得体の知れない物が目の前にしかもそれは、明らかに異質なものの介入は想定していなかつたのだ。

「那人をやつたのは、あんたらか……」

「巨人から、私が待ち望んでいた人の声が聞こえたが、その言葉には、明らかに怒氣が含まれていた。」

「貴様一体、なに」

「那人をやつたのはあんたらかつて聞いてんだ、三下。」

いつもの一寧な口調ではない、明らかに殺意を向けた言葉を發していた。さらに、巨人がその言葉の威圧感をさらに強固なものにしていた。

「だったら、どうだって言つだ？お前には関係のないことだろ！」

テロリストの一人が虚勢を張るかの如く言つた。

「その人は俺の友人だ。返してもらつぞ。」

そして、聖火さんはこちらに向けて巨人を歩かせてくる。炎をバツクに揺らめくその姿、まさに地獄からの使者のように思えた。テロリストたちも私と近い感情を抱いてるはずだ。

「そつ、総員！…あいつを殺せつ…！」

リーダー格の人人がそう叫び近接型の一人は背中のスラスターを開に吹かせ、巨人に切りつけていく。

「聖火さん、危ないつ…！」

しかし、私の考えとは裏腹にその切りつけたブレードが巨人の鎧に当たった瞬間

バキンッ

と、二人のブレードが火花を散らせて簡単に折れたのだ。

「そんなつー！」

「ウソだろつー！」

私を含めその場にいた人間は全員が驚いている。E.Sの近接ブレードがいとも簡単に折れたのだ。その切りつけた二人は一瞬だけ動揺してしまったのですが、それが命取りとなりました。

「こんなものか・・・・・。」

そう声が巨人から発せられ現実に引き戻されテロリストであつたが時すでに遅く、二人が同様している間に巨人が手を伸ばし二人を

素早く拘束していた。その、動きはまるで本物の生き物の動きのように滑らかで俊敏でした。

「「グアツ————！」」

片手に一つずつエスを持ち握りつぶしていく巨人。ギシギシと音を立てて悲痛な叫びをあげるテロリストたち。

バシュツ

すると、長距離型のリーダ格ともう一人のライフルが火を噴く。

カンカン

しかし、その弾は巨人の鎧を碎くことはできず空しい音を立てながら全て弾かれる。そして、握られていた二人は、一人は地面に叩き付けられる。

ドゴー——ンツ

物凄い音を立てて地面に叩き付けられ地面にクレーターができる。クレーターから土煙がモクモクと上がる。

「マジかよ・・・」

「ウルフ3、撤退だ!! これ以上の戦力消耗はまずいっ!!」

リーダー格がそう告げ一人は仲間を置いて逃げようとするが・・・

「逃げれると思っているのか・・・」

そう言つと聖火さんは、もう片方の手に握っていた人を逃げる二人に向かっておもいつきり投げつけた。物凄い速さで投げつけられたISは、リーダー格の横を飛んでいたもう一人のISに当たり、爆炎を上げた。そのまま、二人は絶対防御を発動しながら地面に落ちていく。

リーダー格は、爆発の余波を受けスラスターがやられたらしくようひよと速力を落としながらおも逃げようとするが・・・

「止めだ・・・・・」

すると、巨人は後ろの腰の部分についていたライフルを手にとった。
そして、狙いを定め・・・・・

「雷雨、発射」

ライフルから黄金色の閃光が放たれた。その光の閃光はまっすぐ
リーダー格に向かった。リーダー格がそのことに気付いて、後ろを
振り向き回避しようとしたが既に無駄だった。

バゴーンツー――――――――――――――――――

盛大に爆炎をあげ命中した。そして、リーダー格は絶対防御を発
動しながら力なく落ちていく・・・・・。

「す、凄い……」

この間、わずか10分。世界最強の兵器は、無残に大敗を喫した。そう、龍の顔を持つ一体の巨人と聖火さんによつて。

私の意識はそこで途切れていった。

Sideジャンヌend

Side聖火

俺は、戦いを終えたあとジャンヌさんをコックピット内に運んで応急手当をした。

「この第四世代DT旋風。ジャンヌさんにでも使ってもらうか。」

「ラックピットであるゆりかごの中で操縦しながら俺の胸の中に頭を埋め寝ているジャンヌさんを見て思った。

「とりあえず、早く龍の巣へ戻り。」

俺は旋風の龍の羽を広げたと同時に背中の飛翔ブースターを全開にしてその場を離脱した。もちろん、ステルス機能を発動させてだ。

「」の姿を遠くで觀ていた者が黄金色の物体が演習場から飛び立つた時の光のあまりの美しさに思わず見とれてしまったとか・・・。

side聖火end

黄金の風（後書き）

如何でしたでしょうか？

自分の文才の無さになっています。

グスン

けれど、こんなものでも見てくれる方がいるので頑張れます。

本当に、いつもありがとうございます。

次で、原作までの道は終わりです。

それでは、次回の更新でまた会いましょうーー！

感想、指摘お待ちしております。

そして聖母は咎人と密約を交わす（前書き）

今回で原作への道は終了です。

後半になるにつれて駄文になります。

すいません。

では、どうぞ…。

そして聖母は咎人と密約を交わす

あの後、聖火はジャンヌさんをコックピットに入れ一直線に龍の巣へと飛びさつた。ジャンヌさんは、頭が微かに切れていたが後は軽い打撲だったのでコックピット内で応急処置をほどこした。

何故聖火は今回の戦闘において、ディストラクションではなく第四世代のDT旋風を使ったのか。

ディストラクション

靈龍神器リョウリョウシキがあまりにも強力過ぎるからだ。さらに、ISのデーターはある程度ウラシマの情報から得られたが、実戦においての実力は未知数だった。もし、歯獲でもされたら一大事であるからである。

それに、彼自身、旋風の実戦データーが欲しかったため、それらのことを想定しての選択だった。しかし、その選択が功を奏し、彼はISとDTにおける戦闘データーを取ることができた。一方で、旋風の実戦データーも取れの大収穫だった。

さらに、ジャンヌさんを手当していたときに懐からデュノア社の開発した試作型第三世代機のISが待機状態で出てきたので、彼は、

帰つてすぐに解析よつと思つた。

龍の巣帰還後、彼は龍の巣をすぐに太平洋に移動させた。追つ手はステルスを発動せているため来ていない。

彼は、自分の隠れ家である家にジャンヌさんを運び改めて手当をして、寝室にあるベットに寝かせました。

その後、ラボに向かい彼はウラシマに持ち帰つたデーターとEISを渡し解析させた。目的は、EISの能力でDTやCTに流用できるものはないかということだ。

side聖火

ウラシマに解析させたところ、絶対防御は無理だが機体の量子化や、その他武装は流用可能だそうだ。EISのコアはブラックボックス化され解析できないそうだ。俺は、さつそく第三世代DTと第四世代CTにEISの機能を導入させるため、実験をスタートさせるように伝えた。

しかし、問題は専門的なDTやNTのメカニックがないことだ。いくら部品だけ生産しようと組み立てたり整備したりする人がいない。

「どうか……。」

俺が困り果てていると、

「聖火さん、聞こえますか？」

突然、室内の一つのパソコンの画面から声がした。

「その声、アドニアか……。」

その後、画面が少し歪みアドニアが映し出されたが……。

「そのタンゴブせびひつた・・・。」

アドニアの頭にはでつかいタンゴブができていた。

「うー、あなたの転移やその他もうもうが失敗したので上司の神に拳骨をくらいました。」

涙目になりながら俺に言つてくるが

「ぞまあみやがれ。」

俺はそつけなくアドニアに返す。

「ひどいですよ、聖火さん。」

さらに、涙目になつて訴えてくるアドニア。てゆーか、神に上下とかあつたんだな。

「やかましいは、あんたのせいでこつちばかりに田にあつたんだ。当然の報いだよ。」

「うー、あなたの転移やその他もうもうが失敗したので上司の神に拳骨をくらいました。」

「うへへへへへ。」

ついにアドニアはいじけてしまった。おい、そんなので大丈夫なのかよ。神の仕事とやらは・・・。

「それで、何か用があつて連絡したんだろ。」

「そうでした、いじける場合ではありますんでしたね。」

その後俺は、真剣な表情になつたアドニアから上司の神の伝言を聞かされた。

其の1、キールを持つ敵がかなり強力な力を持つこと。

其の2、そのためそちらに必要な物資、人員（聖火のいた世界で今でも生きている人間に限る）の用意 などは天界がすること。

其の3、これからは、アドニアと連絡できる」と。

其の4、敵が動き出すのが3年後ぐらいだと云つ。

其の5、敵の目的はこの世界の人間をキール感染者にする」と。

ありがたい、俺は直ぐにメカニックの人員を要求した。その後、アドニアから2週間かかると言われたがそれぐらいなら大丈夫だと思い了解した。

俺は、アドニアからの連絡を聞いた後、浜辺に来ていた。

今の龍の巣は海上に浮上し通常のステルスマードからシールドステルスマードに切り替えていた。

このモードは、植物の生長を促すためにつまれたもので、龍の巣の周りに特殊なシールドを開拓する。このモードは中から外の景色は見えるが外からは全く見えることはない。

しかし、このモードは海上にいるときにしか使えない。また、街の天蓋である甲羅を收めるので街がむき出しになり、防御力が低下する。

そのため、こういった平穏時にしか使えない。さつきウラシマからデーターでこの世界での科学力ではこのステルスを見破れないそうだ。

今時間は夜中の2時。空には満天の星が浮かび潮風が心地よく吹いていた。今の海はとても穏やかで静まり返っていた。

（今回の戦闘でD-Tのことがおそらく世界中に知れ渡つただろう。）

そう、今回の件でD-Tの存在は世に知れ渡った。E-Sという世界最強の兵器を軽くあしらった新たな勢力として。

世界はこの力に恐怖し、また欲するであろう。

今頃は、世界は旋風を血眼になつて探ししているであろう。

これは、必要なことだった。敵が強大でなおかつキールを使ってくるからだ。

さきの戦闘で分かつたがロトと互角に戦うことのできない今のI Sではキールに立ち向かうなど自殺行為だ。

いくら絶対防衛があるとはいえそれは一対一なら確かに有効だろう。しかし、一対多という戦場ではおもちゃ同然だ。

シールドエネルギーがゼロになつて地に落ちたらキメラに食い殺されるのがオチだ。

しかも、現在のI Sのコアは467個。つまり、それだけの戦力でもし1万のキール感染者の群れが攻めてきたら全滅は免れない。

もし、そうなつたら確実にこの世界の人間は滅びてしまつ・・・。

砂浜に波がザザーと打ち付けていた。

{させない。}

今の世界で勝てないなら、俺が導いてみせる。

「このヒトといつ偽りの変革で歪んだ世界をぶち壊し、新たな変革をもたらす。

「救えなかつた多くの命や死んでいつた英靈たちとの約束のためにも護つてやりたい。」

「これから道はまさに茨の道だわ。けれど、俺は歩き続ける。」

「この世界の子供たちの未来は俺が必ず護つて見せる。」

もう一度と、奴らから奪わせない。

俺は、満天の星の海に向かつて両手を伸ばして死んでいつた者たちに再び誓つた。全てを失つたあの日のように・・・

俺が、そんなことをしていると後ろにジャンヌさんが来ていた。
真剣に考えに耽っていたのでまったく気づかなかつた。

「聖火さん。」

sideジャンヌ

「ん・・・・、ううはっ。」

私が目覚め目を開けたとき空ではなく天井が見えました。私は、
どうやら助かつたらしくベットで寝かされていました。

「とにかく、ここが何処だか確認しないと・・・・。」

私はそう思いベットから立ち上ると体に鈍い痛みを感じました。
全身に軽い打撲があるようです。

そして、頭には包帯が巻かれていました。

私は、フランフランと部屋から出てロビーへらしき場所に出ました。

「嘘でしょ・・・。」

ロビーから見えたのは海と浜辺だつのです。あの、場所から海は遠かつたはず。

私はその場所を不思議に思い家から外に出ました。周りを見渡すと街が広がっていました。

私は、そんな街や周りを見ながら浜辺に向かいました。

すると、

「させない。」

突然浜辺から聖火さんの声が聞こえた。

(聖火さん?)

その後、聖火さんを見つけるからそつと見つめました。

これから道はまさに茨の道だらう。けれど、俺は歩き続ける。

この世界の子供たちの未来は俺が必ず護つて見せる。

もう一度と、奴らから奪わせない。

聖火さんが何か重大なことを言つてゐるよつて思えました。そして、私は彼に声をかけました。

聞かれてしまつたが、内心そう思つた。

「いつから、そこにいましたか？」

「え？」と、聖火さんが両手を空に挙げたあたりから・・・・・。

「聞かれてしましましたか・・・・。」

「ジャノヌさん、が肯定するかの？」と、無言で頷いた。

「そうですか・・・・。」

俺は遙か向こうの水平線を眺めながら言つた。

もう隠しても無駄だな・・・・。

俺はジャンヌの方を振り向いた。ジャンヌさんは頭に包帯を巻いてまだ覚束ない足取りで俺に近づいてくる。

そして、すぐ傍に来たジャンヌさんに話した、俺のことを・・・

s i d e 聖火 e n d

s i d e ジャンヌ

聖火さんのことについてあいた口が塞がりませんでした。

けれど、あの巨人、DTとゆうものですが、あれを見ているので幾分か呑み込みました。

異世界から来たなんて普通は信じません。けれど、彼が嘘をついてる日ではなかつたからです。

なにより、一度も命を救つてくれた恩人を疑いたくなかったからという理由の方が大きかつたからです。

「ジヤンヌさん……。」

「あなたを、巻き込んでしまってすいませんでした。」

すると、彼が私に向かつて頭を深く下げ謝罪しました。

「あなたを、フランスの家に帰します。少し待っていてください。」

そうして、私の肩を軽くポンと叩き、「これから行こうと歩き出しました。彼は今にも消えてしまいそうなそんな感じが漂っていました。」

「のまま、彼を見捨てていいのだろうか?」

「一度も、私の命を救ってくれた恩人を。」

彼はこれから命を懸けて戦おうとしている。

血の命を失つたとしても、例え悪魔だと罵りやがよつと。」

気が付く、私は彼を後ろから抱きしめていました。

「じゃ、ジヤンヌさん……」

彼は、私の行動に驚いていましたが私は構わず彼を抱きしめ続けた……。

「聖火さん、どの道私は今フランスでテュノアによつて第三世代の情報を隠すために死亡扱いにされているはず……。」

「本国に戻つたところで、彼に殺されるだです。なら、私はこのままあなたと共に行きます。」

そのことを彼に言つた。彼は私の方に振り返つて言つた。

そのまゝとても今までになつてはいたが、彼は真剣な顔でした。

「けれど、あなたは血にも罪にも塗れておりません。」

「それに、シャルロットひやんとおつりですか？」

たしかに、残されたあの子が心配です。でも・・・

「あの子は、HIS適正が高いですから迂闊に殺したりはしないはずです。」

「もしもの時は、私が連れ戻します。」

「それに、あの子は強いですか。」

私は、笑顔で彼にそう言つた。私は、彼が何を言おうと過ぐつもりはありませんでした。

「わかりました。」

しばしばして、半ば諦めたような感じで彼はそう言つました。

「けれど、あまり無茶はしないでくださいね。」

「わかりました。」

私がそう言うと彼は苦笑いで返しました。

いつの間にか夜が過ぎ去り、
陽が昇つてきました。 今日もいい天
気になりそうです。

私は、聖火さんに歳を尋ねた所、19歳と彼は言って驚きました。

私より、年下なのに遙かに大人びている感じがしていたからです。

それほど、辛い道を歩んできたのでしょうか。私は、彼の顔に田を向ける。

その後、私が、彼の横でモゾモゾしている光景を聖火さんは不思議そうに眺めていたそうです。

これから、さらに混沌とした時代が訪れるでしょう。

けれど、私の愛する娘は絶対に護りぬいてみせます。

たとえ、誰かを討つことになつても。

あの子が幸せに生きられるなら。

私は戦います。

この日、聖母と呼ばれるようになる者と俗人との間で密約が交わされました。

sideジヤンヌend

その後、彼は一年間、イレギュラーと戦うための準備をしました。

その過程で世界を回り沢山の人と出会いそして、仲間になつたりしました。

ISのせいで翼を失つた者たちに光をあたえ、孤児になつている子供たちを受け入れたりと一年間はあつという間に過ぎ去つて行きました。

けれど、そのおかげで沢山の信頼できる友が彼にはできました。

しかし、ここで想定外の事態がきました。

男でEVAを使える者が現れたのです。

そして、龍はついに陽の当たる場所へとスそのテージを移していく
つた。

そして聖母は咎人と密約を交わす（後書き）

如何でしたでしょうか？

設定を少し変えます。（聖火の年齢）

すいません。

許してください。

次回から原作介入です。

一夏のハーレムは崩しません。

ジャンヌさんは一応フラグです。

では、次回の更新で！！

感想、指摘お待ちしております。

龍である翁人は若き騎士に出会つ（前書き）

聖火がEHS学園に転入します。

文才がないです。

「めんなさい。

では、どうぞ！

龍である咎人は若き騎士に出会い

side 聖火

俺は今、とてもでかい建物の門にいる。ここは、日本のI.S学園だ。俺が何故ここに来たかといつと初の男性I.S操縦者である織斑一夏を護るためにだ。

イレギュラーは、特異体質である彼に介入行動を行う恐れがあるため彼を護るために秘密裏に戸籍を作り学園に入学することになったのだ。

もちろん各国も俺の存在を提示すると騒いだがそこは各国の秘密を餌にお願いという名の脅迫をかけたので大丈夫だ。

（それにしてもやはり兵器を扱う学校だけにチカいな。）

I.S学園は、あらゆる外的勢力を受け入れないまさに一つの要塞だ。そんなところに通える学生が少し微笑ましいな。俺は、真面に学校に行けたのは高校ぐらいだからな・・・・・。

「すまない、待たしたか？」

不意に声をかけられ現実に戻る。

俺の田の前には黒髪のロングでスタイルが良く鋭い吊り田に黒い
スーツをした女性が田に入った。

彼女は俺の姿に少し違和感を示していた。

当然だと思う。何しろ包帯とサングラスで顔を隠してゐる学生なん
て世界で俺くらいだらう。

しつこようだが、これは仕方のないことである。田と喉のこと
ははつきり言つて見せたくない。

注 ジャンヌさんはこのことを知つてゐる。

「お前が、オルグ・D・ヘルグだな。」

「この名前は俺の素性を隠すために付けたコードネームだ。

本名を名乗つてしまえばすぐにこの世界に存在しない人間だと特定される恐れがあつたためだ。

そして、目の前にいるこの女性はおそらくモンク・グロッシードブリュンヒルデの称号を得た織斑 千冬だ。

何度か、データーで顔を見ていたので知っていた。

「初めまして、オルグ・D・ヘルグです。お出迎えいただき、ありがとうございます。」

すると、彼女の顔が一瞬歪んだが、

「担任の織斑 千冬だ。さつやくですまないが時間がないので教室に行くぞ。」

「説明は行きながりする。ついてこい。」

「この声を初めて聴いて、動じなことはさすが世界一のHISの乗りの名は伊達ではないな。」

さらに、俺とこうイレギュラーに少し警戒している。

彼女の顔を見て俺は最初に思った。

俺はそんなことを思いながら、

「わかりました。よろしくお願ひします。」

そう答え校内を彼女について歩いていく。

自分の教室へ行く途中、周りの目が俺に集中していた。

なにしろ、公式発表されてる男性HS操縦者は今のところ一人だ。

それなのに、見ず知らずの男がしかもHS学園の制服を着ているのだから逆に驚かない方がおかしいと思つ。

だが、さすがに360度視線を感じるのはさすがにきつこな・・・

俺はその後その視線と格闘しながらある教室の前に立ち止まつた。

そこには一年一組と書かれていた。

「ここが、お前の教室だ。少し待つていろ。」

どうやら、ここが俺の教室らしい。

織斑先生がそう言い教室の中に入つて行つた。俺は壁にすがりながらなんて挨拶しようかなとかんがえていた。

しばらくして、教室からパーンとすがすがしくくらいい音がした。

「またあとで来るからね。逃げないでね、一夏……」

それから、少しそして黄色のリボンの付けたツインテールの背の低い女の子が出てきた。

そして、その子はさう言い走り去つていった。

{誰だろつ、織斑の知り合いかな?}

一夏と言つていたので間違いなく知り合いだらう。

俺は走り去つた女の子の走り去つていつた方を見て思つた。

スパークとまといい音がした。容赦ないな、織斑先生。

「オルグ。入つてこい。」

その後、俺は織斑先生に呼ばれ俺は教室に入つて行つた。

side聖火end

side一夏

俺は鈴の突撃訪問を受けた後千冬姉が入つてきた。

そして、鈴に教室に戻るよつて言つた後全員を席につかした。

やっぱり、みんな千冬姉が怖いんだろ。動きがとても素早い。

鬼教官の異名を持つ我が姉に向かって思つた。

スパーク

「今失礼なこと考えていただろ、織斑？」

すると、前に千冬姉が来て俺に出席簿といつねの兵器を振りかざしていた。

やっぱり、角は痛いな・・・。

「まつたく、お前という奴は・・・。」

自分の顔に手を当ててため息を吐いてしまつ千冬姉。

「酷いぞ、千冬姉！」

スパン

「織斑先生だ。」

「はい。」

相変わらず容赦がない姉であった。

そして、千冬姉が鏡台につき、

「おはよう諸君。H.R.の前に紹介する奴がいる。」

そう千冬姉が言つた瞬間教室がざわめく。

「転校生かな。」

「いつたいどんな人なんだろう?」

「でも、この時期におかしくない?」

そういう声が飛び交う。

「静かにしろつーー！」

が千冬姉の一括で静まり返る。

本当に怖いな、千冬姉は・・・思わず苦笑いしてしまった。

「わかれはいい、オルグ。入つてこい。」

千冬姉がそう言つと教室の入り口に全員の視線が集まる。

そして、少しだけドアを開けて入つてきた人物に俺は自分の目を疑つた。

多分、他のみんなもそうだろうと思つ。

何故なら、そいつは俺と同じ男なのだ。

身長は178位で髪は黒。

しかし問題は、そいつの目がサングラスに隠され、首から下の下まで包帯で覆われていることだ。

まさに、怪しき100パーセントの奴だった。

(す、こ、視線だな・・・・・。)

内心この視線にひいてしまった。まー、無理ないと思ひながら。

半ば諦めながら思つた。

とにかく自己紹介しないとな・・・・・。

俺は、一呼吸して自己紹介をした。

「オルグ・ロ・ヘルグです。非公式ですがエラをつかえます。」

{まだ、右も左もわからないので助けてもらいたいがありがたいです。}

{顔と声の}こととなるべく追求してもらわないでほしいです。}

{「これから、よろしくお願ひします。」}

俺はそつ言うとクラス全員に向かってペコリとお辞儀をした。

「…………」

氣まずい沈黙がクラス中に広がっていく。

そりや、そりや。こんな、変人簡単に受け入れりつてのが、
まず無理だと思つ。

もし、なんも無しに受け入れられたら、よほどの間抜けだ。

「あ…………」

「あ？」

「…………」

突然、物凄い甲高い声が教室中などぞりいた。

「二人目の男子！！」

「しかも今までにないミステリアス系！！」

「一組で良かつたつ！！」

今分かつた。この人たちは、相当間抜けだといふことが。

クラスメイトになる人たちの喜びように若干呆れ気味だったが、受け入れてくれたのでとりあえず結果オーライということにした。

「オルグ、一番後ろの席に着け。」

「わかりました」

「オルグへの質問は昼休憩にしりつ！！」

俺はそう織斑先生に言われ返事すると俺は一番後ろに空いている席に座った。

「それじゃ、授業に入りますね。」

そう言つのは緑髪のショート、胸がとても微笑ましい背が少しちいさい女性。

このクラス副担任の山田先生だ。

さつき、ここに来る途中に織斑先生から説明を受けていた中ででた人だ。

彼女の授業はとても分かりやすいので淡々と進み今は四時間目の終わりに差し掛かっていた。

えつ、何でこんなに早いかって？

それは、作者に文才がないからだよ。

聖火、テーマ覚えとけよ。

どこからか、作者の声が聞こえたがほおつておいた。

そして、俺は昼休憩に入つた。

女子たちに質問されるのが正直面倒だつた俺は適当だが丁寧ににあじらつて屋上に来ていた。

女子たちが騒ぐ前にここへ隠れるためだ。もちろん、途中女子に追われたが何とか巻いてここまでたどり着いた。

昼飯はどうするかというと、俺はこいつ時を想定して懐にウイ〇ーを忍ばせていたのでそれで済ました。

そして、今は屋上で昼寝をしていた。

ここ数年、敵と戦うために仲間を集めていたためこういったゆつくりする時間がほとんどなかつたから少し一人で黄昏ていたかつたのだ。

春の風が心地よく吹き太陽が穏やかに地をうらしてもポカポカしていた。

「平和だな」。

今まで、こんな平和な穏やかな空を滅多に見たことはなかつた。

俺が、いた場所は何時も空には厚い雲がかつて冷たい雨が降り続
きそれに混じつて鉄の雨が降りつける、そして周りにはおびただし
いまでの屍が転がっている、そんな地獄に何時もいたから。

俺は、そんなことを思いながら毒の陽気に少しウトウトしていった。

「うう」といか?

誰だ、俺の安眠を妨害する不届き者は。

不意に声をかけられむくじと少し重い体を起して声のあつた方
を向いた。

そしてそこには、俺がここへ来た理由が立っていた。

「オルグ・ロ・ヘルグでだつけ? 俺の名前は織斑 一夏だ。よう
しくな。」

「ようじくね。俺のことはオルグで構わないよ。」

「わかった、俺のことも一夏でいいから。」

「ううむ」と、俺たちは握手を交わした。

「この手は、まだ汚れてないんだな。

満面の笑みを浮かべる一夏に向かって思つた。

「の田、後この世界で破壊龍神と白騎士と呼ばれる者たちが出
会つた。

龍である鎧人は若き騎士に出会い（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回は聖火が自分の部屋を改造します。

では、次回の更新でお会いしましょうーー！

小さい猫は龍である咎人に相談する（前書き）

今回は鈴が聖火に一夏のことについて相談したりします。
では、どうぞ。

一夏の出番がないです。

小さい猫は龍である咎人に相談する

聖火が転校してきた放課後。彼は、自分が学校側におねがい（脅迫）して用意してもらつた地下の倉庫に来ていた。広さは教室と同じくらいの広さがあり、この倉庫には仮設水洗トイレと仮設シャワールームやエアコン、換気扇が完備されている。また、システムキッチンや冷蔵庫などが置けるようになつていて。しかし、それ以外は、配備されていなくてただだつ広い倉庫である。倉庫の機能にシェルターの機能を付けたような感じだ。

おい、それだけでもすゞいことだよね。税金の無駄ずかいだよね。
(作者の声)

しかし彼はこここの部屋を選んだ理由はちゃんと存在するがそれは後で話します。そして、その倉庫内になにやらオルグとマーカーで書いてある段ボールや家具が積み重ねられている。そう、今日からここが彼の部屋である。IS学園には部屋だけしか用意してもらつていなかつたのでそのほかの物は自分で用意したのである。そして聖火は黙々と段ボールを開けて部屋に家具やその他いろいろな自分の私物を並べだしたのである。

一方、一夏は放課後、アリーナで幼馴染である、篠ノ之 篠とイギリスの代表候補生であり、第三世代ISブルー・ティアーズの操縦者である、セシリア・オルコットとISの訓練をしていた。彼自身ISを動かすのは素人であつたため放課後に少しでも上達するように練習しているのである。

しかし、そこまでは何とか問題もなく彼は過ごせていたのだがここである問題が発生した。それは、もう一人の幼馴染である凰 鈴音が一夏の部屋に行つて同室である筈に部屋を代わつて欲しいと半ば強引に言つてきたのだ。しかし、一夏のことが好きである彼女が受け入れるはずもなく断固拒否していた。

そこで、鈴音は秘策としてかつて一夏と小学の頃に約束したことの一夏に聞いたが鈴音は変なふうに勘違いしていたので彼女は怒り一夏の頬をひっぱたいて泣いて一夏の部屋から飛び出していったのである。

Side鈴音

あたしは今廊下をひたすら走つている。いろんな苦労をして、ようやく会えた幼馴染。一夏に私は激しい怒りを感じていた。あたしは今まで沢山辛いことを経験してきた。あたしは中国の代表候補生だから、軍の厳しい訓練も積んできたがそれも必死で耐えてきた。大好きだった両親が離婚して一人になつても必死に涙を堪えてきた。それは、小学の時に交わした一夏との約束があつたからだ。それなのに、肝心なあいつはというと変なふうに勘違いしてたし約束の意

味すら理解していなかつた。

（もひつ、一夏のバカバカッ！－あたしがどんな思いで今まで生き
てきたと思つてんのよ！－）

「一夏の鈍感、唐変朴！－」

あたしは、寮の廊下にも関わらず強く歯を噛みしめながら叫んだ。
しかし、わたしはその時前にいた物に気付かずそのまま突っ込んで
しまいドンッと跳ね返され持っていたバックを離してしりもちを着
いてしまつた。

「痛たた、何よいきなりつ！－」

あたしは、そう声を発しながらその当たつたものに目を向けた。

「ひつ！－」

思わずそれを見たあたしは背筋が凍りついた。目を鋭いサングラ
スで隠し、包帯で顔を覆っている身長が高い人物がそこにはいた。
その人物はその時あたしには凄い威圧感を放つているように思え

た。その人物がこちらに向いて手を伸ばしてきた。

（助けてっ！）

あたしは、何かをやれると思って身をぢぢりませてしまったが・・・

「君、大丈夫かい？」

予測とは真逆で急に機械的だが男性のあたしを心配してくれる声が聞こえた。

「え？？」

思わず間抜けな声を出してしまった。このエス学園には一夏以外男はないはずなのに田の前の人物はあきらかに男性なのだ。

「どうあえず、立とうか。」

そいつはそつぞつとあたしの手を握りひょいと簡単に持ち上げたのである。

「怪我ないみたいだね。」

あたしのこじを見て怪我がないことをそいつは確認してくるが、田のあたしは、田の前で起きている状況について行けずにつきよとんどしている。

「なんか、泣いてるみたいだけど何かあつたのかい？」

その一言であたしはようやく正気を取り戻して、

「べつ、別にあんたにはかんけいないでしょ……。」

あたしは助けてくれたそいつに向かって突っぱね返してしまった。

「もしかして、朝一組に来ていた人だよな？」

しかし、そいつは全く動じる「となくあたしに質問してきた。

「だったら、なんなのよ……。」

あたしは、一夏のことや田の前のことをじで泣いていた。

「一夏のことで泣いているんでしょう？」

しかし、その言葉を聞いて思わず田を見開いてそいつを見てしまう。

「えつ、どうして……。」

あたしは不思議だった。どうして、一夏のことで泣いているのが分かったのか疑問に思つたからだ。

「君がさつき大声で一夏のこと叫んでいたからそれに、一夏から君のこと聞いてたしな。」

あ～、なるほど一夏の奴あたしのことこの変人に喋つたんだ。

「そ、そつなの。で、なんで赤の他人の私の話を聞いてくれるの。

」

{ そんなの、誰だつて泣いてる奴がいたら普通心配するだろ? }

{ ほかに、理由がいるか? }

そんなことをそこつま言つた。あたしは、どうして一夏が言つてくれないのかと内心思つた。そしてそこつまあたしに顔を向けて、

{ 俺で良かつたら君の愚痴、聞いてあげるよ。凰 鈴音さん。 }

そうあたしの方に顔だけ向けて言つたのは、何処かへと歩き出した。あたしは、何故かそいつについて行きくなつた。あたしのこいつに対する最初の態度は最低だつたはずなのに、そいつは全く気にすることもなくしかもあたしの心配をしてくれてこる。あたしは、黙つてバックを持ち上げてそいつの後ろを歩き出した。

しづらぐ、歩いてこくと寮の端っこにいた。そこの近くの扉を潜りそこへ地下に通じる階段があつた。そいつは、黙つてその階段を下つていく。こんなところに部屋があるのかと思つた。

(もしかして、ここ。あたしを……。)

「のまあ、暗いところは連れ込まれて。最悪の事態があたしの頭

の中をよぎつた。もしやつならと思つた私は自分の手の甲龍をいつでも展開できるよつとしていた。

「ついたよ。」

そして、階段を降り切つてしばらく埃のかぶるやけに広い通路を歩いていくと倉庫の大きな黒い扉の前についた。すると、そこにはおかしなものがおいてあつた。

「拠り所？」

そう、拠り所と書いてある黒いボードがその扉の片隅に置いてあつた。

「入つて、少し汚いけど我慢してくれな。」

すると、そいつは扉を開けて中に入つて行つた。

「あら、あらと待ちなさいよ。」

あたしは、そいつの入つた扉を開けて中に入つていつた。

中に入つて一言でいえばあたしは、今現在目の前の光景を見て嘆然としている。テーブルが五つぐらい並べられていた。また、簾笥の中にたくさんのお酒の瓶が敷き詰められその前にはカウンターテーブルがありイスが何個か並べられていた。その横にはシステムキッチンドエカイ冷蔵庫がありそれを鈍い照明の光が照らしている。さながら何処かのレストランのような光景であった。

そして、その部屋の片隅にまだ開けられていらない段ボールの山がいくつも重ねられていた。さらにその傍には一つのハンモックがポールにつるされていた。

「空いてるところに適当に座つて。」

「あ、あんた、いったいなんなのよ。」

あたしは、こんなところに入れるこいつに疑問を持った。

「そういえば、まだ自己紹介してなかつたな。」

「一組のオルグ・D・ヘルグだ。男だけど一応HIS使えるよ。」

「これは、俺の趣味だ。」

田の前でサングラスを輝かせグッと親指を立てている人物を見て、こいつに対しても警戒してい自分が馬鹿らしくなつて思わずため息を吐いてしまつた。

「とりあえず、話してござらん。聞いてあげるから。」

その後、あたしは適当な席に座つた。そして、オルグはカップにホットミルクを入れてあたしの前に置いてくれた。湯気があたしの前を昇つて行く。

「いいの、あたしなんかの話を聞いてもらつて。」

「構わないよ、それに聞いてもらいたいからついて来たんだろ?」

機械でいまいち感情が分からぬが優しく言つてくれているのが分かつた。

「実はさ~。」

そう言い、今日あつた一夏とのやりとりをオルグに話した。あたしの愚痴をオルグはただ黙つて聞いていた。

「つまり要約すると、凰さんが決死の覚悟で小学のじゅうじゅうしたの

に一夏が変なふうに解釈していたってことだね。」

「やうなのよつ……一夏の奴変なふうに解釈しても、つ頭来ちゃつて
……」

あたしは、目の前にあるミルク一気に飲み干した。ふと、時計を見てみるともう夜中の3時だった。

「ゴメン、なんか一方的に話しちゃつて。」

「気に入ンナ。少しほ、樂になつたかい？」

「うん。聞いてくれてありがとつ。」

しばらぐ、沈黙が訪れる。あたしは、何時間も愚痴を大声で言ってたので少し疲れてしまった。

「凰さん……。」

すると、オルグは疲れているあたしを見て喋りだした。

「一夏が鈍感だつてことはよくわかつた。けど、だからとこつて凰さんは一夏のこと嫌いになつたのかい？」

「あたしが一夏のこと嫌いになるわけないでしょつ……」

「つて、あんた。あたしに何言わせんのよ……／＼／＼／＼／＼

あたしが、自爆したのにもかかわらずドンッとテーブルを叩きオルグにハツ当たりしてしまつた。

「それで、いいと思つよ。」

「えつ？」

「また、オルグの思わぬ返答に今口三度田の驚懼を浮かべた。

「今回のことば、確かに一夏が悪いこと思つ。」

「けれど、だからと云つて頬をぶつことはなつたと思つ。」

「たしかに、あいつは何が何だかわからなくてあたし一人で怒つてたのかも。今振り返ればそう思つてしまつ。」

「一夏は、会つて俺も間もないにせど、優しいからそれべつで凰さんのこと嫌いになつたりはしないと思つよ。」

「だから、彼が謝つてきたらひやんと受け入れてあげな。」

「いや」と、話しあえば凰さんとの話したいこともわかるはずだよ。

』

オルグはそうあたしに言つてくれた。何でだらう、今まで心中でやもやしていたものがだんだんと消えていく感じがした。

「それに、凰さんは十分かわいいから一夏も頑張れば何時かは振り向いてくれるかもしない。」

「だから、それまで頑張ればいいよ。」

オルグはそう言つと席を立ちあたしのカップと自分のカップをキツチンへと持つて行つた。あたしはオルグの言つてくれた最後の一言で完全に吹つ切れてしまった。

一夏が気が付かなければあたしが気づかせればいい。どんなに期待はずれな反応でも構わない。一夏はモテるからライバルは多いけれどあたしが頑張れば一夏もいつかは気づいてくれる。だから、落ち込む必要はない。あいつは、あたしにそう言つてくれているのだ。

こんなに、優しく接してくれる人に会つたのは両親が離婚してから本当に久しぶりだつた。オルグは見た目は近寄りがたいが話せば優しく接してくれる。お父さん系というよりは、お兄さん系と言つたら当てはまるかもしれない。もちろん、今のあたしが、精神的に不安定になつてゐるからそう思つのかもしれないけど。

でも、あいつがあたしのことを励まそうとしてくれていたのは伝わってきた。正直、とても嬉しかつた。

「うそ、なんで、急に眠気が……。」

あたしは、今までたまつていたものが大分吐き出されたので眠くなつたのだ。当然と言えば当然だと思う。今は明け方の4時ずっと喋つていたのですぐ疲れた。あたしは、オルグにお構いなしにそこで倒れ伏せてしまつたのである。

SIDE 鈴END

SIDE 聖火

俺は凰が使ったカップを洗い戻つてみると

「いや～。一夏～。」

何とも可愛らじい寝言あげながら凰さんは熟睡していた。

「寝ちゃつたか～。」

まあ、こんな遅くまで喋つてたから無理ないか。俺は寝ている子猫を抱きかかえながら本来俺が寝るはずであったハンモックに寝かせ薄い毛布をかけた。

俺が、この部屋を用意してもらつたのはさつきの凰さんみたいに迷える人が助けを必要とした時に少しでも手助けをしたかったためだ。要は、本当に俺のただの趣味だ。

時間はもうすでに4時だ。いまわり、寝たつて遅いだろうと俺は思い朝のトレーニングに出かけることとした。

小さい猫は龍である咎人に相談する（後書き）

次は戦闘です。

無人機の所まで頑張つて行きたいと思います。

では、次回の更新でお会いしましょう！！

龍である咎人は異端者に牙をむく（前書き）

何時も、見てくれている方ありがとうござります。

今日は戦闘です。

生身がチートです。

お見苦しいですか最後まで見ていただければ幸いです。

では、どうぞ！

龍である咎人は異端者に牙をむく

s u d e 聖火

あの後、俺は凰さんを本来自分が寝るべきハンモックに寝かせ、そのまま早朝訓練へと向かった。俺は戦場で3日間ぶつ続けて戦っていたのでこれくらいはまだ大丈夫だ。そして、今は第3アリーナに来ている。なぜ、早朝に訓練しているかというと俺の機体、ディストラクションを動かすためだ。

ディストラクションは、まだこの世界の人間には秘密にしておきたかったためこの早朝の人が寝静まっているときしか使えない。現在時刻は明け方の4時半、俺はディストラクションを起動させた。そして、武装である雷天、風天、それに曇龍の確認だ。曇龍は2、3回素振りをして、ハンドキャノンの方は状態を確認して一応武装の確認は終了だ。そのあとは、歩行やジャンプ、爆天など戦いで必要な動きをした。いくら使いたくないとはい、動かしておかなければいといざという時にろくに動けないからだ。

こんなことをしなくても量産型のISを使えばいいのではと思うが、俺に動かせるのはDT、NTの技術を転用したISとディストラクションだけだ。そのため、今ジャンヌさんに頼んで試験中だった機体であり、DTの技術を応用して作った第2世代型IDS打鉄・飛龍式を稼働実験が済んだらすぐに送ってくれと頼んでいるので、それまでの辛抱だ。

そして、俺はディストラクションを解除し、アリーナ内をぐるぐると重りを身に纏つて走ったり、木刀で素振りをしたりした。さす

がに、この時だけは包帯とサングラスを取っている。そんなことをしていると、時間はどんどんと進みすっかり陽が照ってきた。俺はそれを肌で感じ手に持っていた腕時計で時刻を確認する。6時半とそろそろいい時間だつた。俺は再び包帯とサングラスで顔を隠しアーナを後にしようとした。いや、正確にはしたかった。

「ほう、早朝訓練とは感心だな。」

アーナの入り口で鬼が立つて俺を待ち構えていたのだ。アーナ内に通ずる道は全て俺が見られないためにロックしていた。なので、おそらくここで待っていたのだろう。今のお先生の恰好はジャージ姿だ。しかし、何故ばれた？

{ わはよひじこます、織斑先生。 }

しかし俺はそう言って、何気なく織斑先生の横を通り抜けスルーしようとしたが、ガシッと肩をつかまれる。しかも、かなり力が強い。せ、先生、そんなに強く掴んだら肩が砕けますよ。

「ただで帰れると思つてゐるのか？」

そう言ひ、織斑先生の顔を見た。先生、どうしてそんなに笑顔が黒いのでしょうか。しかも、竹刀なんてどこから出したんですか。髪が逆立つてるのは気のせいであつてほしいです。

「お前には教育的指導が必要だな、オルグ。」

「…………逃げる…………！」

その瞬間、そこからはじき出されるかのじとく走り去った。その後俺と織斑先生との楽しい鬼ごっこが始まった。その日の朝、部活動で早く起きていた生徒に男性の悲鳴が聞こえたとか。

Side鈴

「ニニニは…………」

あたしが目を開けると見慣れぬコンクリートの天井が見えた。背中にとても心地よい感触を感じる。

「あたしは確か昨日…………」

そして、昨日自分がこの現状に至るまでを思い起す。たしか、一夏の愚痴をオルグに言つた後すぐに、意識がもうろうとして寝てしまつたことを思い出した。

「どうあえず起きよつか……。」

あたしは寝かされていたハンモックから降りて時計を見る。今の時刻は7時と起きるにちょうどいい時間だ。

「もうこえは、あこつは……。」

そう言つて、部屋を見回すがこの馬鹿げた部屋の主は見当たらぬい。

「た、ただいま。」

すると、扉の開く音がして入口からあいつが入つてくるが、

「どうしたの、その恰好?」

「じことなく、服が乱れてボロボロになつてゐるオルグがいた。

「なに、朝から鬼神と楽しい命を懸けた鬼じっこをしてきただけだ。」

「それ、冗談になつてないわよ。」

呆れながら、ボロボロになつてゐるそいつに向かつて言ひ。そして、そいつはフラフラな足取りでキッチンに向かつていく。すると、なにやら朝食の用意をしだしたのだ。

「凰さん、俺が朝飯作つてやるよ。」

「え、いいの。あたしなんかのために？」

「構わないよ。」

「それに昨日からシャワー浴びてないでしょ？」

「奥にあるから浴びておいでよ。」

そうして、オルグは部屋の片隅にある小部屋に指をさした。最初は断つたが体が少し汗ばんでいたのでお言葉に甘えさせてもうつことにした。

サード

シャワーから水が出る音がルーム内に響く。

（どうして、他人にあんなに優しくできるのかしら。）

あたしは、今キッチンで朝食を作っているあいつに向かつて思つた。はつきし言つてあの優しさは異常だ。ただのお人よしなのか、それとも何か企んでいるのか。あたしは、そんなことを考えていた。

濡れた髪をタオルで拭きながらシャワールームから出たら一番近くのテーブルに皿が置いてあった。その上には、フレンチトーストが一枚とカツupにはミルクが入つていて、小皿にはフルーツが盛られていた。出来立てらしくフレンチトーストからは湯気が出ている。

「お腹すいただろ、できたから食べていいよ。」

キッチンから、後片付けをしながらオルグはあたしに囁つた。お

いしそうな匂いに誘われたあたしは直ぐにフレンチレストランにかぶりついた。

「おもしろい。」

甘さが程よく効いていてとてもおいしかった。あたしは、物凄い勢いでそれらを全て食べた。そして、5分もせずに食べきってしまった。

גַּתְּהַנְּגָנָה

へ口に合つたみたいで良かつたよ。」

オルグはあたしが食べた皿をキッチンに下げるながら言った。

「ねえ、ぐどこようだけど、どうして会つて間もないあたしにそんな優しく接してくれるの。」

あたしがそう言つとオルグは少し間を置いて、

「知り合いが言つていたんだが困つたときはお互い様つてね。」

「それ以外の理由なんて、今の俺たちには必要ないよ。」

振り返って優しくあたしにそう言った。その後、またここに来てもいいかと聞いたら、もちろんいつでもおいでと言つてくれた。あたしはどこか軽い足取りで自分の自室へと戻つて行つた。

その日、一夏が鈴に謝罪してきた。彼女は聖火の助言があつたため快く受け入れた。そのかわり、今度のクラス対抗戦の勝負で勝つ方の言つことを一つ聞くという約束を交わした。もちろん、その時に恋する乙女二人と口論になつたのは言つまでもない。一方、アリーナの無断使用がばれた聖火は織斑先生と山田先生にこつてりしごかれたとか。

そして、クラス対抗戦の抽選発表の日、一夏は初戦で鈴と当たることになることが判明した。そして、その時に鈴と互いに悔いの残らぬ試合をするために握手を交わした。そして、一夏は鈴と戦うために放課後衆たちと練習を繰り返した。

2週間後、第3アリーナでは1回戦の鈴対一夏の試合が始まろうとしていた。会場にはたくさんの生徒がつめでいてもう一杯だ。

一夏は自身のIJSである白式を纏つてアリーナの上空で静止していた。同じく鈴も甲龍を纏つて一夏に対峙していた。一夏は鈴に勝つために放課後ひたすら特訓してきていたため、やる気は満々だ。対する鈴も一夏にもう一度告白するため絶対勝つと執念を燃やしていた。

「鈴、全力で行かせてもらひます。」

「一夏、今日は勝たせてもらひますよ。」

二人は、互いに熱い火花を散らす。鈴は約束のため、一夏は自分の努力を無駄にしないため。

『両者とも、指定の場所についてください。』

そうして、アリーナの中央で向き合つ。一夏は近接ブレードの雪片式型を構える。鈴も背中から近接ブレードの双天牙月を構える。お互いに、見つめあい静寂が生まれる。

『それでは、試合を始めてください。』

開始のブザーがアリーナにこだました。開始と同時に両者とも背中のスラスターを全開にしてたがいに突っ込んで得物をぶつけ合つ。

両者一歩も引かず火花を散らす。

「やるわね一夏。だつたら、これほどいっ……！」

すると、甲龍の肩がスライドした。とつてに何かが来ると察知した一夏は鈴を払いのけて距離を取りつとした。

「甘いわよ……」

甲龍の肩に光の輝きが見えた。すると、その刹那一夏に向かつて何かが放たれた。一夏は白式を上手く操りスラスターを全開にしてそれを回避する。しかし、少し掠つたらしくシールドエネルギーを削つた。

「初見で交わすなんて、少しは出来るよしね……」

「そいつはゼリム。行くぜ、鈴！！」

上空で繰り広げられるバトルに会場のボルテージが一気に上がり歓喜に包まれる。しかし、ただ一人このイベントに何かを感じた聖火は生身での戦闘の準備をしていた。

side 篇

私は、今一夏が出て行ったピットの中のモニターで隣のセシリアや織斑先生と共に試合を見ていた。

「なんだあれは・・・。」

一組の代表候補生の凰が使っている武装を見て呟く。

「衝撃砲ですわね。」

すると、隣にいるセシリアが同じく呟いた。

「そうです。空間自体に圧力をかけて砲弾として打ち出す武器です。」

山田先生が戦闘を記録しながら呟いた。

「ああ、おまけにあの龍砲は360度制限なく打てる。」

ついで、織斑先生が腕を組みながら呟いた。しかし、今の私にはどうでもよかつた。一夏无事で帰つてくるのなら。

（一夏。絶対に勝つんだぞ！…）

自分の愛する者の勝利を信じて私はモニターを見続けた。

side out

side一夏

あれから、鈴の龍砲とかいう見えない砲弾を何とか地面すれすれの低空飛行で回避しながら戦つたがそろそろシールドエネルギーがまづい。このままで、ジリ貧のままで負けてしまう。どうすればいい。

（あれを試すしかないな。）

俺は、千冬姉が教えてくれた戦法に懸けてみることにした。それは、相手の隙を付いて一気に瞬時^{イグニッショントースト}加速で間合いで詰めて白式の単一使用である零落白夜で止めをさすというものだった。この戦法は一度きりしか通用しないが代表候補性とでも互角に戦つことができる。

（とにかく、間合いでどうないと…）

俺は背中のスラスターを一気に吹かし上空へと間合いで取巻くとする。

「逃がさないわよーーー！」

鈴も龍砲を撃ちながら、加速して俺との間合いでじりじりと詰めてくる。そして、鈴の双牙天月が俺に届きそうになつた時、

(今だつ！！)

俺はスラスターの出力を一気に下げてその場で静止する。

「ちよ、嘘でしょつーーー！」

鈴も直ぐに止まろうとしたが止まらずに俺を追い越してしまった。俺はその隙を見逃さずに瞬時加速を発動させて一気に間合いを詰める。

そして、翻訳模型を振りかざした。

その刹那だつた。

アリーナの上空にはられていたシールドが爆音をあげて砕けそこから何かが物凄い速さで突っ込んできてアリーナの地面に衝突し爆炎をあげる。

「うう……」

突然の出来事により場に一瞬の静寂が生まれる。

「な、何が起つてるんだ。」

俺は、今の状況に追いつかず当たりをグルグルと見回した。

『識斑！－試合は中止だ。』

すると、状況がつかめてない俺の目を覚ますかのよに、千冬姉がピットから通信を入れてきた。しかし、それと同時に白式のモニターに

敵ISの反応、識別無し。ISでないと断定。アンノウンにロックされています

とこつ警告の表示が表示される。

「HISじゃないって……」

ISじゃなければ、いったい何が落ちてきたんだよ。

「一夏、早くピットこーー！」

すると、鈴が俺の隣に来て叫んだ。

「お前まだいりやうなんだよーーー。」

「あたしが時間を稼せぐからあんたは逃げなぞこよーーー。」

「お前をおこしてにげられるかよーーー。」

「馬鹿つーーあんたのシールドエネルギーほとんど残つてないで
しうつがーーー。」

「ぐつーーー。」

たしかに、俺のシールドエネルギー残量はもう一けただ。やつを
の鈴との戦闘でほとんど空になつてしまつているのだ。

「別に、最後までやるつもつはないわよ。」

「先生たちがすぐに駆けつけ、事態のしゅうひ

鈴が何かを言いかけた時だ。

高Hエネルギー反応確認、敵攻撃が来ます。

白式から再び警告の表示が出される。そして、爆炎の中から、黃
色い閃光が鈴に向かって一直線に放たれた。俺はどつせに反応して、
鈴をすぐに抱きかかえその場を離脱した。間一髪のことと交わすこ
とができた。

「ゲーム兵器じゃない、今のは・・・・・」

すると、白式からさしきの攻撃が高出力のレールガンであると、表示された。

「レールガン、しかもセシリ亞のビームと比べ物にならない威力
じゃないか。」

俺は、鈴を抱えながら飛び回っている。

「おまえ、おまえが、書いたやうに二年生だ。」

しかし、鈴は大人しくしていたのだが、俺の腕の中で再びもがく。

「おい、おい！ 暴れるなーー！」

卷之三

俺たちがそんなことをしていると再びロッケオンの警笛がなる。

「く、来るぞ！！」

再び、レールガンの鋭い閃光が俺たちめがけて放たれれる。そして、放たれた場所から段々と煙が晴れてくる。そして、そいつは姿を現した。

「ハ、嘘でしょ…………」

「なんだよ、あいつ・・・・・」

そこにいたのは、まさに異形だった。ボディはとてもスマートだ

ががつちつ装甲で固めてどこか忍者のような雰囲気が漂つ。大きさ3メートル。そこまでエスの装甲をスマートにさせたよなものがあきらかに違うのが機械でできた尻尾が生え、そして顔だ。機械でできた恐竜のような顔だった。人間のからだに鎧を付けて顔が恐竜みたいな感じだった。右手には赤色のクロウを左手には大きな砲つつらしきものを受けている。

「お前、何者だ！？」

しかし、そいつはただ俺たちを地上から機械でできた青い目で見つめている。

「答えるーーお前は何者だ！？」

返答は先ほどと同じで帰つてこない。思わず舌打ちしてしまう。

『織斑くん、凰さん！ー今すぐアリーナから脱出してくださーー！』

俺たちが飛び回つていると山田先生から通信が入る。しかし、今俺たちが後退すればアリーナにいる他の生徒が危ない。俺の答えは既に決まっていた。

「いや、みんなが逃げるまで食い止めます。」

俺は、さう山田先生に伝え通信を切つた。

「鈴、いいな？」

俺が腕の中にいる鈴に尋ねる。

「だ、誰に言つてんのよ――それより離しなさいよ――」

鈴の顔が赤いのは気のせいだろうか。熱もあるのか？俺はそんなことを思いながら鈴を解放した。その刹那、俺たちの間にレールガンが放たれた。攻撃は外れたが直撃すればただではすまないだろう。そして、それは背中のブースターを全開にして俺たちに突っ込んだ。

side out

side セシリ亞

「織斑先生！！！私に救援のための許可をください！！！」

わたくしが織斑先生に進言した。自分が愛する一夏さんを助けたいのだ。

「ダメだ、相手がＩＳか分からぬのに生徒を危険に巻き込むわけにはいかない！！」

しかし、冷たい一言を先生はわたくしに返す。

「しかし…！」

負けじとわたくしも反論しようとする。

「無駄だ、これを見ろ。」

すると、織斑先生はモーターの片隅を指差した。

「遮断シールドがレベル4に設定、しかもアリーナに通ずる扉が全てロックされますわね。」

「そうだ、おそらくあの不明機によるものだひつ。」

織斑先生も苦虫を噛んだような表情をしている。

（一夏さん、どうか御無事で……。）

わたくしは、ただ彼の無事を祈りました。しかし、この時気づいてはいませんでした。鶴さんがこの場からいなくなつていふことに。・。・。・。

side out

side一夏

あれから、何度もそいつに攻撃をしたがそのたびに交わされてクロウで切り付けられていた。鈴も援護してくれていたが敵の砲ずつから放たれるレールガンが的確に牽制している。このままでは、まづいと思い一旦距離を取った。

「ひょっと一夏……ひゃんとしなせこよ……。」

「無理言つなつて……。」

けど、確かに鈴の言うとおりだ。さつきからあいつは全く被弾していないがこちらはあいつにかなりやられた。シールドエネルギーもほとんど残っていない。どうする。あいつは、また攻撃をかわしてカウンターをしてくるだろ？』

（ん？ ちょっとまでよ。アイツをひきからカウンターしかしてないんじゃ……）

思い起こせば、あいつは初めの一撃以外は全てカウンターだ。しかも、向こうから絶対に仕掛けてこない。現にあいつは今この間もただ俺たちを遠くから眺めているだけだ。もしかしたら……

「なー、鈴。」

「何よ、こんな時に。」

「あれって、人乗つてないんじゃないか。」

「あんた、馬鹿じゃないの。エラは無人では動かせない、そういうものなのよ。」

「けれど、あればエラじゃないし、なによりひきから攻撃がワンパタンじやないか？」

「…………やついえば。」

すると鈴は顎に手を当てて考え出した。俺たちは、今隙だらけなのに全くあいつは攻撃してこないのがいい証拠だ。

「たしかに、それで無人だつたら倒せるの？」

たしかにそうだ。今の状況じゃ厳しい。けど、俺には秘策があるた。

「あー。無人だつたら手加減が必要ないからな。」

「鈴、俺が合図したら衝撃砲を撃つてくれー！」

「わかつたわー！」

俺の作戦はこうだ。鈴に衝撃砲を俺の白式に向かつて撃つてもらいそのエネルギーを吸収して自身のエネルギーに変え、单一使用の零落白夜を使用し一気に仕留めるものだ。

そうと決まればと思い俺はあいつに向き直つて見つめる。そして、スラスターを全開にして再び切りかかろうとしたが突如通信が入つた。

「こんな時に何処からだ？」

しかし、その宛先を見たとき背筋が凍りついた。敵の機体からだつたのだ。そして、音声ではなく文字でこう言つてきたのだ。

『お前ら雑魚に用はない。エルドラ王國の破壊の龍神を出せ。』

俺には意味不明だつた。エルドラつてビビこの國だ。破壊の龍神つていつたいなんだ？俺は一瞬だが動搖してしまつ。

「一夏……」

すると、俺を叫ぶ声がして現実に引き戻される。そして、声が聞こえた方を見た。俺たちがいる反対側のピットに篝が生身でいたのだ。

「男なら、そのくらいの敵を倒せないで何とする……！」

篝がそう叫ぶが、それに気づいた無人機が篝に向かって二三本のクナイを投げつける。

「まずい！逃げろつ、篝！」

しかし、篝が背を向けて逃げようとしたがもう間に合わない。俺は、それを打ち落とすためにスラスターを全開にしたがやはり間に合わない。

「篝！――！」

無常にもクナイが篝に刺さりつとした。俺は思わず目を瞑つた。

side out

side 篝

私はもうだめだと思ったがいつまでたってもクナイが刺さらない。私は閉じていた目を開けた。

「あ、あ・・・・・・」

私は目の前の光景に思わず息をのんだ。そこには、私を胸に抱きこみ代わりにクナイを背中に刺したオルグがいたのだ。

「怪我はないみたいだね、良かった。」

その声を聞いて私の意識は闇に落ちて行つた。

side out

side 一夏

「オルグッ！！！！！」

俺は思わず叫んでしまつた。アイツの攻撃から籌を身を挺して護つてくれたのだ。あいつの背中から血が流れる。

「一夏、下がつてろ……。」

オルグはそう言つと、そこから飛び降りアリーナの地に降り立つた。今のあいつは、刀を手に携えているだけだ。すると、無人機がオルグに向かつてレールガンを放つた。

「う、嘘でしょ……。」

隣に来ていた鈴が思わず言葉を漏らした。俺も、多分同じ気持ちだろう。なぜなら、オルグは持つていた刀でレールガンを弾き返したのだ。無人機も負けじと連射するが全て弾き返される。無駄と分かつたのか無人機がオルグめがけて突つ込んでいく。

「オルグ！逃げろっー！」

しかし、オルグは敵がクロウで切り付けてきたのをジャンプして交わし、懐から鎖を出してそいつを拘束する。手を拘束されているので攻撃ができない無人機はもがいて抜け出そうとするが、まったくほどけない。

「終いだ……」

すると、オルグは鎖を伸ばしてグルグルと回しだし無人機を地面に叩き付けたり、アリーナの壁にぶつけたりした。そして、最後にハンマー投げの要領で無人機を空中に投げた。すかさず、ズボンのホルダーから銃らしきものをだし、無人機めがけて撃つ。放たれた弾丸はまっすぐ無人機に命中して上空で花火をあげた。

この間はわずか1分の出来事だった。俺たちが苦戦したそれをI-Sを纏っていない人間がまるで軽いなすようにして倒したのだった。

俺は、背中から血を流して爆炎の中に立っているオルグを遠くからただ見つめていた。

龍である翁人は異端者に牙をむく（後書き）

やつ過ぎました。

許してください。

無人機については次回、話します。

では、次回の更新でお会いしましよう！――

ブリュンヒルデは彼の素顔を知る（前書き）

評価を入れてくれた方、お気に入りに登録してくれた方
本当にありがとうございます。

これからも駄文ですが、よろしくお願いします。
では、どうぞ！

ブリュンヒルデは彼の素顔を知る

s i d e 篇

「……」

私が畳を開けると白い天井が畳に入った。背中に布団の感触がある。どうやら寝かされているようだ。

「簞、気が付いたか！！」

「簞さん……」

声がする方を見ると一夏とセシリアがいた。

「セシリア、一夏…………」

体を起こし、周りを見てみる。薬品が棚に並べられている。どうやら、保健室にいるようだ。窓から夕陽が差し込むといふをみると、時間は夕方らしい。

「わたしはいったい…………」

わたしは何故寝かされているのか思い起こす。

「お、オルグはどうした……アイツは無事なのか……」

そう、私を庇ってくれたあいつが無事なのか知りたくて、ベット

越しにいる一夏の胸倉をつかむ。

「お、落ち着けよ、筈。」

しかし、一夏が私の目を真剣に見てきて私を落ち着かせようとす
る。

「わ、わかつた／／／だから、その・・・・、あまりそう見つめるな／／／／／／／」

ପାତ୍ରିକା

いかん、一夏と見つめあつてしかもあいつは私の心配をしてくれている。次第に顔が熱くなつていく。

「オ、おつほん！！」

しかし、セシリアがわざとりしへ咳き込む。チツ、セシリアめ・・・

「オルグさんなら、あの後わたくしたちに篠さんを預けて何処か
に行つてしまわれましたわ。」

「そうねう、俺が怪我はいいのかつて聞いたら、自分で手当でするからいいってさつ。」

それを聞いて、わたしは安心した。とにかく、無事なら良かつた。そつと胸をなでおろし、後で謝りに行こうとわたしは思った。

「そういえば、凰はいないのか？」

「そういえば、さつきオルグさんを探しに行くつておっしゃられて出で行きましたわよ。」

そうなのか、あいつにも言つておきたいことがあったのだがな・・・。

「一夏、オルグの部屋が何処だか知らないか？」

奴の部屋、わたしたちとは別に特別に用意されていると生徒の間で噂されていたのだが何処にあるのかが全く分からぬのだ。オルグ本人に聞いても何時か教えるよと言つてはぐらかされていた。

「悪いな、俺もあいつに聞いたんだがはぐらかされて結局知らないんだ。」

「オルグさんの部屋を知りうと他の生徒も躍起になつてゐるのですが、結局見つからないそうですわ。」

まるで、学園の七不思議みたいだなどわたしは思った。しかし、現にここEHS学園ではオルグの素顔は口裂け男とか、オルグの部屋はEHS学園の地下迷宮にあるとか七不思議とはいかないがそう噂されている。

~~~~~

突然携帯のアラームが部屋に響いた。すると、一夏から制服のポケットにから携帯を取り出して中身を確認する。

「鈴からだ、えへっと…………」

どうやら、凰からのメールのようだ。一夏の指がケータイのキーを叩くたびに一夏の目が驚愕なものになつて行く。どうしたのだろう?そして、一夏がケータイを閉じてポケットに再び戻す。

「どうなされましたか、一夏さん?」

セシリ亞が心配そうに尋ねてくれる。

「オルグの部屋を知つてゐるから一緒に行かないか?だつてよ。」

一夏の口から出た言葉に私とセシリ亞は驚愕の表情を浮かべた。

「それは、本当か一夏!!--」

「あ~、鈴が寮の一階の一一番西の端で待つてゐて……。竇動けるか?」

「わたしなら、大丈夫だ。」

「そ、うか、セシリ亞。今から行くけど、用事とかあるか?」

「今日は特にありませんわ。」

そういう私たちとは、凰が待つてゐる場所へとそのまま直行した。

side一夏

「遅かつたじやないつて、なんであんたらがいるのよ。あたしは一夏を呼んだのよ・・・・・」

指定された場所に行つたら鈴が待つていたが何故かジト目で睨んでくる。俺なんか悪いことしたか？鈴の手には、なにやらバスケットを持っていた。

「ふつ、わたしはオルグに助けられたからな。礼が言いたくて来ただけだ。」

「凰さん、クラスメイトの心配をするのは当然のことですわよ。」

「ぐぬぬぬ。」

鈴と筹、セシリアの間に火花が散つてゐるよつて見えたような気がしたが気のせいいか？

「と、とにかく、鈴。オルグの部屋を知つてゐるんだろ？案内してくれないか。」

俺はそう言つたが鈴はブイツとどこかいじけたような顔になりな

がら歩き出した。俺、本当にかしたか？その後、近くにあつた扉を開けて中に入った。こゝら辺は何もなく普段生徒もほとんど来ない場所だった。中に入ると下に続くコンクリートの階段があった。鈴は何の迷いもなくそれを下りていぐ。

「あの噂は本当なのか・・・。」

俺の後ろで階段を下りていく鈴は呟いた。オルグの部屋が学園の地下迷宮にあるってやつだ。最初は信じていなかつたがどうやらマジになつてきらし。そして、階段を3分ぐらいおり続けるとやたらと広い通路に出た。

「もう少しよ。」

鈴はそう言つとその通路をまっすぐ歩き出した。俺たちもその後に続いて再び歩き出す。

「それにしても、埃が多いですね。」

セシリアの言つことももつともだ。この通路広いのはいいが埃がすゞく多い。この奥に人がいるなんて誰も思はないだろ。しばらくその薄暗い通路を歩いていくとやたらと力強く黒い扉があつた。どうやら見た感じ倉庫らしい。こんなところに人なんていないだろうと思ったがその扉の隅に『拠り所』と書いてあるボードが立てかけられ、さらにその周りだけ妙にきれいな所を見るとどうやら人の出入りがあることが分かる。

突如、どこからか誰かを殴るような音が通路内に響いた。

「ふざけるなっ！……！」

「そうですよ、オルグ君……！」

そして、扉の向こうからいつも聞いている二つの声、千冬姉と山田先生の声が聞こえた。しかし、普通の声ではなく完全に怒氣を含むものだった。

（千冬姉、山田先生？）

俺は明らかに扉の向こうはまずい状況だなと思い扉に耳を当てて中の様子聞くことにした。俺がそうすると他の三人もそうじだした。

side out

side 千冬

今、私は目の前にいる男を思いつきり殴った。私と山田先生は人一通り今回のこととを上に報告し終え、オルグの容体を見られなかつたので奴の部屋に来てみた。ドアを開けて中に山田先生と共にに入る。すると奴はちょうど匕首ナイで負傷した場所に包帯を巻いていた。

〔織斑先生、山田先生。こんなにひどい。〕

すると、あいつは自分がなんぞ全く気にしないような口調で言った。だが奴の座っている席の横に大量に血の付いた布が転がっていた。その瞬間何かが私の中で切れ私はあいつを殴り飛ばした。あいつは宙を舞いながらテーブルにぶつかりガシャンと音を立てる。殴った衝撃で奴のかけていたサングラスが飛んだ。

「ふざけるなっ！……！」

「そうですよ、オルグ君……」

何故、私や山田先生がこんなに怒っているのか、それはこいつがあまりにも無謀すぎるからだ。たしかにこいつがいなければ篠ノ之は間違いなく死んでいただろう。しかし、こいつは後先考えずに突っ込んでこいつも死にかけているのだ。しかも、ISでも苦戦した相手に生身で戦うなんて自殺行為だ。今回は勝てたからいいものの次やつたら生きられる保証はない。

〔心配してくれるのはありがとうございます。〕

そう言いながら奴は床から立つた。私が殴ったところが赤くはれている。

「いいかっ！！もしも、今度あんな真似したうこんことでは済まさないぞ！！」

私は顔を下に俯かせながら黙つて聞いているオルグに怒鳴つた。

「オルグ君、一応体の様子を見ますから上に来てください。」

山田先生も相当怒つてゐる。彼女も私もこいつに死なれたくないからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・

これでアイツも少しばかりたたかう。私はただ俯いている聞いているオルグを見て思つた。

「先生。」

すると、今まで黙つていたアイツが声を出した。そして首の包帯にほどきだしたのだ。

「知つてますか、誰かを護るには必ず代償がいるんですよ。」

「それが多くれば多いほどその代償が大きくなる。」

わたしと山田先生は最初オルグが言っていることが分からなかつた。そして奴は全ての包帯を解き終わりそれを床に置く。包帯には、何やらわけのわからない文字が刻まれていてどこか呪術的なオーラをその文字は放っていた。そしてあいつは顔を私たちに向かた。

「あ、あ・・・・・・・。」

山田先生は思わずそんなうめき声のような物をあげている。私は、そんな声をあげないものの目の前の光景に啞然となる。

そいつは、だいぶ治つているようだが、喉が焼き切れており、生々しい傷跡が残っている。そして、そいつの目は赤く、ギラギラと輝きを帯びた獣の目、そう例えるなら、龍の目を持つていたからだ。

「俺は国を護るために、家族と仲間と民族と想つて出でたとして・・・

・・・・



護りたかつた国さえも失つた。

オルグはそう私たちに語りかけてくる。初めて見る奴の素顔、そして聞かれるオルグの過去。嘘ではないことは喉の傷と奴の目を見ればすぐに分かった。山田先生に至つてはもう、半泣き状態だ。

「俺は、何度も死にそうな目に遭いました。」

「そのたびに何度も傷つき倒れました。」

「死ぬ覚悟なら等の昔に出来ています。」

「けれど、こんな血に塗れた汚い魂がこれからを創つていく者たちの力となるのなら。」

「俺は喜んで命をかけます。それだけの価値が彼らにはあるから。」

そして、あいつは笑顔で私に向かって言った。その田はとても強くそしてどこか儂さを感じた。横にいる山田先生はもう立つていらっしゃないくらい泣いている。わたしも、親はいない。私と一夏を置いて何処かへと消えてしまったから。けれど、こいつのそれと比べるととても小さく思えてくる。私は、それ以上あいつを攻めることができなかつた。いつの間にか私は固くこぶしを握っていた。すると、オルグはその手を優しく持つた。

「あなたはあなたのはなすべきことをしてください。」

そう私に言つとオルグは泣いている山田先生を優しく抱いて、

「俺のためなんかに泣いてくれて本当にありがとう。」

静かに、そう呟いた。そして、山田先生が泣き止むまでずっとそう呟き続けていた。鈍い光が照らす中私はただ立ち竦くしかなかつた。

side out

side一夏

「…………」

静かな沈黙がドア越しで聞いていた俺たちを包む。隣を見ると、鈴は泣き、セシリアは口を手で覆い、幕は唇が青くなるくらい噛みしめていた。オルグから語られる過去は断片的だがそれでもとても重たいものなのだ。今すぐ、ここを開けてオルグに会いたい。俺はそう思った。他の三人もそう思っているだろう。だからと言って、俺たちにいつたい何ができるんだろうか。俺は、あの無人機との戦いのときに思った。

（俺にかかる人を全て守る……）

しかし、オルグはどうだらう。あの力を有しても救えなかつたものが多い。いや、多すぎる。俺は本当にみんなを誰も失わずに守れるのだろうか？

俺は、隣にいる三人に目をやる。

いや、絶対に守つて見せるんだ。俺がもつと強くなればいい。いや、なつて見せる。みんなを失わないためにも。俺は新たに決意を固めた。もう誰かに守られるの嫌なんだ！！

「」に白騎士は新たなる誓いを立てた。

side 聖火

(少し喋りすぎたかな……。)

俺はさつき自分が言つたことを悔いていた。いざれ話すつもりだつたが彼女たちの表情を見ればかなり重かつたことも直ぐに分かつた。

「オルグ……。

すると、織斑先生が俺に話しかけてきた。さきほど、山田先生は泣き疲れそのまま眠つてしまつたのでハンモックに寝かせた。織斑先生も大分落ち着いたらしく今は椅子に腰を掛けている。少しだが眼がしらに涙がついていることに気が付いた俺はコーヒーを彼女の前に静かに置いた。彼女はどこか虚ろな目でコーヒーを見つめている。「コーヒーから出る湯気が彼女の前を曇らせる。

「お前は何故、今でも戦つているんだ?」

そう彼女は聞いてきた。

「お前はそんなにも失つて、なのになんでそんな強い目を持てるんだ。」

確かに俺は、たくさん失つて、何度も挫折し絶望もした。

「それは、死んでいつた仲間や救えなかつた人たちとの約束があるからだと思います。」

俺は、彼女にそう言つた。これから、何度も傷つくこともあるかもしれない。けど、この人達や彼等の笑顔が見れるなら俺は何度だってこの体を血で濡らさう。それで彼らの未来が護れるなら……。

その後、織斑先生も疲れて、テーブルでそのまま寝てしまつたので俺は予備のハンモックを出してそこに寝かした。そして、入口の扉にあるボードを中に入れようと外に出てみると

「すゞ～～。」

「～～～～～」

「いや～～。」

「・・・・・」

そこには、壁に背中を預けて寝ている一夏たちがいた。多分、俺たちの会話をドア越しで聞いていたのかも。しかし、まだ素顔を見られてないだけまだと思い、俺は彼らを部屋に運び込みさらにハンモックの予備を出して寝かしたが、俺の分がなかつたので俺は、カウンターの裏で寝ることにした。床はひんやりしており、それに傷が反応して少し痛むが俺は無視してさっさと寝た。どうせ、明日も忙しくなるだろうと思い俺は眠りについた

ブリュンヒルトは彼の素顔を知る（後書き）

次回はシャルロットを出します。

ラウラはもうちょっと先だと思います。

では、次回の更新でお会いしましょう！――

疾風の王女の來訪（前書き）

遅くなつて、申し訳ござりません。

これから、もう少し早くかけるように精進していくます。

では、どうぞ…！

よこせ・・・・

降り続く豪雨の中少年は言う、その身に黒き龍の鎧をまとい・・・。

代償は払った、もし神がいるのなら・・・

少年の周りには切り刻まれたり何かに擊ち抜かれ既にこと切れて  
いる、龍の骸が無数に転がる。

俺に・・・・・

少年は返り血を浴びた顔を上げ分厚い雲に覆われた天に向かい言  
つた・・・。

全ての正義（人類）に報復する力を・・・・

少年のその瞳は全てを憎みし者の瞳であった。紅き瞳はただ憎  
悪を込めて天を見つめる。

よこせ・・・・

少年はそうただ呟き続けた。そしてその呟きは豪雨の中にかき消  
されていった・・・・。

「ん…………。」

私は目を開けました。どうやら私は眠っていたようです。さつきのはいつたい何だったのしよう。しかし、さつきの声どこかオルグ君に似てたような気がしました。そう思つと、胸を締め付けられるような感覚がしました。今私の目線の先にはコンクリートの天井が広がっています。とりあえず、私は起き上がろうとしたのですが、

「よいつょって、あわわわ……！」

急に私がいる場所が揺れだしてそのまま、私は床に放り投げられました。ガニッといい音を立てて私は顔から落ちました。

「うへへへへ、痛いですへへへ。」

私は顔に手を当てながら自分が寝てた場所に目をやるとそこはホールに吊るしてあるハンモックだったのです。その隣には複数のハンモックが私の同じように吊るされており中から寝息が聞こえてきます。どうやら私以外に誰か寝ているようです。私はその前に眼鏡をかけていないことに気づき何処かにないか探しましたが視界がぼ

やけていたのほとんどあたふたしていました。

「山田先生、起きたのか。」

すると眼鏡を探している私に織斑先生の声が聞こえそちらの方に顔を向けました。ぼやけて見えますが彼女は今、髪が少し濡れていて体から少し熱気を感じます。タオルを首にかけており、ジャージ姿の所を見るとどうやらシャワーを浴びていたようです。その手には何やら眼鏡のようなものがありました。

「おはよう。織斑先生。」

「おはよう。山田先生の眼鏡だ。」

織斑先生は、そう言つと私に持つていた眼鏡を渡してくれました。私はそれを受け取りようやく視界がはつきりしました。私がいる部屋は昨日訪れたオルグ君の部屋でした。

「えっと・・・・、私は・・・・。」

私は昨日あつたことを織斑先生から説明されました。私はどうやら泣き疲れてそのまま眠つてしまつたのです。

「山田先生、昨日あつたことは必ず他言無用でお願いします。」

「昨日あつたことと言えば、オルグ君のことですね。」

「そ、そうですね。」

それに私はオルグ君にずっと抱きしめられていきました。オルグ君の胸のなかつて結構暖かつたですね。・・・。って駄目ですよ。教師が生徒にそんな感情を持つてしまつたら。

「山田先生、一応彼は生徒ですから妙な気は起りません。」  
「。」

織斑先生が何故か絶対零度な視線で私を見ながら言います。お、織斑先生、とっても怖いですよ。（涙）。

「全く・・・・、いい加減起きたらどうなんだ？」

織斑先生がハンモックに目をやりながら言った。するとハンモックの下の部分が少し凹み織斑君が起きてきたのでした。

「千冬姉、俺は・・・・・。」

どこか悲しい目をしながら織斑君は言いました。

「織斑先生だ、馬鹿者。」

織斑先生はそう言いつと織斑君に近づきチヨップをいました。そして、その衝撃で織斑君はさつきの私と同じくいい音を立てながら床に叩き付けられた。うわ～、痛そうですね（苦笑い）。

「お前が外で私たちの会話を聞いていたのは知っている。」

織斑先生は真剣な目で彼に言いました。どうやら、織斑君は外で昨日の会話を聞いていたみたいですね。私もまったく気づきませんでした。

「無粋なことをしたのはわかってる……。」

「もし後悔しているのなら普段道理に接してやれ、いいな。」

織斑先生は彼にただそつ言つただけでした……。

side out

その後、対抗戦は中止になり乱入してきたアンノウンに関して学

園側は調べようとしたのだがオルグ（聖火）が粉々にしたため調べることができなかつた。そして、その次に問題になつたのがISと同等いや、それ以上の存在である物に生身で勝つてしまつたオルグ（聖火）のことだ。後日その異常な身体能力を調べるために様々な検査が行われようとした。そこでオルグは（聖火）はあらゆる手段を講じてなんとかごまかした。今、世間に自分（化け物）という存在を知られるわけにはいかなかつたのだ。精密検査が行われた後に例のアンノウンのことについて尋問を受けたが知らないといった。しかし、彼はあれを知つていた。彼の世界で開発された兵器、

対人制圧用 第四世代 機械恐神器 ZT ヴエロキラプトル アサシンタイプ

アンノウンの名前だ。彼の世界の兵器であつたため証拠を残さないために粉々に破壊したのだ。来たるべき時までその存在を明かさないと彼が決めていたからだ。そして、この出来事が外部に漏れることを恐れた学園側はこの事実をISで撃退したと改変して国の上層部に報告した。

しかしその後さらなる問題が彼に降りかかつた。ISが最強であるという根強い考えを持つ教師が彼との模擬戦を希望したのだ。しかし、ネズミがライオンに挑むほどその模擬戦は無謀な選択であつた。教師は、ISをぼろぼろにされ逆に彼に一撃も与えることができなかつた。そして、この模擬戦後彼を取り巻く状況がさらに深刻化した。模擬戦を行つた教師と同じ考え方を持つ生徒が彼を敵視したのだ。そして、その影響と彼が放つその不気味な雰囲気から近く生徒が目つきり減つたのだ。

けれど、一夏や同クラスの生徒はいつもと変わらずに彼に接した。彼が普段とても優しくて頼りになる存在だと彼と過ごすうちに感じ始めたからである。一夏たちは、最初こそは戸惑っていたがオルグが全く彼らのことを気にしている様子はなく普通に話していたので彼らも気にすることなく話すことができた。

そんなクラス対抗戦の「ゴタゴタ」が収まってきたある日のことだった。

### s i d e — 夏

あの一件から数週間たつた。オルグとの関係は初めこそは俺が一方的にギクシャクしていたのだが、あいつが全く気にしていないように話してくれたので、俺もあいつと普段道理に話すことができた。そして、俺は今自分の席についている。俺は昨日、幕に

「もし、私が今度行われるタッグマッチの大会で優勝した私と付き合ってもらひつーーー！」

と宣言されていた。付き合つてもらうつて、買い物位別に普通に行つてやるのにな・・・。俺はそう思いセシリニアと話している幕に目をやるが、一瞬こちらに気付いたが、ついとどこかすねたよな感じで無視されてしまった。俺、何もしてないよな・・・。

今思つたのだが朝から女子が騒がしいのだ。どうやら何かしらの噂が立つてゐるらしい。俺が聞いても、

「なんでもないよつ！――！」

そう言つて全員一点張りなのだ。俺はこういつた時の頼みの綱のオルグに田をやつたがあいつの席が空いているのだ。あいつ、休みか？

「全員席に着けつ、ホームルームを始める。」

そう言いながら千冬姉が山田先生と共に入ってきた。どことなく山田先生の顔がにやついているのは気のせいか？そして、千冬姉はいつも通り窓越しにある椅子に足を組んで座つた。そして、山田先生は教団に手をついてすがつた。

「先生。オルグ君はどうしていないんですか？」

クラスの一人が席を立てて山田先生に質問する。俺も、同じく聞こうと思っていた。

「オルグ君は、ようやく専用機が届いたので第一アリーナに行つ

ています。」

そう言えばオルグの奴、専用機がまだ来てないとか言つてたな。生身でEIS倒せる奴がさうにEISを纏つたら誰も勝てないんじゃ・・・。

オルグはあの件以降教師の一人にEISでの模擬戦を半ば強引にやらされて逆にボコボコにしてしまってそれ以降上級生や別のクラスの連中がオルグに模擬戦を挑んでそのたびに返り討ちにあつていた。そして、あいつがEISと生身で戦うのが日常になつていたので全くアイツのEISのことについて忘れていた。

「それでは、改めて。今日はなんと転校生を紹介します。」

そう言いながら山田先生は教室のドアに目をやつた。

そして、教室には静寂が流れていた。そう、その転校生が俺と同じ男なのだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさん、よろしくお願ひします。」

金髪で長い髪を後ろでくくつていてる。いかにもどこかの王子様といった感じだ。オルグと大違いだなとつい思つてしまつた。

「え・・・」

「えへ。」

やばい、この流れはつ……俺は、すぐさま両耳をふさいだ。

「キヤアッ

…………

いつもながら、これは本当に音響兵器何かと勘違いしてしまってうなぐらいで凄いぞ。ほら、デュノアだつて少し退いてるぞ。

「男子よつ……しかもまたつちのクラス……。」

「王子様系ですか」くかつ……

「守つてあげたくなるタイプよつ……。」

「地球に生まれてよかつた……。」

「うちのクラスの女子は本当に元気だよな……。」

「静かにしりつ……。」

すると千冬姉がため息を吐いたのちにそつ一括入れた。

シ - - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

おこ、こくらなんでも早すぎないか。すぐさま静まつたクラスメイトに思つた。

「一時間田は、二組と合同でE.S実習を行つ。各人直ぐに着替えて集合しろ。」

「そういや、そうだつたな。オルグは先に行つてるなら俺も急がないとな。」

「それから織斑。同じ男子としてオルグと一緒に面倒をみてやれ。」

「

「そうだよな。とにかく他の女子が来る前に脱出しないとな。」

「では、解散！！」

パンツと手を叩き千冬姉と山田先生は教室出て行つた。

「君が織斑君。僕はー。」

「ああいいから。とにかく早く出るぞ。女子が着替えるからな。」

俺はそう言つと、デュノアの手を持つてそそくさ教室を出て行つた。

「俺たち男子は更衣室がアリーナだから早めに慣れてくれ」

「うん、ところでもう一人男子がいるんだよね。」

「あー、そいつならいー」

俺がそう言いかけた時、

「ああっ、転校生発見！！」

「しかも、織斑君と一緒に…！」

うまい具合に田の前の通路の角から別クラスの女子が来た。別クラスの女子がH.R.が終わつたので溢れ出してきたのだ。このままじゃまずいな。

「ねえ、どうして僕たちを追つかけているの？」

「そりやあ、今の所I.S.を動かせる男子って俺たち（オルグも入つてる）以外にいないじゃん。」

俺が走りながらそつまつとデュノアがはつと何かを思い出したような顔をした。

「そ、そりだね…。」

？どうして急に言葉が詰まつたのだろう？とにかく急がないとやばいな。俺とデュノアは全速力で走つた。しかし、途中女子たちの挟み撃ちにあい現在囮まれている。

「まづいな、こままだと千冬姉の補修が待つてゐる。」

「あはは、これはすげーね（苦笑）。」

どうする。全方位囮まれて逃げ場がないぞ。くそ、こんな時にオルグがいればいいのにな。

「呼んだかい、一夏？」

「うわっ、ってオルグ！！なんでここにいるんだよ……！」

そう隣に歩く不審者、オルグがいたのだ。いや、おかしいだろ。360度囮まれていて中どうやってここに来た！！突然現れた、不審者に『テュノアにいたっては間抜けな顔を浮かべていた。

「歩く不審者とは、失敬な。ま、とにかくここから脱出するよ。」

心が読まれた。って、オルグどうして俺と『テュノアを両脇に抱えているんだ。

「しっかり捕まってる、二人とも。」

オルグはそう言うと開いている窓に向かって走り出して、その窓越しに立ち下を見た。

「おい、オルグ！…まさか…」

「?どうしたの。」

「そのまさかだ。漏らすなよ。」

そうして俺たちは窓の外の空へと飛びだした。

「ギヤ~~~~~！」

俺とデュノアの叫びが学園にこだました。だつて、オルグが俺たちを抱えた状態で飛び降りたんだぜ。しかも三階からだぜ。そして俺の意識はそこで飛んだ。

「！」の馬鹿者！――

え、と、あの後俺たちはいつの間にか更衣室にたどり着いていた。気づいた時の時刻は42分、授業までもう5分を切っていた。俺は氣絶しているシャルル（呼んでもいいと言われた）を起こして急いで着替えたが1分、間に合わなかつた。

「でも千冬姉っ！――」

スパ  
ン

「織斑先生だ。」

「はい」

いい音を出してまたはたかれてしまつた。クソ、オルグの奴後で覚えていろよ。俺はオルグに静かなる（どうでもいい）報復を誓つた。

「まつたく、ではこれから実演を開始する。まずは、戦闘の実演をしてもらひ。」

「凰、オルゴット。前に出ひつ……」

そう言われ一人は前に出たがいかにもやる気がなさそうだ。そんな一人を見た千冬姉が一人の耳元で何かつぶやいた。

「……は、やはり私の出番ですわよねつ……」

「実力の差を見せるいい機会わよね、専用機もちの……」

どうしてだろ？ 急に一人のやる気が上がったな。千冬姉のいつたいなに吹き込んだんだろ？

「それで、お相手は誰ですか？」

「セシリアとやつあつのかしら？」

そう言いながらお互を見つめながら火花を散らす鈴とセシリア。一人とも熱血だな。ここにいる全員一人の変わり用に苦笑いを浮かべていた。

「あわてるな、馬鹿ども、お前たちの相手はもうすぐ来る。」

千冬姉が腕を組みながら言った。

キイイ  
ン

うん、なんだこの音は？俺は何処からか聞こえるその音に不思議

と嫌な予感がした。

俺の頭上から声が聞こえ見上げてみるとラファール・リバイヴを纏つた山田先生がまっすぐこちらに落下してくる。

「つて、解説してる場合じゃないーーーーー！」

しかし、俺の声とは無関係に山田先生が突っ込んできた。

ドガ  
ン

物凄い轟音と共に俺の上に山田先生が落下してきた。その衝撃で  
土ぼこりが舞い俺は何が何だか分からなくなつた。

۴۷

土ぼこりが舞う中、俺の手にとても柔らかい感触を感じた。俺は物凄く嫌な予感がして、恐る恐る目を開けた。

「す、すこせんつ！…！」

俺は山田先生の2つの山を駆け込みしていったのである。つつ、殺氣

！！！俺はすぐさまそこから飛びのいた。その刹那俺のいた場所に  
青い閃光が飛んでくる。

「おほほ、外しましたわ。」

セシリアが黒い笑みを浮かべて自身のブルー・ティアーズを展開させライフルで撃つてきたのだ。待て、今のは事故だ！！！

「一夏～～～～～～～！」

すると今度は鈴がどす黒いオーラを出しながら甲龍を展開させ二本の双天牙月を連結させてブーメランのように投げてきた。やばい、当たつたら死ぬ！！！！

バンッ！！！！

しかし、飛んで来たそれを閃光があたりはじき落してくれた。山田先生の方を見ると自身のライフルの砲身から煙が上がっていた。どうやら打ち抜いてくれたらしいのだ。た、助かつたぜ。

「大丈夫ですか、織斑君？」

「は、はい。」

いい笑顔で俺に微笑みかけてくる。でも、あの体勢から打ち落とすなんて山田先生つて意外とすごいんだな。冷静になつた俺は思つ

た。

「山田先生は、元代表候補性だ。このくらい造作もない。」

「といっても代表止まりでしたから大したことありませんよ。」

少し千冬姉の発言に照れながら山田先生は手を頭に当てながら言った。

「さて、小娘共。今から、山田先生と模擬戦をしてもらひ。

それを聞くとセシリアと鈴は氣まずそうな顔をした。

「一対一ですか？」

「わすがにそれは……。」

たしかに、いかに先生でも一対一ではきついだろう。それに一人は代表候補だし実力も大分高い。そのうえ、二人はそれぞれ専用機。対する山田先生は量産機で圧倒的にポテンシャルが違うからだ。その状況ではいくらなんでも教師でも苦戦は必至なはず。

「はあ～、誰が一対一といった。」

そう千冬姉がため息交じりに言つた。そして、その刹那の事だつた。

ゴ

物凄い空風が俺たちの間を駆け抜けた。周りの女子たちがあまりに突然のことだったので悲鳴を上げていた。目を閉じて俺は風が止むのを待つた。そしてそんな中俺は頭上に何かが通り過ぎていくのを感じた。そして、その数秒後突然風が止んだ。

「すいません、遅くなりました。」

それと同時にオルグの声がしてきた。俺は閉じていた目を開け声がする方に目をやった。他の女子も目をやっているが全員オルグを見て唖然としている。

藍色を基調とし細い赤のラインが入っている武者のような装甲に身を包み右手にマシンガンを持つて仁王立ちしたオルグがいた。しかし、驚くべきところはそこじゃない。あいつの背中に付いているのだ。明らかに生物が持っている膜の翼が付いているのと背中に巨大な細長い魚雷のような形をした筒のようなものを背負っている。そして極め付けはオルグの顔を覆っているものだ。機械だが前のアソノウンに似た感じだがどこか違うどちらかというと龍の顔に近いもので覆っていた。ISというものとは、少し違う感じがする。まるで、機械の鎧を纏つた龍の戦士のような感じがした。

「それが、お前の機体か・・・・。」

千冬姉と山田先生もオルグを凝視していた。当然だらう。前のアソノウンと所々酷似しているのだから。

「第三世代 IS 打鉄 飛龍式です。」

オルグはそう言つと山田先生の隣へと翼を羽ばたかせていった。バサバサと翼がはためくと土ぼこりが舞つ。

「さあ、小娘ども。これで遠慮なく戦えるだろ。さつさと空に上がりつ……」

そして、睡然となつていた鈴とセシリアも千冬姉の声で正気に戻り急いで空へと上がつていつた。山田先生もオルグと共に空へと上がりつていく。

Side out

Side 聖火

俺は今、上空でセシリアと鈴と対峙している。あの事件の以来彼女らが呼び捨てをしてもかまわないと言われたのでそう呼ばしてもらつてている。

「オルグ君……。」

隣に静止している山田先生から声を掛けられそつと見ると普段とは違う真剣な目になつていた。

「その機体、後で調べさせてもらいますよ。」

「この前のアンノウンと酷似している部分がありますから。」

そう彼女は言つ。この機体にはDTとCTに使われていた人工筋肉を小型化して搭載していると同時に飛龍の羽を使用しており、サイボーグに近いものでISとは全く別物だ。学園にはそのため情報

を開示していない。けれど、おそらく放課後に織斑先生も同じことを言つてくるだろう。事件の尋問はなんと乗り切れたが今度ばかりは逃げられないだろうと思つ。

「わかりました。けれど、条件があります。」

「悪まで、あなた個人として見せますので学園側には見せない。」

「これを飲んでいただけませんか？」

山田先生は少し考えたのちにあとで織斑先生と相談するといつた。まあ、妥当な手だろうと思つた。

『オルグ、準備はいいか？』

織斑先生から通信が入り了解と言つて切つた。

「やつとです。少し待ちくたびれましたわよ。」

「オルグッ、手加減はしないわよ！――」

そう言つて一人を見つめる。山田先生も持つていてるライフルを構える。それじゃあ、軽くもんでやるか。俺はマシンガンの雷蓮三式を構え戦闘態勢に入つた。

Side out

Side シャルル

僕は頭上にいる存在に驚愕していた。オルグという人が使ってい

るISが一年前にフランスのデュノア社襲撃事件で現れた鎧を纏つた龍、「黄金の風」にあまりにも似ていたからだ。黄金の風は表向きは会社側のIS操縦者が撃退したことになっているが実際は違う。巨大な龍が舞い降りてテロリスト簡単に撃退したのだ。僕もその一部始終を隠れてみていたので知っていた。そして、その龍が去った後IS操縦者であつた僕のお母さんを探したが何処にもいなかつた。西洋風の鎧を纏つていた黄金の風があの人が使つているのはそれと同タイプだと思う。

「それでは、模擬戦を開始しろっ！！」

織斑先生の合図で上空の四人が一斉に動き出す。オルコットさんのブルー・ティアーズから四基のビットが現れビームを放ちながら山田先生を襲うが山田先生もそれをうまくかわす。凰さんは肩から龍砲をオルグ君に向かつて放つがオルグ君は背中の魚雷みたいなスラスター吹かせ翼でうまく向きを調節しながらそれを回転しながら強引に交わす。僕の周りの人たちを見てみると織斑先生以外は上空で行われている模擬戦に夢中になつてている。

「オルグって、やっぱり凄いな・・・・。」

「前から強いと思っていたけど、ここまでレベルだとはな。」

隣に来ていた、一夏と篠ノ野さんが呟いた。ふと、織斑先生の方に目をやつた。彼女は今険しい顔をしながらその模擬戦を眺めていた。いつたいどうしてなのだろう？

「デュノア、山田先生が使つてているISを解説してみせろ。」

すると、織斑先生が僕に対してそう言つてきたので僕は一通り山

田先生が使っている「ラファール・リヴァイヴ」について解説をした。そんな中でも、戦闘は続いていた。オルコットさんはスターライトマーク1?で狙い撃つが山田先生には全く当たらない。しかし、その間に山田先生の弾丸がオルコットさんのシールドエネルギーを削つていく。

一方凰さんは、甲龍の龍砲が当たらないことを悟ったようで近接ブレードの双刃天月を連結させてオルグ君に切り付けていく。しかし、オルグ君のとった行動に僕は驚いた。凰さんの双刃天月をなんと正面から片手で受け止めたのだ。そして、その間に彼は持っていたマシンガンで龍砲の部分を撃ち抜く。しかし、驚いたことにそのマシンガンの弾が明らかにビームのようなものであった。そしてそれを収め今度は塞がつていない手に薙刀を展開した。そこから彼の反撃が始まり、薙刀で凰さんを切り付ける。その反動で凰さんが突き飛ばされるがそれより早くオルグ君が背中のブースターを全開にして後ろに回り込み切り付け、そしてまた後ろに回り込み切り付ける。凰さんもなんとか抵抗しようとするがあまりの速さに手も足も出ない。

山田先生もセシリシアとの距離をじりじりと詰めていきオルコットさんを凰さんの方へと弾き飛ばす。オルグ君もそれに気づいたらしく切り付けるのを止め、凰さんの腕を掴みオルコットさんの方に投げつけた。二人は上空でぶつかり金属がぶつかる音がした。その間に山田先生はすぐさまグレネードを展開して一人に向かつて撃つ。一方オルグ君は、口を大きく開いた。最初は何をしているのだろうと思ったが口に光が集まり、赤色の光弾が放たれた。これには、さすがに織斑先生も驚いたらしく開いた口が塞がらない様子だった。二つの光が二人に当たり

爆炎を上げた。そして、二人は黒い煙を上げながら織斑先生の前に落下する、それに続いて山田先生が下りきて、最後にオルグ君がブースターを弱めながらゆっくり下りてくる。

僕は一瞬背中に嫌な汗をかいた。彼のオルグ君の発する明らかにこの場にいる人とは違うオーラを感じたからだ。他の人を見渡すが全員感じてないらしくオルグ君や山田先生に向かつて賞賛の声を上げていた。僕は個人的に彼に接触する必要がありそうだね・・・。お母さんの行方をしつているかもしれないから。僕は黄金の風に死亡扱いになっているお母さんの行方を知っていると思われる存在にわずかな希望を抱いた。

Side out

Side 千冬

オルグが苦しい戦いを経験してきたのはこの前の話で断片的には分かつたがまさか IIS の戦闘だけでここまで強いのかと思つてしまふくらいのものだつた。生身の戦闘だけでも途轍もなく強いのに IIS での戦闘では予想はしていたが代表候補生などやはりまったく敵ではなかつた。しかし、奴の戦い方は強者の動きだ。私もかつてはブリュンヒルデと呼ばれはしたがアイツと戦つて勝てるだろつがタダでは済まない、おそらく本物の死闘になるだろつ。

（オルグ、お前は、いつたいなんだと言うのだ？）

年相応には思えない場馴れした雰囲気と戦闘力。15歳の青年が普通は持ち合わせていらないものばかりだ。そして、前回襲撃してき

たアンノウンと酷似したEIS。

（アイツに調べてもらつか・・・・・・。）

私は、オルグの事を私の親友である奴に内密に調べてもらうこととした。アイツには悪いと思うが生徒や弟に危険な思いをこれ以上させるわけにはいかないからな。そして、目の前でぼろぼろになっている馬鹿者たちと下りてきた山田先生とオルグを冷静に見つめた。

## 疾風の王女の來訪（後書き）

如何でしたでしょうか？

終わりが中途半端だったので申し訳ないです。

次回、ラウラを出したいと思います。

では、また次回の更新でお会いしましょう！！

黄金の風と打鉄 飛龍式、ZTの設定を近い順に挙げておきます。

## パンダの絵と黒ウサギとの対面（福井城）

すみません。

また遅くなってしまった。

いろいろと用事がありかけませんでしたがやつてドヤました。

では、さういい——

## パンドラの箱と黒ウサギとの対面

Side 聖火

カタカタとパソコンのキーをたたく音が薄暗い部屋の中、響き渡る。俺の前では俺の機体である飛龍式の解析が山田先生と学園の誇るスーパーコンピューターによつて行われている。俺は彼女の座つているモニターの横で織斑先生とその様子見守つている。現在はあの授業から時間が過ぎ放課後となつており放課後、俺はHRが終わつた時に織斑先生と山田先生に呼び止められ、条件を飲むと言つて調べさせりと言つてきたのだ。

おそらく、向こう側は未知の存在である飛龍式と俺の戦闘力を考慮してこの要求をあえなく飲んだのだろう。俺と敵対して模擬戦を挑んできた教師を何故いちいち相手をしてコテンパンにしていたのかは、この時のためである。

本心では、戦いたくはなかつたが飛龍式が来たら嫌でも学園側からデータの開示が求められる。その時に、こちらは条件を提示し向こう側にそれを飲んでもらうため最初のうちにある程度、自身との実力の差を見せつける。こうすることによつて、相手が要求を否定した場合どうなるかを連想させる恐怖心を植え付けることができる。現に、彼女たちは条件を飲み、彼女ら個人で見せてほしいと言つてきた。最上の結果だらう。

ここまででは、俺の予想道理に事が運んだ。さあ、ここからはある程度は彼女たち俺の持つている情報を話さなければならない。もちろん、全て話すのではなくある程度誤魔化しながらだ。

突然、山田先生が操作していたモニターにヒラーの表示が音と共に表示された。

「駄目ですね、ある程度のレベルまで調べられますが、そこからはロックが掛けられていますね。」

そう言いながら、俺の方に椅子を向けた。

「山田先生、現状でわかつてることとは……。」

隣にいる織斑先生が腕組みをしながら静かに言った。

「打鉄の発展期のようですが、それ以上は調べることができますでした。」

「強力なロックが掛かっているみたいなんですね。」

「そうか……。」

織斑先生はため息を吐き、そして俺の方を見る。

「お前に開示できるか?」

「お望みならば。」

「やれ、一応そちらの条件を飲んでやっているのだから。」

「わかりました。」

俺はそう言い山田先生の席に代わりに座り、キーをたたく。カタカタとその音だけが室内に響き後ろの一人は黙つて俺の作業を見つめる。織斑先生からは相変わらず警戒のまなざしが強い。いくら、俺の事を信用しているとはいえ正体不明の存在なのだから当然のことだと思う。そんな中、しばらく打つていくと機体側から音声でのパスワードの記入を求められた。

「オルグ君、パスワード。わかりますか？」

山田先生が心配そうに尋ねてくる。しかし、このパスワードはあれであろうと既に俺の頭の中に過つていた。しかし、ここからが問題なのだ。ここから先に開示されるデータ、それは文字通り彼女らにとつてはパンドラの箱であろう。もし、彼女たちがこれを知つたらもう今までの平和な生活に戻れなくなるかもしれない。そうなる前にと思い俺はゆっくり一人に振り返り警告をした。

「ここから先は文字通りあなた達にとつてはパンドラの箱です。これを見てしまえば元の平和な生活を送れなくなるかもしれません。」

「…………」

「もし、それでも見るとこつ覚悟があるのなら先に進みます。」

俺の言葉を聞いて、彼女たちは表情を一瞬曇らせて、しばらく一人で話し合つた。彼女らはある程度俺の事を理解し信用してくれている、そのため俺が言つていることが偽りでないことを既に悟つているのだろう。そして、しばらくしてふたりはうなずき俺の方に向いた。どうやら決まつたらしい。織斑先生は強い瞳で見つめながら俺に言つた。

「構わない、進める。」

この時彼女たちは知らなかつた。自分たちがこれを見たことによつて激動の戦いの輪廻に組み込まれてしまつことを・・・・。

「わかりました、では行きます。」

俺は再びモニターに向かいキーの横にあるマイクに向かつて言った。

咎人よ、龍であれ

Side out

Side 千冬

奴の声でモニターにあのHSのデータが一斉に流れ込んでくる。世の中には見ない方が幸せなことがあるとは言つけれど今まさに私と山田先生に当てはまっているだろう。そのデータを見ていくうち

に次々とあり得ないデータが表示されていくからだ。

「…………男でも使える」とのできるHS…………。

そう、奴のHSはこの世界の常識やバランスを簡単に覆せれる代物だった。

「こいつの正式名所は第一世代 IDS 打鉄 飛龍式。」

「HSであつてHSでならざるものです。」

「インフィニット・ドリコン・ストリタス…………。」

「第一世代の打鉄にある機動兵器に使われている人工筋肉やOSを移植して作り上げたものでまったく別なものになつています。絶対防御は存在せず変わりに固い鎧を纏っています。」

そう言いながら、奴はどんどんとキーを叩き機体のデータを開示していく。しかし、そのどれもこれもが見ている限りではオーバーテクノロジーの塊だった。ビーム兵器やあらゆる攻撃をある程度弾くことのできる「偽りの鎧」と「龍神の鎧」なる特殊金属でできた装甲や武器。さらに、HSのコアを直結して作動することで人間以上の動きを可能にする特殊人工筋肉とOS。それに、HSのシールドエネルギーを容易く削ることのできる高出力のレールガンやビーム兵器。おそらくではあるが、今この機体と敵対して勝てるHSはこの地球上に存在しないであろう。

「まさにパンドリの箱だな…………。」

私は思つ、このデータがもし外部に漏れてしまえば文字通り各国

によるこの機体の争奪のための戦争になる。さらにE.S.によって抑圧されていた男性がこの存在を真っ先に手に入れようとオルグの命を狙つてくることは火を見るより明らかだ。それぐらいの力がこの機体にはある。隣にいる山田先生に至つては口を大きく開けて信じられないような表情を浮かべていた。たしかに、こんなもの他の教師に見せてしまえば何をするかわかつたものではないと思い、奴の行動も納得がいった。

「どうでしたか……。」

ふと、奴の声に現実に引き戻された山田先生がおどおどしたような口調でオルグに問いただした。

「お、オルグ君。あなたはいったい……。」

世界とわたりあえる技術を手元に持つている存在に自然と恐怖がわいてきたのである。相変わらず奴の顔は隠されているのでさらに不気味さが増しているように思えた。けれど、

「ただのH.I.V学園でのあなた方の一生徒ですよ。」

オルグは山田先生にそう言った。機械を介して話しているため感情が読めないが優しく言つてくれていることが伝わってきた。私も正直山田先生と同じく不安ではあつた。こいつはこんな力を有しているのだから、もしかしたら我々の使つてているH.I.Vの中心であるこの学園をつぶしに来たのではないかと？

けれど、もしこいつにそんな野心があるとするなら、篠ノ野をしてH.I.Vの生みの親であるアイツの妹である存在を命がけで守つたりはしないだろうしこんな情報を迂闊に見せたりはしないだろう。

わざわざ我々とこゝ殲滅対象に手を晒すやつなどいなじからだ。

しかし、私にはいくつか奴の話を聞いていてひつかかることがあった。奴は最初にとある機動兵器の技術を移植した物だと言つたがそんなものー切聞いたことはない。さらに、この技術を開発した研究者や科学者などはいくら情報を隠してもいづれは漏れるはず、それに世界で最も多くの情報の得ることのできる私の親友からもそんなことは聞いたことがなかつたのだ。

「オルグ、お前が言つたある機動兵器とこゝのははいつたいなんだ。」

私が奴にそう質問を投げかけた。

「見たいですか？」

「見たいから言つておるのだろ？が。」

「わかりました。ですが現時点ではお見せすることができません。」

「何故だ？」

「この機体にはそいつのデータは入つていないからです。ただし、お時間さえいただければ数週間後にはお見せすることができます。」

「・・・わかつた。それまでは、待とつ。」

「もう一つ、質問がある。再度聞く」となると思つがお前は「の前襲撃してきた奴を知つておるな？」

「・・・・・・・やはり言わなければいけないですか？」

「やはり知っていたか。もし言わなければ、お前の立場が危うくなるだ。」

「E.Sと互角に戦える新勢力の存在、その正体を知っているのだから・・・。」

「最悪、拷問を行つても躊躇せなければならぬことですか？」

「・・・・・・・・。」

無 言の肯定を奴に返す。生徒に拷問を掛ける、ましてや私の弟や親友の妹を命がけで守つてくれた恩人、そんな奴に拷問を掛ける、そんなことは教師として、人間として最もしたくはない。しかし、このまま奴が知らないふり決め込め続けられるほど今の学園側の状況はよくない。

学園の上層部の一部ではオルグの存在を危険視している者、オルグがアンノウンの情報を握つてているのではないか?と考える者が少なからずいる。もし、その者たちが強硬手段を取つたら、確実に無事では済まない。最悪の場合は、アンノウンの襲撃を素性の余りわかつていなオルグに、奴の自作自演という理由で奴に押し付けて飼い殺しにすることもあるかもしだれない。

もしそうなつたら、いくら私でも救うことができない。だからこそ、奴から少しでも情報を引き出して欲しいのだ。

「・・・・NT。」

しばらぐの沈黙の後に奴からそういう言葉が返ってきた。

「ジュラシック・タクティカル?」

山田先生が初めて聞く言葉に私の隣で顔に疑問符を浮かべていた。

「それが、奴の、あの類の兵器の名前です。」

オルグはそれ以上私に答えることはなく今度は山田先生の質問に淡々と答えていく。

オルグ・D・ヘルグ、私はまだまだ奴に対する警戒を解いてはならないなと思いながら山田先生と話す奴を見つめた。

Side end

Side — 夏

放課後、オルグは千冬姉と山田先生に連行され教室を出て行ったため俺はシャルルに声をかけて一緒に教室を出た。

「オルグの奴、いったいどうしたんだ?」

「多分、あの工芸のことをついて報告しに行つたんじゃないかな?」

廊下を歩きながらシャルルと今日のことをや学校のことをついて話していた。

「一夏は、これからどうするの?」

「アリーナで篠やセシリア、鈴と工三での特訓だな。」

「へへ、ねえ。その特訓僕も混ざつていいかな?」

不意にシャルルが俺に對してそう言つてきた。同じ男子がいれば心強い。オルグのいない放課後特訓はいつも俺に對する一方的なりンチだからな。

「いいぜ。よろしく頼むよ、シャルル。」

「うん、よろしく一夏。」

俺とシャルルはそんな談笑をしながらアリーナへと向かつた。

「それとさ。一夏、今度ヘルグ君の部屋に連れて行ってくれないかな?」

「うん? 本人に直接言えばいいんじゃないか?」

俺はシャルルに問いかける。

「そうしたいんだけどね、一夏の方が僕より彼との付き合い長いから話しやすいと思つんだ。それに、なんていうか、すりゃ話しつくそだから。」

苦笑いを浮かべながらシャルルは俺に言つた。確かに、あんな顔だし、無理だろうな。

「わ、わかった。今度でいいか?」

「うん、ありがとね。一夏。」

シャルルが満面の笑みを浮かべながら俺に言つてきた。え、笑顔がまぶしいぜ。

「は、早く行こうぜっ！」

俺は思わず見とれてしまつたことを誤魔化すようにシャルルの手を引いてアリーナに走つて行つた。途中、シャルルが顔を赤くしていたので風邪でもひいているのかときいたらばぶてたように違うと言われた。また、このパターンかよ・・・。

しかし、この時俺は後ろにいる修羅三人に気づいていなかつたのだ。

Side end

Side-夏ラヴァズ

丁巳年夏月  
王國維著  
王國維集

「一夏さんにベツタリですわね。」

「落ち着け、一夏に限つてそんなことあるわけないだろ。」

私は廊下の陰で一夏と今日転校してきたデュノアとの会話を影から不のオーラを出しながら見ているオルコットと凰に言ひ。

「筈、あんたはいいわけつ――――――」

「そうですわつ！――」のまま一夏さんを取られてしまつて――」

「だから、テュノアは男だらうが……。」

幕は片手を頭に当ててため息を吐きながらそつと。それにしても、一夏の奴め。私の気持ちなど知らずに他の奴といぐら男だからと言つてあんなに仲良くしあつて……。と心中でかすかに咳く私であつた。

しかし、この乙女たちは知らなかつた。数週間後にはこのドタバタがこれまでにないくらい加速していくことを……。

言つまでもなく、このあと一夏はシャルルの説得空しく、恋する乙女たちによる理不尽な模擬戦（拷問）を強いられその様子をシャルルが苦笑いを浮かべながら眺めていた。そのアリーナの外で、偶然通りかかった生徒は中から悲鳴らしきものが聞こえたそうな。

Side end

翌朝、一組の教室ではまた転校生が来るという話題で持ちきりだつた。

「オルグ、今日転校生が来るらしいぜ。」

「この時期に立て続けに転校生か。珍しいな。」

オルグと一夏は今回来る転校生について椅子にこしを掛けて話していた。どことなくボロボロになつて一夏に対しオルグは昨日何があつたのか大体察していたので突つ込まなかつた。しかし、

オルグは一夏には言わないが今回の転校生やこの前来たシャルルなどの事について快く思つてはいなかつた。別にシャルルについて悪いイメージは持つていないが彼らが来た理由だ。彼らが来る理由は十中八九、一夏と自分に近づいて専用機のISのデータの奪取が目的であるといひことが明らかだつたからである。

そして、そんなことを話していると山田先生と織斑先生が教室に入つてきてホームルームを始めた。案の定転校生の紹介がされて教室の入り口から一人の女子が入つてきたのであつた。

「カラ・ボーデヴィッヒ」

銀髪の背の低く左耳に眼帯をしており、制服の着こなし方がいかにも軍服のようだつた。おまけに彼女じたい軍人らしきオーラを出していたのであほな人間でもすぐに軍の関係の人間だとわかるであらう。この世界ではこういつたISを扱えれば、たとえ子供だろうと軍に所属することができるのだ。

Side一夏

今、山田先生の横に立つてゐる銀髪の奴、俺よりひどい自己紹介をするもんだなと思つてしまふくらい無愛想だつた。すると、そいつは俺の前に歩いてきたのだ。ん？ いつたいなんだろ？

「！ 貴様がつ！ ！」

そう怒りに満ちたまなざしをしながらそいつは俺に向かつて手を振り上げた。俺はとつさの事だったので反応できずそいつの平手が俺の頬を捕らえようとした瞬間俺は思わず目を瞑つた。

ガンッ！ ！ ！ ！

しかし、いつまでも俺に殴られたときの衝撃は来ず変わりに前方で何か途轍もない音がこだました。俺は何事かと思い瞑つていた目を開けた。

「マジかよ・・・・・。

ほかの生徒もその光景を見て口を大きく開けていた。山田先生も同じでその光景に少し涙目を浮かべていた。

「オルグ、やりすぎだ・・・。

千冬姉は若干呆れ気味でそうつぶやいていた。俺の前にいたラウラとかいう奴は今現在俺の前からいなくなり変わりに黒板にぶら下がっている。肩の服の部分に刀が刺さっていてそれが黒板に突き刺さりアイツの動きを封じているのだ。

「すいません、つい体が動いてしまいました。」

そう声がして、全員がオルグのいる後ろの方に目をやつた。オルグは席を立つて何かを投げたような体勢になっていた。さらに左手には鞄が握られていてどうやら、俺を助けてくれたらしい。

「あ、貴様！――何をするつ――――！」

黒板にぶら下がっているボーデヴィイッヒが服に刺さっている刀を抜こうと足搔くがどうやら深くしつかり刺さっているらしくなかなか抜けない。しばらくそんなことをそてているとボーデヴィイッヒが頬を赤く染め涙目になりながらオルグに怒鳴りかける。なんだ、結構かわいいかも、アイツ。しかし、オルグは何も答えることなくボー

デヴィッシュに近づいていく。

「オルグ、早く下してやれ。」

千冬姉が放心状態になつている山田先生に代わつてボーデヴィッシュの前に来たオルグに言った。すると、アイツはボーデヴィッシュの耳元に顔を持っていき何か囁く。その行動にクラスメイトが歓喜の声を上げていたのは余談である。しかしその瞬間、ボーデヴィッシュの顔から一瞬で血の気が引いたような感じになり何かを怯えた表情になつた。

（オルグの奴、何でアイツに言つたんだ？）

そして、何かを言いきるとアイツは少しため息交じりに刺さつていた刀を黒板から引き抜いてそれと同時にボーデヴィッシュは床に落ちて尻餅をついた。しかしこのあとがまずかった。同時に後ろの黒板の一部が音を立てながら崩れ落ちて行つて黒板の半分が崩壊し使えなくなつてしまつたのだ。空しくガラガラと崩れ去り黒板が哀れな姿に・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

教室内で何か線のようなものの切れる音がして教室の雰囲気が一気に暗くなつた。

気のせいだらうか？オルグの背中からあり得ないくらい大量の汗をかいしているように見えどうしてかすこく足をがくがくさせているような。そして、マズッタと小声で咳きながら連呼する声がアイツ

・・・・・・・・・・・・・・

から漏れている。

「オルグ・・・・。」

すると、何処からかその光景に見入ってしまっているオルグに向かって恐ろしいぐらいの冷たい声が向けられた。オルグは、声のした方向にギギギと嫌な音を立てながらゆっくり振り向いたが、案の定髪がフワフワと逆立ちあり得ないぐらいの怒氣を出している千冬姉（鬼）がいた。

「お前という奴には、本当にもう一度しつかり話さなければならぬ。」

につこりとすがすがしい笑顔をしながらオルグに言つ千冬姉がいた。どうしてだろう、千冬姉の髪が逆立つてゐるような風に見えるが、つて千冬姉、竹刀なんてどこから出したつ――！

逃げるつ――――――――――

そう叫びながら、オルグは教室のドアをけ破つて廊下へと逃走した。行動早いな。

すると、千冬姉もそれに続いてそこから弾き飛ぶかの「」とく、そこからオルグを追つて廊下へと疾走した。

「オルグ、達者でな。お前の事は決し忘れないからな。」

「オルグの奴、生きて帰つて来れんな。」

「お達者で、オルグさん。」

「あはは、みんな酷くないかな・・・・。」

俺の隣にいつの間にか来ていた、篝、セシリ亞、シャルルが言った。

聖火、何時ぞやの借りは返したぞ。グフフフフフ（作者の声）

その後、放心状態からなんとか解放された山田先生がボーデヴィッヒを席に着かせてホームルームを進めたが、途中なにかの断末魔のような声が何回も聞こえそのたびに物が壊れるような音がしたが俺は気にしてたら負けだと思いそのまま山田先生の話を聞いた。

「俺は無実だつ――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

「逃がすかつ――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

ちなみにこの死の鬼(じつけん)（馬鹿馬鹿しい）は一時間近く続いた

そこで廊下の彼方此方になにか細いもので突かれたような穴が沢山  
できていたとか・・・・・。

聖火ザマー（作者の声）

## パンダの箱と黒ウサギとの対面（後編）

如何だったでしょうか？

次回、シャルの正体バレのイベントとパンダとの戦い（トーナメント前の奴）まで書こうと思います。

また時間がかかるかもしれません。

すみません。

では、次回の更新でお会いしまして…。

鳥籠の鳥は出れぬといひるを知る（漫書也）

遅くなつて申し訳ござりません。

学校のテストなどで遅れてしましました。

その上、ハカラと一夏との騒動まだたゞつ着けませんでした。

本当に、申し訳ござりません。

では、謝罪はいたりござりして本編をどうぞ……

## 鳥籠の鳥は生めるとこゝにじを知る

どうして、僕が幸せをお願いしたら駄目だったの。

どうして、僕の大事な物はこんなにも簡単に壊れ

ちやつ。

どうして、僕たちは生きたいと願つことが駄目だ  
つたの。

誰か教えてよ。

どうして、母上が殺されなくちゃいけなかつたの。

少年の静かなる嘆きと共に瞳から溢れだす温かい雫が泥まみれになつた彼の赤い頬を伝い彼の両腕に抱きかかえられている者へとゆっくり落ちてゆく。なにふり構わず泣いた。泣いて、泣いて、泣いた。雨に濡れ炎で焼け瓦礫の山になつてしまつた自身の家の跡地の中心で。少年は吠えながら泣いた。既にこと切れ体を失い顔だけとなつた自身の母親を震えるその小さな両腕に埋め。少年は自らの無力さを嘆いた。七歳の脆弱な少年にできることがそれしかないからだ。

暗く厚い雲で閉ざされた天は彼をあざ笑うかの」とく重い雨を降らし、赤く染まつた大地には冷たく強い風が吹き抜ける。小さくて幼い彼には温かい陽の光さえも届かず、彼の嘆きが虚空へと消えていく。そして、その幼き少年に天の死神から与えられたのはただ一つ。

神の従者である偽善者たちがあらゆる物を焼き飛ばし、奪い取られ、血塗れ、そして抜け殻となつた母国のみだつた。

### 第十三話 鳥籠の鳥は生きるということを知る

#### Side 聖火

俺が目を開けた時、眼前には焼け野原ではなくコンクリートの天井と鈍い光が迎えた。背中にいつも自分が寝ているハンモックの柔らかな感触を感じるところを見るとどうやら眠っていたらしい。

「夢か……。」

俺の記憶が正しければ、あの後、織斑先生との鬼ごっこをなんか回避した俺は通常通りに授業に参加し、途中俺を再度捕まえようとした織斑先生の奇襲も何とか回避し、放課後、一夏たちとの訓練を経て今に至るはずだ。途中、ドイツからきたボー・デ・ヴィッヒが一夏にちよつかいをかけたらしいがその時、俺はトイレに行っていたのでよく知らない。そして織斑先生とのやり取りにかなり体力を消耗したら俺の体はここにたどり着いた後無意識の内に寝床に足を運んだらしい。俺は自分が寝ていたハンモックから飛び降りて、少し背中に嫌な汗がべた付いていたので寝起きで覚束無い足を動かしてシャワールームに向かつた。

俺は、徐に服を脱ぎ、顔を覆っている包帯とサングラスを外し、

それを置いておくために用意した籠に投げ入れシャワールームに入つた。さすがに、こういった場合の時は包帯を外す。いくら治つているとはいえずつと巻きつけないと汗や汚れで腐食して大いになつてしまつからだ。

(またか・・・・・。)

俺は蒸氣が立ち込めるその中血分の手を首の傷に当てながら思つ。かつての自分。そう、俺は時々こうした過去の夢を見る。その夢はほとんどと言つてもいいくらいに良いものとは言えない。譲れなかつたとき、後悔したとき、絶望したときと多種多様だ。

・・・・本当に何回経験してもなれないものだな。

「お袋、親父・・・・・・。」

静かな独白はルーム内に静かに響く。シャワーから出る熱水が俺の髪を静かに濡らし、そのまま傷だらけの俺の背中へと流れしていく。そして今はその音のみが狭い室内を満たす。まるで俺の独白をただ聞いてくれているかの如く。

「とりあえず、腹減つたことだしなんか作るか・・・・。」

シャワールームから出た俺は、蒸氣を身に纏いタオルを首にかけながら、自身の空腹を満たすために何か作るつと思いキッチンへと向かう。

「何が残つてたかな?」

俺は冷蔵庫を開け、中身を確認する。ヒンヤリと冷たい冷氣が俺

の火照った顔にあたりとても気持ちいい。昨日、凰がここに来て一夏のことについて話しながら（俺が一方的に愚痴をきいた）一緒に食事を取つたためほとんど材料が残つておらず、冷蔵庫の中には、ハムが数キレとチーズに卵、それに昨日軽く作ったサラダとトマトのみだつた。ご飯は炊いてある。これだけあれば三人分くらいは作れるだろうし、これで十分だ。

現在時刻は8時ジャスト。俺は急いで、材料を冷蔵庫から取り出して遅い夕食の支度を黙々とし始めた。とりあえず、まずハムを軽く焼いて、後はチーズとサラダを添え合わせにしようと思い、IHをつけフライパンに残つていたハムを乗せる。

シャルル・デュノア。いや、シャルロット・ドローヌ。俺は焦げないように焼けるハム見つめながら考える。よくジャンヌさんから聞いていた彼女の自慢の娘だ。女なのにどうして性別を偽つてきたかは大体察しはついている。

### 織斑 一夏

世界で初めての男性EIS操縦者である存在との接触、その後あいつの専用機である白式のデータの奪取。尚且つ俺の存在は俺が転校した数週間後に学園側から発表されたため俺のデータも視野に入れているはずだろ。それに彼女が転校してきて日はかなり浅いがずっと彼女からの視線を感じる。敵意はないが一夏と違つて怪しさ満点の俺に迂闊に接触するのは危険と判断して機を伺つていたのだろう。正体がばれる前になさなければならないはずだから、おそらく、接触してくるならそろそろだ。この場所はまだ教員と一夏や鈴たちにしか知られていないはずだから、女子と来ることはまずない

だらうから多分同じ男子である一夏と一緒にここに来るはずだ。

俺は思わずハムが焼け始めていることに気づかず考へ巡らせ続けてしまつ。

にしても、じかに初めて見たが髪の色といい顔といい本当にジャヌさんそっくりだつたな・・・。

そう、いくら話には聞いていたとはいえ本人にそっくり、いや、まさに彼女はジャンヌさんを小さくしたような人物だつた。親子と雖もここまで似てしまうのかと言ひくらう。

一人、心の中で彼女のことについて考索している中バチバチと肉の焼ける音と共にいい香りが室内に漂つっていく。

「いけない、いけない。すっかり忘れてた、よつと。」

俺はフライパンからハムを焦がさないように急いで取り出しあらかじめテーブルの上に用意していた皿に乗せた。そして、残つていたサラダを乗せた皿を冷蔵庫から取り出し、トマトが残つていたのでもう軽く水で洗い小さく切つてその上に乗せた。その後、ハムを焼いたときに使つたフライパンをそのまま使い目玉焼きを二つ作つた。

正直、常人ならこれで三人前ぐらいだが俺はこれくらい食べないと動けないのだ。

俺が食べる量は、普通の人が食べる量より遥かに多い。靈獸神機を操る者は動かすためには想像を絶する精神力と体力を使うため自然に食べる量も増加していく。今は乗つていないのでかなり食事量

は減少したがそれでもかなりな量になってしまったためだ。動かして  
いたときはこれの二倍くらいは取っていた。そして俺が窓の中のご  
飯をしゃもじで茶碗に入れようと思つたとき

## コンコン

突然入り口のドアを軽くノックする音が聞こえてきた。来たかな。  
・・・俺は静かにしゃもじを窓の近くに置き俺が予想した人物のい  
るドアに向かつた。

「び、びつも・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺がドアを開けそこに、いたのは一夏に手を握られて顔を赤くし  
体をもじもじさせているデュノアだつた。しかし、ただのデュノア  
ではない。男性にはないはずの部分が、そう胸が膨れていた。つま  
り、女の子なデュノアがいたのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

もう少しバレないでいられると考えておいたが、この状況に内心  
呆れながら右手を頭に当てる、変にくねくねするデュノアとそれを  
不思議そうに見る一夏を見つめる俺であつた。

## Side シャルル

どうも、シャルルです。放課後、僕は一夏とオルグ（オルグにそ  
う呼べと言われた）と共にアリーナに行つて I.S.での実戦訓練をし  
ました。とは言つても僕はオルグ君との訓練は初めての参加だつた  
ので途中まで彼らの訓練の様子をアリーナの端で見つめていました。

アリーナでは僕たちの他に篠ノ野さんとオルコットさん、それに凰さんそれに他にギャラリーが何人かいました。

彼らの行う訓練の内容はまず篠ノ野さんとオルコットさんのペアーと一夏と凰さんとのペアーが模擬戦をしてそれを見てオルグがアーバイスや問題点の指摘などを行つものであった。

四人がそれぞれのIJSを纏つてオルグをあいて上空に上がる。

「一夏、手加減は無しだぞ。」

「そつちこ。俺は何時でも全力でやるのみだ。」

「鈴さん、今日こそ決着を付けて差し上げます」とよ。

「はつ、あんまり舐めた口効かないことね、セシリ亞。」

それぞれ軽口を言い合しながら身を構え始めていく。そしてオルグの合図で模擬戦が開始された。まずオルコットさんの遠距離型のIJS、ブルー・ティアーズのビッグに援護射撃をもらいつつ篠ノ野さんの近距離型の打鉄がその機体の特性を生かして一夏たちを攻めていくが、対する一夏たちもレーザの雨を上手くスラスターを使って回避し、逆に凰さんの甲龍の衝撃砲の雨を降らして一人を牽制してその隙について一夏の白式の雪片で切り付けていく。両者とも一進一退の攻防が続き周りのギャラリーからとても大きな歓声が上がっている。そういうやり取りが數十分間続きタイミングを見計らつたオルグの一聲で終了する。模擬戦が終了した後、オルグがその戦いを見ていろいろな指摘や軽い戦闘での助言をそれぞれ一人ずつ

にした。彼の実力はこの前の模擬戦で見て知っている。だから、ほかの人より圧倒的に実力差があるのを生かしてそういう役を引き受けているんだと思った。

「デュノアさん、君の実力を見たいから一夏と模擬戦をやってくれないか？」

オルグが一通り一夏に言い終えた後、ふと僕にそうやつて声を掛けってきた。一方、篠ノ野さんたちの方に目をやると、さつきの模擬戦で互いの問題点などを言いあつていた。それにもやつぱりオルグの声は慣れないな・・・。彼の声は腕の機械を媒介にして言つていると彼から聞いてはいたけれども正直、怖いよ・・・。

「わかつたよ、オルグ。一夏の補給が終わつたら始めよう。」

僕はそう彼に言つて、一夏の補給が済むまで模擬戦の準備をした。そして、彼が補給を済まして僕の前にI.Sを展開させて来た。僕も、自身の専用機であるヒトの会社が作った「ラファール・リヴィアイブ・カスタム?」を纏つた。最初だしたときに周りのギャラリーから歓喜のような声が聞こえてきたので少し嬉しかつた。ここ数年、こういった場所にはいられなかつたから・・・・・。

「シャルル、大丈夫か？ すぐ、浮かない顔してるぞ。」

僕がそんなことを考えていると目の前に一夏が来て心配そうに思いつめている僕の顔を覗き込んでいた。一瞬、ドキッとしてしまつ

た。一夏は、一般的に言うイケメンなのでそれが僕の前に来ていってしかも顔の距離が近いので少しだけ、恥ずかしいような気持になってしまった。・・・はつ、そういうえば僕は今男子になつてたんだっけ・・・・。ばれたかな・・・・。

「よかつたぜ。なら、さつさと始めよつぜ。シャルル。」

一夏は特に気にする素振りもせずそつ僕に笑顔で言つて上空へと上がつっていく。

(／＼／＼／＼／＼一夏の唐変木・・・・・・。)

その後、一夏と僕の模擬戦があり僕のワンサイドゲームで幕を閉じた。単純に一夏の装備は雪片しかなく飛び道具があり経験も豊富な僕のほうが勝っていた。けれど、その後、ドイツの代表候補性のボーデヴィッヒさんが自身の専用機である「シュヴァルツェア・レーゲン」を纏つて一夏に喧嘩をふっかけるという事件が起きた。最悪、僕がボーデヴィッヒさんと一夏との間に入つて一触即発からは回避することができた。

けど、僕にとつての大問題はその後の自室に戻つた後に起きた。一夏が僕の入浴中にシャンプーの詰替を渡しに入ってきたのだ。当然、僕は俗に言う裸だったので一夏に正体がバレテしまつた。僕は、このことに物凄く動搖してしまつた。あの人から言い渡された任務の失敗と単純に男性に裸を見られてしまつたことに対する羞恥心からだつた。

その後、一夏にどうして性別を偽つて来たのか僕の過去も含めて

説明した。そして、一通り話終わったときに一夏に、

「それでいいのか？いいわけないだろ！！！いくら親だからって、子供を自分のいいように使っていいはずないだろ！！！」

そう彼は僕に言った。けれど、今の僕には何も出来ない、一夏にバレテしまいこのまま本国に呼び戻されて、一生独房の中での生活を強いられるだけだろうと思う。

しかし、一夏は大丈夫と言った。

「IS学園の特記事項に本学園にいる生徒は原則、本人の同意がない限りあらゆる外的介入を行ふことができないってやつがあるんだぜ。」

「えっ？」

「つまり、ここにいる三年間は少なくとも安全だってことだよ。」

そう僕に笑顔で言ってくれた。久しぶりに感じる人の温もり、僕の表情は自然と笑顔になつていった。

「ありがとね、一夏。」

「気に入んなつて。それより、お前の力になつてくれそうな奴がもう一人居るんだけど・・・。」

「それって、織斑先生？」

「いや、千冬姉にはまだ話さない。て言つたが、IS学園の教員に話

したらまずいだろ？」「

「そ、そだね。じゃあ、一体誰？」

「オルグだよ。あいつなら、力になってくれる。俺の勉強や相談ごとを教えてくれたり聞いてくれたりしてくれるし、あいつなら大丈夫だ。」「

そう一夏は僕に言つて、僕たちは他の生徒から隠れながらオルグの部屋へと向かった。正直、僕もオルグとは一度しつかり話が聞きたかったので一夏に案内してもらうことにしたのだ。

Side out

Side三人称

「そして今に至る。」

「一夏、誰に喋つているんだ？」

「すまねー、俺にも分からん……。」

「？」

俺の部屋に来た、一夏とシャルル女バージョンを向かい入れ丁度食事をとつていないと言つたのでとりあえず俺ように作つておいた料理を三人で分けて食べることになった。

「…………何も言わないんだね。」

「？何がだい？」

「シャルルのことだよ。普通なら驚くだろ？」

「そのことが。あらかじめ、調べはついていたからな。彼女の事は大体の事情は知つてゐる。」

「そ、そりなんだ。」

「そんなことを恥ながら少し怯えたような仕草をシャルルは見せる。

「心配するな、別に俺は君をとつて食つたりするような真似はしないから。」

「オルグ、シャルルのことね・・・・・・・・・・。」

「わかつてゐ、内密にてとへせり。」

「すまねー、助かるぜ。」

「それより、シャルルさん。俺に何か聞きたいことがあるんじゃないか？」

「・・・・・・・、やつぱりバレテいたかな。」

「授業中やいろいろな時間に君からの視線を時々感じていたしな、嫌でも何か聞きたいのは明らかだる。」

「アハハ、そうだね・・・・。」

そう言いながらオルグの作った料理を口へと運んでいく。食べる時に時折、一夏と一緒に美味しいとオルグに呟いていた。

「单刀直入に聞くけどオルグは、黄金の風について何か知ってるんだよね？」

「…………。」

オルグはその言葉を聞いて食事を一旦中断してただ黙つてシャルルの眼差しを見つめる。今のオルグは包帯を口の部分だけ器用に解いて食べている。

「黄金の風ってなんだ、シャルル？」

「えっとね。一年前、僕のお父さんの会社の試作型第三世代のIISの起動実験の時テロリストがそのIISを強奪するために襲撃してきたって事件だよ。」

「たしか、その事件はその試作型のIISを使っていた奴が撃退したけどそいつも死亡したってやつだよな。」

「コップに入れてあるお茶を飲みながら一夏の間にシャルルは答えていく中、一夏もかつてテレビで観たことがあつたらしくその記憶を辿つていいく。

「そもそも、なんでその事件が黄金の風と呼ばれてると思つ？」

「うへん。」

一 夏はシャルルの問いに腕を組みながら必死に考えていく。

「実はね、あの事件には裏があるんだよ。」

「裏？」

一 夏はシャルルの言った問いに首をかしげながら彼女に問う。

「うん、表向きは当時そこにいたテストパイロット、僕のお母さん  
が命懸けで倒したってことになってるけど実際は違うんだ。」

「それじゃあ、さっき上でシャルルの話した母親が死んだって事件  
はその黄金の風つてやつなのか。それに事実じやないってどういう  
ことだ？」

「……からほ、少し変だと思うかもしれないけど信じてね。」

「あ～、分かつた。」

シャルルがそう一夏に言い、彼も頷き了承した。そして、お茶を一  
口、一口クリと飲み、一息ついて言った。

「あの場に僕もいたんだけどリストを倒したのは、僕のお母さ  
んじやないんだ。」

「実際に倒したのは……。」

「銀の甲冑を身に付けた黄金の光を放つ機械の龍だったんだ。」

その後、彼女は一夏に当時そこで行われていた一方的な戦闘を語った。世界最強の兵器であるI.S.がたつた10分で完膚なきまでにたきつぶされたこと。そして、それを起こしたのがI.S.ではなく鎧を付けた巨大な龍の顔をした機械の巨人だったこと。そしてそいつが持っていた武装がオルグの打鉄飛龍式が持つている雷蓮4式と同系統のものだつたこと。その龍が飛び去つたときに発生した光が黄金のようだつたので黄金の風と呼ばれるようになつたこと。無論一夏も、最初こそは驚いたがシャルルの真剣な眼差しを見て自然と彼女の話しが嘘ではないと悟りその話を飲み込んでいた。

「そうこうになるとなるね。」

「…………つまり、その西洋風の甲冑を付けた機械の龍が突然現れてシャルルの母親を助けたつてことか。」

そう彼女は一通り話終えると黙つて俯いたまま目の前に座つているオルグに向かつて言った。

「あの機械の龍とオルグの使つているI.S.がそつくりなんだ。」

そのこと聞いて一夏が一瞬だけ惚けたような表情になるがそんな一夏を無視しながらシャルルはオルグの前に行つて問いただしていく。

「あの龍のこと知ってるんだよね。知らないとは言わせない。あれは明らかにあの龍を意識して作られていた。それに武装も黄金の風が使っていたものと同系統の物だった。だったら教えてよ。ジャンヌ・ドローヌは、僕のお母さんは生きているんですか？！…答えてよ、オルグッ！…！」

シャルルはもの凄い剣幕でオルグに問いただす。そして、彼女の体は既に彼女の席から離れいつの間にかオルグを席から立たして胸ぐらを掴み床に押し倒していた。

「ちょ、シャルル！…落ち着けよ！…」

彼女の尋常ならざる行動にやつと正気に戻った一夏が止めようとしがオルグが待つてと彼を手で静止させた。すると、彼は涙目になりながら自分に掴みかかっているシャルルの頭に手を伸ばして、突然撫でだしたのだ。

「え？？」

彼のとつた行動に一旦思考停止してしまった彼女だが、その間に彼女の沸騰していた熱も冷め自分が何をしているのかを理解した。

「え、え、っと、「ゴメンッ！…」

自分が彼を押し倒していることに気づいた彼女はすぐに彼を開放して直ぐに彼の上から飛び退いた。オルグも、押さえつけられた体を起こして立ち上がる。

「ジャンヌさんと違つて、元気のある子だ。」

そう彼が言うと彼女は驚いた表情をした。

「一夏、悪いが彼女と一人で話させてくれないか？」

「……分かった、シャルルのことを頼むぜ。」

「任せた。」

彼の言葉を聞き一夏は部屋の外で待つておくことにした。

そして、オルグの部屋には既に食事を終えているシャルルとオルグしかいない。

「さて、君がまず知りたいのはジャンヌさんの安否のことだな。」

「うん、お母さんは生きているんですか？」

シャルルは若干不安そうに彼に聞いた。今の彼女は一夏意外にもう頼みの綱がないためこの回答に賭けるしかないのだ。そして、そんな様子を見て気づいたオルグは彼女の肩に手を優しく置いた。肩を置いたときに彼女は一瞬体を強ばらせてしまったがオルグの真剣な雰囲気を悟り残り少ない精神力を全開にして彼の瞳を見た。

「…………生きてるよ、君のことをいつも心配そうにしていた。」

彼は機械で声も分からぬだろうと思ったがそれでも優しく彼女に告げた。彼から告げられた言葉を聞いたとき一瞬目を見開いたが直ぐに頭から暖かい雫が自然にシャルルの目から溢れ出す。

「…………頑張つたな。今は、思いつきり泣け。」

彼はただそう彼女に言った。その言葉を皮切りに彼女は彼の胸に飛び込み思いつきり泣いた。今まで辛かつたことを全て吹き飛ばすように。彼女は泣いた。最愛の肉親が生きていてくれたことに。彼女は泣いた。ただひたすらに、今まで押しとどめていた感情のストップバーが外れ全て溢れ出していく。そして、オルグは彼女が泣き終わるまでずっと頭を撫で続けた。もう、苦しまなくていい。そう彼女に言いながら・・・・・・。

「「」「」めんね。服、汚れちゃったかな・・・・。」

「構わないさつ、それで少しばらみが出たか？」

「うふ。ありがとうね、オルグ。」

そう言つと彼女は彼の胸から離れ笑顔で彼にお礼を言つた。その顔はさつきの虚ろな表情とは全く違いとても生き生きとしていた。

「あの時のことを話すけど、落ち着いて聞いてくれな。」

「分かったよ。」

そして、オルグはシャルルに黄金の風の詳細を話し始めた。あの時に現れた、機械の龍は通称DTと呼ばれている兵器であること。このことを話したら彼女は驚いたがオルグがこのことは黙つていて欲しいと言つたので何とか飲み込んだ。また、それには自分が乗つ

ていたこと。そして、ジャンヌが今は自分たちのもとに無事にいること。彼女は、最後にジャンヌさんが本当に無事なのかと確認した。証拠としてオルグは自分が持っていた去年ジャンヌさんと一緒に撮った写真を見せた。

「今度の週末にジャンヌさんと会う約束しているけど、一緒にくるか？」

「うん……お母さんと早く会いたいよ……。」

「……………そうか。」

手を合わせて俯いているシャルルはそう言った。そしてその様子を見てもう大丈夫だわうと思つたオルグは一夏を呼びに部屋の外に行こうとした。

「ねえ、最後に聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

不意にシャルルはオルグに質問した。彼は彼女の方振り向かずにただ立ち止まって彼女の話を聞いた。

「オルグにとって、両親の存在つていいどういったものだったの？」

彼女は彼にそう聞いた。しばらく、沈黙が続いたがしばらくしてオルグが話し始めた。

「…………俺に愛することと護ること、生きることを教えてくれた。」

「優しくて、時に厳しく、そして強くて、俺にとつての目標だった。」

「そりなんだ。……もう一つだけ聞いていい。」

「何だ？」

「オルグのお母さんって今はまだしているの？」

彼女は興味本意で聞いた。自分の母親はオルグに助けられて生き残つたけど、オルグの母親はどうしているのだろうと思ったからである。けれど、彼女はまだ知らなかつた、この問い合わせてはならないものだったことを。そして、彼女はこのとき知つた。生き残ることを……。

「……殺された、俺が七才の時に。」

「うつ……」

シャルルは彼の言葉を聞いた瞬間驚いて口に手をやつた。

「俺は何もできなかつた。ただ、お袋が殺されるのを見ていのしかなかつた。」

彼の口から語られる彼の過去、それは今の彼女にとつてはとても重すぎたかもしない。

「俺のお袋は最後にこう言つた。生きて、生き続けて。そして、必ず、幸せになれと。」

彼女は彼の言葉を最初は信じられなかつた。目の前にいる人物がそんな重い過去を持つてゐるなんて。

「シャルル。生きることは、凄く辛いことだ。」

「だからこそ、生き続けなければいけない。生きて幸せを掴み味わうまでは死んではだめだ。」

「生き続ける。生きて、幸せになつてみせる。世界で一番の幸せを掴んでみせる。」

「君を縛る檻などもうないんだ。これからは、自分の好きなように生きて行けばいい。」

彼は彼女にそう言い一夏を呼びに廊下へと出ていった。

バタンと静かにドアを閉める音が部屋の中に響いた。そんな中、シャルルは立ち尽くしてしまつた。拳を強く握り締めて・・・・・。オルグが彼女に生きると言つたとき彼女の頭の中にある光景が突然浮かび上がつたのだ。とても厚い雲に覆われた空に焼け野原となつた建物の中心で何かを腕に抱いて叫び、泣き叫び続ける幼い少年の姿を・・・・・。

（僕、なんてこと聞いちゃつたんだろう・・・・・。）

今更ながら後悔の念が込み上げてくる彼女であつた。自分の母親は生きている、それだけで幸せなのに彼には母親がいないのだ。それも、彼の目の前で奪われてしまつたといつらしい。

（でも、そんな僕に彼は生きろと言つてくれた。）

彼女は自分の素性のことを知つても、何ら拒絕せず受け入れてくれた一夏ことが嬉しかつた。そして、自分の母親を守つてくれたオルグからは生きろと後押ししてくれた。こんな自分のことを受け入れてくれ、さらに生きろと言つてくれた。どんなに辛かるうと、だつたらその人生を見返すぐらいになつてみせると。どうしてかは分からぬが彼女は知らないうちに彼に父親的存在を重ねていた。強く、時に厳しく、そして優しい。

けれど、それと同時に彼女の心にはもう一つ、別の感情が芽生えていた。

(一夏···)

彼女は思った。どうして一夏のことを考へると、胸が締め付けられるような感覚がする。それに、なんだか顔が熱く感じる。オルグの時には感じられなかつたこの感じは一体何だらう。

彼女は自分の中に一夏に対する好意が湧いてきたのに気づいた。一緒にいた時間は少ないが彼から感じられた優しくて強い心、そして自分の事を最初に受け入れてくれた・・・。彼女は一夏に惚れてしまつたのだ。そして少女の呟きは、誰もいな薄明かりの室内へと消えて行つた。



如何でしたでしょうか？

いつも見ていてくれている方、本当にありがとうございます。

また、遅くなるかもしれませんが必要完成させますのでそれまでしばらくお待ちください。

では、次回の更新でまたお会いしましょう！――

## 黒鬼の思ひと狂氣の申し手の襲来（前書き）

大変遅くなつて申し訳ございません。

期末テストなどで遅れてしまいました。

本当にすみませんでした。

しかも、今回が今までの中でもさらに最悪です。

キャラ（ナタリヤ・カーラ）のメンタル面が少し弱くなつていいかも  
されません。

『免なさい。

では、謝罪はいのくらつて本編をさういへ……。

## 黒兎の思いと狂氣の申し子の襲来

### 第十四話 黒兎の思いと狂氣の申し子の襲来

Side ラウラ

暗い・・・・・。

生まれた時からずっとこうだった。戦うためだけに生まれ育てられてきた。軍の中で私は優秀だった、他の誰よりも優秀だった。しかし、その優秀はE.Sという存在の登場によつてまたたく間に壊されていった。直ぐに私の肉眼にE.S適合率の向上のためにナノマシンが移植された。

しかし、私の体は適応しきれず私には出来損ないの烙印が押された。そんな時に彼女は絶望の中にいた私の前に現れた。

彼女は有能な教官だった、私は彼女に教えられて再び部隊の中での最強の称号を手にすることができたのだ。けれど、私の尊敬するの方の、「ブリュンヒルデ」というE.S操縦者にとつての最高の称号はあの男に汚されたのだ。それなのに、あの男の話するとあるの方は凄く優しい顔をされていたのだ。

・・・・・違う。私の知っているの方は強く凛々しく、何よりも堂々としていた。許せなかつた、私の尊敬するの方を汚してしまつた存在、の方にあんな顔をさせる存在を。

私はあいつの存在を決して認めない、この手で必ず叩き潰す。

「…………！」は。

私が目を開けると鈍い光が私に向かって差し込み、背中にとっても柔らかい感触を感じた。そして、私の体には毛布のようなものがかけられており、この状況から判断するとどうやら寝かされていたようだ。私は、体を起こし周りを確認するために当たりを見回した。私の寝かされている場所はまるでどこかのレストランのようにテーブルが感覚を空けて並べられており、キッキンらしきものがある奥の方にあり寝床と言うには少し不似合いな場所だった。

「おかしい…………。」

私の記憶が正しければアリーナで織斑一夏と戦っていたはずだ。なのに、どうして……？そして、私は不意に自分の左目の眼帯に手を伸ばしたのだが、

「ないつ……！」

そう、私の目から眼帯が消えあの惡々しいナノマシーンが宿つた金色の瞳が露出していたのだ。

「気がついたようだな。」

その声を聞くと自然と私の背中に冷たいものが流れ出でているのを

感じた。

「さ、貴様は……」

私は声のする方に顔を向け、同時に臨戦態勢に入った。そう、そこには案の定、織斑一夏とは違う、いやこの学園に入るもの全てと明らかに空気が違う人物が腕を組んで私を見つめていたのだ。

「オルグ・D・ヘルグ……。」

Side end

何故、ラウラがオルグの部屋にいるのか?とりあえず時間をさかのぼつてみるとしよう。学校の授業が終わり、放課後にいつも通り訓練をするためにアリーナに向かっていた一夏とシャルルだが先にアリーナに向っていた篝が大急ぎで彼らのもとに戻ってきたのだった。

篝より先に来ていた鈴とセシリアが突然、ボーデヴィッヒに奇襲を受けて一方的にやられているらしいのだ。

そのことを聞いて大急ぎで駆けつけた彼らだが、既に鈴とセシリアのISはボロボロで地についていた。そして、その様子をボーデヴィッヒが自身のIS「シュヴァルツェ・レーゲン」を纏い、上空から不気味な笑を浮かべながら見つめていたのだ。その様子から判断して、二人のシールドエネルギーはもう底を付きかけ最早戦える状態ではないのが見てとれた。

そして、次の瞬間、一夏の中で何かが切れて、ボーデヴィッヒに向かつて自身の白式を展開して切りつけていったのだ。しかし、彼とボーデヴィッヒとでは、いくらオルグの訓練を受けているとはいえ

実力の差は歴然だつた。しかし、途中、シャルルも自信のエスラフアールを纏つて一夏の加勢に加わり二人の連携で徐々にボーデヴィッヒを追い込こんでいった。その隙に、箒が傷ついて動けなくなつていた鈴とセシリ亞を担いでアリーナの端に急いで避難させた。

しかし、途中シャルルの隙をついたラウラが一気に攻勢に転じて自分の装備であるプラズマ手刀で切りつけ一時戦闘不能にしたのだ。これにより、シャルルはしばらく動けなくなり実質一夏との一騎打ちになつた。

一夏も途中までは良かつたもののやはり実力の差がありボーデヴィッヒのワイヤーブレードの巧みな動きに翻弄され追い詰められていつた。

形成が一気に逆転し、ついに一夏の持つている雪片がボーデヴィッヒのワイヤーブレードによつて弾かれてしまつたのだ。

殺れる、この時のボーデヴィッヒの脳裏にはそう過ぎつた。自分の念願がようやく叶うと思い、先程よりも残虐な笑を浮かべながら、無防備な一夏に向かつて肩に装備されているレールガンのエネルギーを全開にして放とうとした。しかし、この時、彼女は致命的なミスをしてしまつたのだ。そう、彼女は知らなかつたのだ。一夏たちは、普段誰に鍛えてもらつてゐるのかを……。

ボーデヴィッヒが一夏に向かつて攻撃しようとした刹那、彼女に向かつて黒い巨大な球体が突然何処からともなく放たれ、そしてそれは真つ直ぐ彼女に命中して彼女を覆い尽くしてしまつたのだ。

とつさのことがだったので全員反応することができずさつきまでは一夏のことを心配そうに見ていた箒とシャルルだが今はその光景を

ただ見入っていた。

そして、しばらく経つて黒い球体の中から当然ボーデヴィッヒの断末魔のような声がアリーナに響きわたったのだ。そして、この尋常ならざる自体に流石に一夏たちもボーデヴィッヒのことが心配になりその球体に駆け寄つていった。

その刹那、黒い球体がシャボン玉のように破裂し、そしてその中からISを纏つたボーデヴィッヒではなく、ISを強制解除された彼女を背負うオルグがいたのだ。黒い球体はディストラクションの陽炎を応用した飛龍式の単一使用 黒夢を発動させたもので相手に擬似空間の球体を投げつけ、その中に相手を捉え悪夢を見せ戦闘不能にする能力である。

その後、この事態を他の生徒から来た織斑先生が急いで駆けつけて一夏を連れていったのだった。そして、ボーデヴィッヒはオルグが織斑先生に頼んで彼女を拉致し、自分の部屋に連行していくたのだ。

### Side オルグ

目覚めた彼女に向かって声をかけると、彼女は直ぐに怯えながらだが臨戦態勢に入った。

やはり、まだ俺を警戒しているようだな。

「具合はどうだ？」

「…………」

俺が彼女に声をかけても一切しゃべらずその変わりに敵意だけが強まっていくばかりだった。流石にこのままでは不味いな……。

「取り敢えず、何か食事でも取ろう。俺が作るからお前はまだ寝てろ。」

そう俺は言い彼女に背を向けてキッキンに向かっていった。

「…………何故だ？」

すると、今まで黙っていたボーデヴィッシュが俺に向けて問い合わせきたので俺は一旦止まって彼女の振り向かず彼女の言葉を聞いた。

「何故、私を殺さなかつた！！私はお前の仲間に手を出したのぞ

！！

「貴様は、私と初めて会つたときにはばつたはずだ。」

「あの時のお前なら私を殺せたはずだ！」

「あの時のお前なら私を殺せたはずだ！」

「なのに、何故…………。」

彼女は最初、俺に向かつて睨みつけながら怒鳴っていたのだが、最後の方に至つては力なくただ泣きながら下に俯いてしまったのだ。今の彼女は分からぬのだらう。俺が何故こんな行動に出ているのか。

俺は、以前彼女が一夏にちよつかいを出したときに彼女の過去の

経験を調べたことがあった。作られた人間。彼女には、親がおらずただ戦うためだけに軍によつて育てられてきたのだ。そして、I Sの登場後、彼女は出来損ないの烙印を押されたが織斑 千冬がとある事情により少しの間彼女のいた舞台の教官になつたときがあつた。

そして、彼女の元で教わつたボー・デ・ヴィッヒは目まぐるしく成長した。そして、一夏の事を知り彼が誘拐された事件のせいで織斑先生の「ブリュンヒルデ」の称号は汚されてしまった思い込み、彼に復讐しようとしていた。そう考えれば今までの一夏に対する行動も納得がいく。

（けれど・・・。）

彼女が間違つているとは言えない、確かに普通の人から見ればただの逆恨みにしか見えないかもしれない。けれど、彼女は今まで必死になつて織斑 千冬という存在を追いかけ続けてきた。そして、同時に彼女に対してずっと尊敬の念を抱いていたはず。戦いしか知らない彼女にとって織斑先生の強さは尊敬する対象以上のものだつただろう。大切な人が汚されれば誰だつて怒るだろう。

しかし、彼女の場合戦いしか知らないためそういう感情の表現の仕方を知らないから不器用になつてしまつ。

けれど、このままではいつか彼女は取り返しのつかないことをしてしまつ。調べた結果彼女はまだ一度も人を殺したことはなかつた。だからこそ・・・。

俺はそんな彼女の様子を振り向いて見て直ぐに彼女の傍に向かつた。そして、彼女の肩に優しく手を乗せた。その時、一瞬だけ絶対しよとしたのだがどうやら力が入らないらしく直ぐに諦めた。

「辛かつたんだよな。怖かつたんだよな。」

俺は彼女に向かつて言った。すると、彼女は近寄つてきた俺の胸に突然飛び込み殴りつけてきたのだ。俺の胸を力なく泣きながらたた殴り続けた。

「悔しかつたんだよな。許せなかつたんだよな。」

「復讐したかつたんだよな、自分の尊敬する人の大切なものを奪つたやつに・・・」

彼女はついに力尽き俺の胸の中で静かに泣き続けていた。そして俺の問いに彼女は胸に顔を埋め泣きながら頷いた。

そんな彼女がとても弱く、そしてあまりにも脆く見えた。だから俺は、彼女を優しく包み込んだ。かつての自分がされたように彼女に言った。

「もう、悪夢は終わつたんだ。お前が苦しまなくていい。」

「お前はもう一人じゃない。俺はもう決してお前を攻めたりはしない。」

「誰がなんて言おうと、俺はお前を信じ続ける。何時もお前の見方だ。だから・・・」

「今は少し、休もうな・・・・・・・・。」

そう彼女に告げた。今、俺が彼女に与えることのできる精一杯の

安らぎをずっと彼女に与え続けた。彼女が泣く中、照明は優しく俺たちを照らし、そして彼女の泣く声だけが静寂に包まれた室内を満していくを感じながら俺は彼女が泣き止むまで只、優しく抱き続けた・・・・・。

彼女が泣き止むのに少し時間がかかったが泣き止んだ彼女はびつやら疲れたらしくまた眠ってしまった。そんな彼女の様子を見て、俺は自分の寝床である場所に寝かしました毛布をかけてやつた。

「何時も、傷つくのは無力な子供だ・・・・・。」

「の子のよう」、HSの登場にもがき苦しんでいる子供がこの間に世界のどこかで生まれ続けている・・・・・。

HSの登場によって、救われた人間もいればこうやって苦しむ人間も同時に生まれていく。何度見てもやるせない気分になってしまふ。そして、それと同時にどんなに強くても護れないものがある。自分は、本当に無力なものだと改めて痛感した。

「今の俺に出来ることは彼女を支えてやることだな・・・・・。」

俺は、泣きつかれ赤子のようにスッキリとした顔で寝ているボーデヴィッシュの銀色の髪を撫でた。ジャンヌさんとまた違つてまたこれもとてもいい触り心地をしていた。

「・・・・・あなたの教え子、今までかなり苦労したみたいですね。織斑先生。」

俺は先程から入口の物陰から感じる気配に向かつて語りかけた。

じぱりくあると入口の影から案の定織斑先生がでてきたのだ。

「…………いつから氣づいていた？」

「先生がこの部屋に入ってきたから直ぐに。」

「そうか…………。」

織斑先生はそう俺に返しながらボーグヴィッチの寝ているハンモックのすぐ傍に歩み寄った。

「…………似てるんです。彼女は、昔の俺と。」

「どうして？」

俺の言葉に彼女はボーグヴィッチの髪を優しく触りながら問いかけてきた。

「大切な物を取り戻したくて必死になつて不器用だから傷ついていく。…………昔の俺もそうでした。」

「…………そうか。」

俺の言葉聞き、彼女はそう言い絶えずボーグヴィッチの髪を優しく触り続けた。そして、彼女のその表情は普段の彼女が見せないとても慈愛に満ちた物だった。彼女は強く、そして何より生徒思いなのだ。だからこそ、これも、彼女なりの優しさの表現の仕方なのだろ。

「ボーグヴィッチ、お前の気持ちに氣づいてやれなくてスマなかつ

た。」

「けれど、お前は私のようにならなくていいんだ。」

「お前は、ラウラ・ボーデヴィッヒとして生きていくばい。」

彼女はボーデヴィッヒを見つめそう言いながら、少しの間ボーデヴィッヒの傍に居続けた。俺は、何も言わずに織斑先生の震える肩にさつきのボーデヴィッヒの時にしたように優しく手を乗せた。

そして、その時にボーデヴィッヒの閉じた目蓋からは一筋に雲がその笑顔で満ちた赤い頬に流れ落ちていたのであった・・・・・。

Side end

その後、織斑先生は書類の整理があるらしくしばらくするとオルグの部屋から出ていった。そして、オルグはボーデヴィッヒが起きるまでずっと彼女の傍に寄り添っていた。そう、父親が自分の子供にするように彼は彼女の傍にその夜は眠らずに寄り添い続けた。自分のように悪夢を見ないで済むように・・・・・。

翌日、ラウラが起きたら自分の寝ている傍に、オルグが立つたまま腕を組み、顔を俯かせて寝ているのに気づいた。そんな時、彼女の心の中では変化が起きていた。戦いしか知らない彼女にとってそれが全てだったが、オルグの言葉によつてそれが揺らいでいたのだ。

今の彼女は以前、自分が軍にいた頃に部下から聞いた「父親」という存在にオルグが見えていたのだ。自分の優しく包み込んでくれ

た、彼の背中を彼女から見るととても大きいように見えていた。

「苦しまなくていいんだ。」、そう言われたことを思い出すだけで何故か胸が暖かくなるのを彼女は感じた。さらに、今まで怒りの感情で埋め尽くされていた自分が嘘のように消えていたのだ。そんなことを考えるうちに自然と体が動き、気がついたら彼の背中に自分の顔を埋めていた。初めて、感じた温もりをもつと感じたいと思つたからだろう。

そして、そんな彼女の行動に気づき眠りから覚めたオルグは、しばらくただその場を動かさずにしているのだった。かつての自分が変わったように、彼女も変わらつとしているという事実をその背中で感じながら・・・・・。

時が少し経ち、学園では学年別のIHSでのタッグトーナメントが行われていた。一夏はシャルルと組み参加することになっている。オルグとラウラとの一件があつたころ一夏たちもペアーを決めるのにいろいろな意味で大変だつたそうだ。そんな中、オルグはラウラと組むことになつていた。

何故、オルグがラウラに組むことになつたかといつと彼女本人から頼まれたのだ。しかも、「もし、織村一夏に勝つことができたら私のお父様になつてもらう……」といつなんとも理不尽な条件付き

で。しかも、仁王立ちしてドヤ顔で「^\_^、<、>、<^>」とされながら言わされたのだ。

注（一瞬、その姿に何この小動物、可愛いとオルグは思つてしまつた。）

正直、オルグも気が引けたのだが彼女が変わらうとしているのだと思い、条件のことはどうあえず考えないで引き受けたことにしたのだ。

そして、彼らは運がいいのか悪いのかトーナメントの一回戦で当たることになったのだ。

#### SIDE 3人称

試合開始のブザーが鳴つてから、どれくらいの時間が過ぎたのだろう。俺たちは互いに、IISを纏つて上空で静止したまま動かないでいた。いや、正確には動けないと言つたほうが正しいのかもな。今回は各国からの代表などがこのイベントを見るために招待されていた。無論、裏ではオルグが言つていたようにオルグと俺のIISの戦闘を記録することが目的だろうな。しかし、今このアリーナを支配しているのは観客からくる歓喜ではなく、恐ろしいぐらいの静寂だ。

「・・・・・一夏、動けないよ。」

「わかつてゐる、けど今動いたら確実にどつちかがやられる。」

そう、何故彼らが動けないのかとつと田の前にいる人物に対して下手な攻撃を仕掛けた場合確実にやられるからだ。

一夏たちは以前、篠、セシリ亞、鈴、シャルルの五人対オルグと模擬戦をして一回も被弾させることなく負けたという苦い経験があるのだ。

「ラウラ、一夏の事はお前に任せる。思いつきりやれ。」

「……約束は、忘れてないですよね？」

「まずは、お前が勝つてからだろ？ ほら、行つてこい。」

そうオルグが彼女に言い、背中をぽんと押した。そして、その返事を聞いた彼女は前とは違つてどこか普通の女の子がするように一ぱーと笑顔を浮かべ、一夏の前へと躍り出た。ここ数日、ずっとオルグと行動を共にしていたため少しだけ心が成長したからであろう。彼女が笑顔を見せるよつになつたのは。

「織斑 一夏。」

前とは違つて、彼に噛み付くよつな素振りは見せず、彼の瞳を真つ直ぐに見つめる。

「これまでの愚行を、まずは謝罪する。・・・スマなかつた。」

彼女の口から発せられた意外な言葉に、一夏は思わず目を見開いて驚きの表情を浮かべたのだ。一夏だけではない、オープンチャンネルだったのでシャルルにも聞こえていたため彼女も一夏と同様に驚いていた。

「しかし、今の私は、ラウラ・ボーデヴィッヒとしてお前と戦う。

私のためにお前との決着を着けるために。」

そう言い終わると、ラウラはシャバルツエア・レーゲンの装備である両腕のプラズマ手刀を展開して身構える。

「…………わかつたぜ。俺も、織斑一夏として今はお前と本氣でぶつからじてもらうぜ。」

一夏も、始めはラウラの突然の変化にかなり動搖していた。ここ最近、彼はラウラと話すこともなく今日に至っていたので当然のことだらう。

けれど、オルグの方を向いてみると彼はただ動かずに彼女と自分の様子を見ていることに気づき、彼が何か彼女に齎したのを見て取れたのだ。そして、ラウラの意思に応えるため、自分の姉や、篠たちの想いのために、彼は雪片を展開して身構えた。

「行くぞっ……」

「来いっ、ラウラ……！」

そして一人は、互いの想いを自身の得物にこめ、ブースターを開にして突っ込んでいった。

「えへと、オルグはどうするの？」

上空で一夏とラウラの戦いが繰り広げられており観客のボルテー

ジも一気に上がる中、そのやり取りを見ていて取り残されてしまったシャルルは、同じく取り残されたオルグに向かつて問いかけた。

「ラウラの邪魔をさせないためにお前の相手をする。」

オルグはそう告げると右手に薙刀を展開して彼女の正面に背中の翼をはためかせて行く。

「そ、そ、うだよ、な、・・・・。それじゃあ、僕も今出せる全力でオルグの相手をするよ、・・・・。」

すると、シャルルもアサルトカノンの「ガルム」を展開して、オルグに向かつて発砲しだしたのであった。

「喰らえ、・・・・！」

「グッ、・・・・！」

一方、一夏とラウラは互角の戦いを上空で繰り広げていた。激しい攻防が続いていたが、一夏の武装は未だに雪片一本のみだったのでは火力は段違いだった。ラウラのレールガンとワイヤーブレードによる巧みなコンビネーションに加え、ラウラのISにはISの動きを封じるための装備、AIC（慣性停止結界）があるため、一点集中の一夏の戦い方との相性は最悪だった。シールドエネルギーはどんどんと削られていき、徐々に追い詰められていく。

「どうしたつ、・・・・お前の実力は所詮その程度なのか、・・・・！」

「くそつ、・・・・！」

部が悪いと思つた一夏は、ラウラと距離を取らうとブースターの出力を調節しながら上手く距離を開けていく。しかし、ラウラもそれに負けじと、一夏の後に食らいついていく。

「どうあるつ、白式のシールドエネルギーはもう100しかないってのに……。」

一夏は、ラウラの激しい追撃を避けながらこの状況を開する策を必死に考える。

「一夏……加勢に来たよつ……。」

「シャルルかつ！ 助かるぜ……。」

すると、一夏の前方からシャルルのラファールがガルムをラウラに向かつて発砲しながら突っ込んでいった。

「つぐ……」んなもの……。」

ラウラは、ガルムから放たれる弾丸をA.I.Cで防護しながら一寸後ろへと後退していく。

「一夏、大丈夫？」

「なんとかな。でも、シールドエネルギーがそろそろやばいな。そう言えば、オルグはどうしたんだ？」

「え、とね、一応、あれは倒したつむにはいつているのかな？」

そういうと、彼女はアリーナの端の一角を指した。

「…………な、何があつたんだ？」

「あ、アハハハ。」

一夏は、その状況に内心呆れつつ、シャルルは苦笑いを浮かべていた。アリーナの壁に、オルグの上半身だけがツツコミ下半身だけが突き出て残念な状態になつていて。そう、簡単に言えば壁に突っ込んで動けない状態になつていてるのだ。

「え」とね、オルグが僕の方にブースター全開にして突っ込んできたんだけど……

シャルルが言つには、一夏が戦つているときにシャルルもオルグと戦つっていたのだが途中、飛龍式のブースターが突然暴走して制御不能になつて壁に突っ込んでしまつたらしく、それと同時にシステムが一時ダウンし暫くは動けないのだ。

余談であるがオルグが突つ込んだ時に、観客席にいたメガネをかけた水色の髪の女子が「…………ごめん…………なさい。」と呟いていたらしい。

「彼奴、災難だな。」

「でも、これつてチャンスだよ。一夏、篝たちと練習したアレを使つてみようよ。」

「…………試してみる価値はありそうだな。」

そう言いながら頷き合い、ラウラの方へと目をやる。彼女は、今、アリーナの壁に突き刺さったオルグを必死になつて引き抜こうとしている最中だつた。

「ラウラ、俺は自分で何とかする。お前は、戦いに戻れ。」

「し、しかしつ……」

「早くしろ、お前は、彼奴に勝ちたいんだろ。」

「…………」

「だつたら、早く行け。」

如何せん壁に突き刺さつたままラウラにそう言つたため普通ならかつこいいことを言つているのだが締まらないオルグであつたが今のラウラにはその言葉だけで十分であつた。彼女は、オルグに向かつて頷き再び一夏たちの前へと躍り出る。

「ああ、続きを行」つづつ……」

「一対一で悪いけど、勝たせて貰つよつ……」

「ふつ、たかが一人増えようと私のISの前では無力だ……」

再び、互いの交える三人。一夏とシャルルが揃つたことにより一人は籌たちとの特訓で生み出し当初計画していた対ラウラ用の戦法を使うことにしたのだ。

まず、一夏がラウラに向かつて雪片を構え突進していった。もち

ろん、その攻撃はラウラのAHに止めて止められてしまつたが

ババババババッ！！！

その隙にすかさず、シャルルがガルムをラウラに向かって発砲した。しかし、その時にラウラはAICを発動することができず被弾してしまったのだ。そして、被弾したラウラは、一夏たちをワイヤーブレードによって引き剥がし一旦距離をとる。

「やつぱりな。そのAHひとつで装備は挿撃や一対多に向いてないみたいだな。」

そう、この戦法はAICの弱点を突き、同時にシャルルのISと一夏のISの特性を生かしたコンビネーションアタックだ。

Side end

S  
i  
d  
e  
纂

「あの戦法はつ！！」

私は一夏たちの戦闘を見てそう叫ぶ、現在、私はまだ自分の試合まで時間があるので観客席から鈴とセシリ亞と共に一夏たちの試合を見てくる。

「一夏ちゃん、練習道理にちゃんと出来ていますわね。」

「AICは、一つの攻撃の無効にかなりの神経を使うからな。同時

攻撃には弱いのは当然だ。」

「当たり前よ、あたしが教えたんだから！…」

「鈴さん、私じゃなくて、私達ですよ！…」

「ふんつ！…あんな、難しい数式言つただけで一夏が分かると思つてんの！…」

「鈴さん！…、感覚で掴めなんて難しそりますわつ！…」

「…・・・お前ら、少しは静かにして見れないのか？」

私は、隣でぎやあぎやあと騒ぎ火花を散らせている一人に向かって呆れ半分に言つた。この一人は、この前のラウラとの戦いのせいでISにかなりのダメージを負い今回の行事に参加できいためずっと試合を見ているのだ。

（しかし、オルグの奴、一体どうしたのだと言つのだ。）

そう、確かに一夏たちのことも気になるのだが私は現在、アリーナの壁から必死になつて出ようとしているオルグの方へと目をやる。

私は、あの男の強さに純粹に惹かれている。圧倒的な力による戦闘、もし私のあれ程の力があれば、一夏の傍にいられるのだが、といつも考えている。

（力があるのに、何故あんなことを・・・。）

以前、一夏とテュノアたちのコンビネーションアタックの練習を

終えた私は、オルグのもとに行き訪ねたことがある。私は強くなつた。けれど、到底オルグに追いつけるものではなかつた。だからこそ、

「教えてくれつ……どうやれば、お前のよつに強くなれるのだ！」

私は、自分の心の叫びを奴に向かつて叫んだ。奴には、一夏絡みのこといろいろと相談していたので私の叫びに答えてくれると信じていた。私は、無人機の襲撃を受けたときに私の愚行のせいでこいつに傷を負わせてしまい自分の無力を痛感した。だからこそ、もうあんな思いをしたくないのだ。そして、奴は私の肩に手を乗せ私の目を正面から見て言つた。

「『篠、力を欲し焦る気持ちはわかる。だからこそ、今は耐える時だ。』」

「『自分の爪を研ぎ続け、来るべき時までその力は温存しておけ。』」

「『お前は、もう十分強いんだ。元に専用機持ち、代表候補性を量産機で互角に渡り合ことができる。それは、とてもすごいことだ。』」

「『けど、その力に、自惚れではダメだ。もし、そうでなければお前は掛け替えのないものを全て失うことになるぞ。一夏や友達、そして自分さえも。』」

「『今は、分からぬかもしれないし、この解答ではお前は満足しないかもしれない。』」

「へけれど、この言葉を心の何処かにと止めておいてくれ。」

「へそして、もしも、専用機（力）を得たとしても何時も忘れるな。」

「へそれが、いずれ君の助けになる。」

私の言つて欲しかつたことは少し違うが私の叫びを正面から受け止めてくれたから少しは気持ちが楽になつた、奴の言葉の意味は何時もその時にならないと分からぬことが多い。しかし、奴は今まで間違つたことは言つて來ていないので。元に奴の教えで私は量産機のISで専用機持ちたちと互角に渡り合えるようになつた。

しかし、その時のオルグの雰囲気が何時もの優しさではなく何処か懐さを感じさせていたような気がした。まるで、私の様子を何処か自分と照らし合わせていたかのように・・・・。

（オルグ、お前は一体どんな過去を経験したと言うのだ・・・・・。）

私は、そう一人考えながら未だにアリーナの壁から翼が引っかかり抜け出せず情けない格好をしているオルグを見た。

しかし、彼女は、いや、彼女だけじゃない。一夏たちは近いうちにいざれ知ることになる。地獄で生きてきたオルグの、聖火（咎人）の悲しき過去を・・・・・。

「一夏、僕もシールドエネルギーが少なくなってきたよ。」

「俺も、零落白夜があと一回打てるかどうかだ。」

俺は、シャルルとコンビネーションアタックをラウラに向かって仕掛けていたのだが直ぐにあいつは俺たちと距離をとつてワイヤーブレードや大型レールガンでの遠距離攻撃に切り替えてきた。流石に、軍にいただけはあるな。俺たちは、さつきからあいつの攻撃に突き放されて接近することができなくなっていた。

「どうする？俺の武装は、雪片しかないしな。」

「…………そうだ！！一夏、僕に考えがあるんだけどいい？」

俺たちは、ラウラの大型レールガンでの追撃を必死に避けながらこの状況の打開策を考えていたがシャルルの奴が何か閃いたらしくその顔がさつきまでとは違つて自信に満ちた顔だった。

俺たちは、しばらくの間逃げ続けたが途中シャルルが向きを反転しラウラのいる方へと近接ブレードの「ブレッド・スライサー」を構え突っ込んでいった。流石に意表をつかれたラウラはブースターを急停止させかろうじてAICを発動させた。

そのおかげで、シャルルの攻撃を止めることができ、シャルルはラウラの前で無防備になってしまつ。

「まずは、貴様を始末するつ！！」

そう言い、肩の大型レールガンを放とうとしたが、

「甘いよ、ボーテヴィッヒさんー！」

しかし、シャルルのその言葉と彼女の表情を見たときヒラウラは自身の背中に嫌な汗を感じた。そして、それと同時にヒラウラのショバルツェアの背中の装甲に強い衝撃が襲つた。

不意に後ろを見ると、そこにシャルルのISの装備である重機関銃「デザート・フォックス」を発砲させた一夏の姿があった。

「まさか、IS装備の使用許可を出していたのか！？」

ISの装備は敵に奪われたときに使用されないよう搭乗者以外は使用することができないが、搭乗者自身が使用許可を出せば他のISを纏ついても使用が可能なのだ。

先ほど、ラウラの追撃を避けているドサクサに紛れて自身の装備の使用許可を出したシャルルは「デザート・フォックス」を一夏に渡していたのだ。

「どこを見ているの。」

しかし、その瞬間AICから逃れたシャルルが一気にラウラの懷へと入り込む。

「ぐつーーー！」

「この距離なら外さない！！」

そして、シャルルはラファールの膝の装甲をページしてパイルバンカーの「シールドスピア」をラウラに食らわせる。

ラウラは悲痛な叫びを上げながら、その攻撃を腹の装甲に直撃し上空へと吹っ飛ばされる。今の、攻撃でラウラのシールドエネルギーは殆どが削られ、最早A I Cが展開できなくなつていた。それを見計らつた一夏が背中のブースターを全開にして刀を前に出し白式の零落白夜を発動させて突進していく。

۱۷۰

黄金の光が彼を包み込み、ラウラへと向かっていく。今までは、大切な姉が自分を守つてくれていた。だから、今度は姉のように誰かを自分の大切な物を守つてやりたいと思った。けれど、オルグという姉とは違う人間に出会い守ることの難しい現実を知つた。だからこそ、自分の思いを例え辛くても貫きたかった。もう、力が無くて自分の仲間が傷つくのが見たくなかつたからだ。彼の想いが強くなつていくと同時に白式は黄金の光に包まれていき、その姿にこの場に居るものが皆見惚れていた。

「これで終わりだ——」

そして、一夏（白騎士）の零落白夜（思二）は、見事にラウラ（黒兔）のHS（思二）に睡いた。

一九一九年五月

ラウラの断末魔が上がり彼女のシールドエネルギーはゼロになつた。そして、二人の衝突と同時に黄金の光が拡散し一人を包み込んでいく。

「・・・教えてくれ、お前は何故強いのだ。」

暗い空間の中を光り輝くその体で自分を照らす者に向かってラウラは言った。

「俺は、強くねえよ。まったく強くない。」

「けれど、もし俺が強いつていうのな、それは

それは

「強くなりたいから強いのぞ。」

――――

「それに、強くなつたら、やつてみたいことがあるんだよ。」

やりたいこと

「誰かを守つてみたい。自分の全てを使って、ただ誰かのために戦つてみたい」

「だから、お前も守つてやるよ。ラウラ・ボーデヴィッシュ

「守つてやるよ。」

どうしてだらう。オルグの時とは、また違った暖かさを感じる。それに、とても胸が熱い……。

「そうか、これが時めいたといつものか。」

織斑 一夏、惚れてしまいそうだ……。

そして、暗い空間は光に満たされていった……。

光が收まり、中からHSを強制解除させられたラウラを抱えた一夏がゆっくりとシャルルの方へと降りていく。

「勝つたぞ、シャルル。」

「ボーデヴィッヒさんは？」

「氣絶したみたいだ。けど、大丈夫そうだぜ。」

「よかつた……。」

シャルルは安心したのか思わずため息を吐きながら言つた。

「・・・・・一夏、シャルル。」

すると、一夏たちの後ろからHSを解除したオルグがこつちに歩み寄ってきた。

「勝つたぞ、オルグ。」

そう言い一夏は、ラウラを抱えたままオルグの方へと近づき、彼女をオルグに渡した。

「よく頑張つたな、ラウラ。」

そう言い彼は、ラウラの頬を撫でながらそう言つた。そして、それと同時にオルグは自身のISが使えなくなつたと審査員の織斑先生に伝えた。

勝者、織斑、デュノアペア！！

一回戦からの死闘を見た観客のボルテージは既にMAXに達していて、溢れんばかりの歓声が一夏達を包んでいく。一夏たちは、勝利を喜び、オルグはラウラの満足そうな表情に彼女は変わったのだと思い安心していた。

そして、特に何事もなく一回戦は終わり続けて二回戦が行われる。  
・・・・・





「もう簡単に、歩むところの言葉を口にしない方が宜しいです  
よ、織斑一夏君」

・・。」

その声が響く刹那、上空のシールドがけたましい音を上げ砕け散り、前回の無人機同様にアリーナの地面に衝突し爆炎が上がる。

「くそつ！—」

「一体、どうしたの！—！」

「ちつ—…」

一夏とシャルルはISを纏っていたので辛うじてその衝撃に耐えられたのだが、生身のオルグはラウラを背負つたまま爆風に飲み込まれていく。

「オルグっ！—！」

その様子を見た一夏がそう叫ぶがオルグは爆炎の中なのでよくわからない。

非常事態発生、トーナメントの全試合は中断、生徒、来賓の方々は教師の支持に従い直ぐにアリーナから退避してください。』

アナウンスがアリーナに響き混乱する観客席内は防護シールドによつて覆われていく。

「織斑 一夏君」

爆炎の中から不気味な声が一夏に向かつて囁きかける。

「貴方に教えて差し上げましょ。」

煙がだんだんと晴れしていく中、その声の不気味さに思わず身震いしてしまった一夏。そして、その声の主の全体図が段々と露になっていく。そして遂にその姿が露になつた瞬間、一夏や、シャルルはそこに居たものに対して言葉を失つてしまつた。

「守るところとの本当の辛苦を、絶望という極上のスペイスと共に。」

そこにいたのはエリJではないにか、全高はゆうに二〇メートルを超えており背中に巨大な背びれを付け、機械で出来た顔を持ちその形相は正にワニのようだった。

彼らは知らない、この兵器がどのよつに呼ばれているか。しかし、オルグは知つていた。この兵器の名を。そして、その登場者の名を。

そう、その兵器はかつてオルグが生前に破壊したはずの機体、そして自分の母親を殺した者、

搭乗者のコードネームをハンニバルと言つた。  
・  
・  
・  
。

## 黒兔の思いと狂氣の申し子の襲来（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回から、オリ展開です。

そして、いよいよ聖火の過去の一部が明らかになつていきます。

感想をくれた方、何時も読んでくれて『方本当に感謝感謝です。

スピノに関してはまだ武装を考え中です。

何か意見がありました感想欄の所に気軽に書いてもらえればありがたいです。

では、次回の更新でまたお会いしましょうーー！

## 聖火の世界の大まかな歴史 1945～2010まで（前書き）

本日は本編ではなく、次の話に進むため、読者の皆様が話について行かれるように聖火のいた世界に関する歴史みたいなものについて書きました。聖火の過去に関することも一応含まれています。

すみません、本編の方も急いで仕上げていますのでもう少し、お待ちください。

では、どうぞ…！

## 聖火の世界の大まかな歴史 1945～2010まで

1945年、第二次世界対戦集結後、連合国は原子爆弾の圧倒的破壊力とその有害性を考慮して、来るべき第三次世界大戦のためより効果的な兵器の開発を考え人型機動兵器の研究に着手した。だが、人型機動兵器の基礎理論が殆ど確立されていなかつたためその成果は著しくなくその研究自体の存続が危ぶまれていた。しかし、ある出来事によつて状況は日まぐるしく変化する。

1970年、国連に所属する古代の遺跡の発掘や調査をする機関が古の神々が眠る場所として恐れられ人類が未だ訪れたことの無かつた未開の地「神靈地」の遺跡の奥地にて封印されていた、全高40メートル強はある、顔が龍で鎧を纏つた石化した巨人が発見され国連によつて回収されたのだ。さらに遺跡の調査が進められる中、この巨人が世界を創造したと言われている靈獸神の骸を古代の超文明が特殊なテクノロジーによつてサイボーグ化させた、靈龍神器という物であることが明らかになつた。また、これと同時期にエジプトの王家の墓から他の生物の体内に根を伸ばし寄生することで成長し、靈龍神器の駆動系などで使われていた（のちに発覚）寄生植物の種が発見された。

この存在によつて直ぐに連合国を中心とした国連の常任理事国はこの石像を元にした機動兵器の開発に乗り出そうとしたが、前回の大戦のような惨劇を恐れた上層部の一部が、国連の平和維持委員会の監視の下、委員会が選択した科学者や技術者によつてしか開発・研究は行われないこと、そして来るべき宇宙への進出を目的に開発することを条件に始められることになつた。そして、1991年、この石像の巨人、靈龍神器を解析して生み出された特殊人口筋肉と特殊人工心臓、さらに寄生植に遺伝子操作を加えて生み出した新し

い種とナノマシーンを組み合わせて生まれたコンピューター制御可能な機械寄生植物マンドラゴラと、古代に絶滅した龍の体の一部と人工骨を使用して生まれた人型機動兵器 機械龍神器ドラゴン・タクティカル（DT）の開発に成功した。

しかし、兵器としての理由ではなく来るべき宇宙時代のために作られたためDTに関する全てのデータは国連の平和維持委員会のデータバンクに収められることになりさらにDTの製造も委員会によって規制された。だが、データを奪おうとする者の対処のために特別にDTを兵器としての運用を許された国連の平和維持委員会所属の傭兵部隊「アース」によつて対処させた。

それと同時期、当時食糧危機や世界の軍事バランスのためアメリカとソ連が冷戦状態の中になり、いつ両者が武力による戦争を始めてもおかしくない状況であった。しかし、その矢先にある事件が起つてしまつ。

1993年、保存されていたDTに関するデータが何者かの手によつて全世界に流出し、さらに「アース」によつて国連の平和維持委員会の幹部が暗殺され、その後、「アース」は行方を晦ましてしまうという「ノストラダムス世紀末始動事件」が発生する。この事件によつて得た情報を基に米ソ両国は戦争のためDTの生産に乗り出した。

この事件が起きてから数年が経ち、1998年にアメリカ中心の「西側」とソ連中心の「東側」によつて第三次世界対戦が勃発した。また、この戦争の時に両陣営が狙つていたある物があつた。靈龍神器の鎧に使われていた決して朽ちることない半永久的物質「永久の鋼」というもので通常の攻撃では決して破壊することができず、永久の鋼同士でしか破壊できないためこれを手に入れれば世界を制す

る」ことができる今まで言われていた。

しかし、この物質は加工が難しく特殊な方法でしかできないため神靈地の遺跡の壁画を解読し、その方法や靈龍神器に関することが綴られた「龍羅の書」という存在があることが発覚しその存在も並行して探された。そして、神靈地の入口であり古くから日本と交友関係が深く第一日本と呼ばれていたエルドラ王国という島国に「龍羅の書」があることが発覚、更に神靈地の遺跡の壁画の解読によつてその国に「永久の鋼」が大量に眠つてることが分かつた。

この事実により、戦いの舞台はエルドラ王国本土へと移つていつた。しかし、エルドラ王国は兵士を強くするため幼少の頃から濃密な軍事訓練と精神教育がなされていたため兵士一人、一人が一騎当千の猛者だつた。そのため両国相手に少ない戦力で百万以上の軍勢と長い期間戦うことが出来たのだ。

しかし、エルドラ国王の突然の乱心によつてエルドラの軍は壊滅、国王はその後、突然の急死。これと、同時に両陣営はエルドラ国本土を高い壁で覆いその上空に特殊な雲を発生させ内部と外部とを完全に遮断した。

この理由として、戦いが始まつて、戦場の兵士にある異変が起き始めていたためである。エルドラ人の死骸から採取した血液を飲むと、体の傷が癒え、更に重い病を患つていた兵士の症状もみるみる回復していくのだ。両陣営がこのことを不可解に思い調査した所、エルドラの民族の血液には人の病や、傷、衰えた身体の回復、さらに化学兵器で精神崩壊を起こした者の心も癒す効用があることが発覚した。しかし、殺して急いで血液を保存しなければ使い物にはならないことも同時に発覚した。

早速、エルドラ人の血液を採取するため両陣営の上層部の決定によるエルドラ人の虐殺が敢行された。しかし、兵士にはどうしても虐殺には抵抗があつたため彼らの食しているものに「殺すことを快樂にする」薬を混ぜ込み食べさせて、更に彼らを精神操作することによつてなんなく虐殺を行わせることに成功したのだ。そして、理不尽な正義のためにエルドラ民族は滅びの一途をたどることになった。

このことにより2001年までにエルドラ人の人口は5000万人から1万人強まで急速に数を減らした。だが悪夢は突如として終わることになったのだ。最後のエルドラ王国首都での大量虐殺を機に、突然兵士たちの精神操作の呪縛と薬の効用が同時に解けてしまつたのだ。兵士たちは自分たちが何をしてしまつたのかをその時初めて知ることになり、その場で嘔吐する者、倒れ込んだりする者が続出し、両陣営の兵士たちによる自らの罪を嘆く声で戦場は満ちたのであつた。

だが、彼らがいくら後悔しても最早、何もかもが遅すぎたのであつた。そんな彼等の前に突如として石化していない数十機の靈龍神器が現れ、怒りを露にして襲いかかってきたのだ。百万近くいた両軍勢は一夜の内にその圧倒的力の前に壊滅寸前までに追い詰められエルドラ王国からの撤退を余儀なくされた。

両軍勢の撤退後エルドラ王国本土は大量の兵士やエルドラ人の死骸とDTの残骸、そしてDTのDNMに汚染され最早人が住める状態ではなくなり、ほぼ壊滅と言つても過言では無かつた。

この戦いを表向きは「第一次エルドラ侵攻」と呼ばれるようになつたが実際はただの「大量虐殺」にすぎなかつた・・・・・。

その後、生き残ったエルドラ人（20歳以下ののみ、大人は殆どが死亡）は国内にバラバラになっていた戦争孤児をまとめて靈龍神器の搭乗者を中心とした子供だけの軍隊、「青春の武士」を結成、いざやつて来る一回目の侵略に備えて戦いの準備と自分たちの未来のため、国の復興を行なつた。

そして、六年後の2007年に靈龍神器の破壊を目的に「西側」と「東側」は和解、連合軍を結成し、今度は1千万近い軍勢でエルドラへの侵攻を開始した。この時の、連合軍側の兵士達は第一次エルドラ侵攻の事実を捏造して伝えられており靈龍神器、延いてはエルドラ人を、世界を滅ぼそうとしている悪の象徴と教育されていた。そのため、友のため、國のため正義の名の元にこれを擊破するように教え込まれており、軍全体の意志は皮肉にも靈龍神器という共通の敵によって統一され始めていたのだ。またエルドラ王国と交友関係が深かつた日本は、エルドラ人を裏切り者と断定してこの戦いに同時に参加していた。

戦いは、苛烈を極め三年間続き、表向きは靈龍神器の破壊に成功したと伝えられたが実際は破壊とまではいかず長期間の活動停止にすることに成功したにすぎなかつた。

そして、この戦いはエルドラ人4999万9900人と連合軍兵士、数百万人という大きな犠牲を持つて連合軍の大勝利として集結した。この戦いにより事実上エルドラ民族は壊滅、エルドラ王国は理不尽な正義（偽善）によつて滅亡した。しかし、僅かに生き残つたエルドラ人たちは、移動要塞「龍の巣」に乗り込み国外に脱出することに成功した。

「第一次エルドラ侵攻」と呼ばれるようになつたこの戦いだが何人かの兵士は敵に捉えられたときに全ての事実を知つたため、軍隊

を抜けた者もいれば、口封じるために殺害される者もいた。そして、この戦いの事実を知る者たちはこの戦いを「第一次エルドラ侵攻」とは呼ばず、<sup>チルドレンズ・ウォーズ</sup>畏怖の念と自分たちの行いへの懺悔として「子供たちの戦争」と呼んだ。

その後、エルドラで行われていたことの全ての事実を隠すために国連の本部をエルドラの首都に置き、この戦いに関するあらゆる事実を全て連合軍側に都合の良いものへと捏造した。そして、この戦いによつてまとまつた世界は、新国連を設立し戦争の惨禍で傷ついてしまつた物に対する支援と復興に取り組むことになった。

また日本はこの戦いにおいて多大なる功績を収めた事を考慮に国連の常任理事国に加盟された。

## 聖火の世界の大まかな歴史 1945～2010まで（後書き）

如何でしたでしょうか？

聖火の過去はかなりグロくて濃密な内容で長いかもしないのでこの作品が完成したらオリジナル作品として書こうと思っています。がそれは、この作品が終わつた後にアンケートを取つてから判断しようと思います。

では、また近い内にお会いしましょう！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6106v/>

---

IS vs DT 無人よ龍あれ（仮）

2011年12月15日23時45分発行